

大県郡条里遺跡 7

柏原市

大県郡条里遺跡 7

寝屋川水系改良事業(一級河川恩智川法善寺多目的遊水地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇二一年一〇月

2021年10月

公益財団法人 大阪府文化財センター

公益財団法人
大阪府文化財センター

柏原市

大県郡条里遺跡7

寝屋川水系改良事業(一級河川恩智川法善寺多目的遊水地)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人 大阪府文化財センター

序 文

大県郡条里遺跡は、大阪府柏原市の北端に位置する遺跡で、生駒山西麓の扇状地と旧大和川の自然堤防に挟まれた氾濫平野に立地します。この周辺は古くから河内と大和をつなぐ交通の要所であり、数多くの遺跡が確認されています。生駒山西麓の扇状地では縄文時代早期から集落が営まれ、隣接する大県遺跡では、古墳時代に鉄器生産が行われていました。古代には、東高野街道に沿って、多くの寺院が建立されていたことが分っています。

大県郡条里遺跡は、当センターによって平成23年度から、6次の発掘調査が行われてきました。その結果、縄文時代の河川や集落、古墳時代から奈良時代の水路、古代から近世まで続く条里型地割に基づいた耕作遺構などが発見されています。

今回の調査は一級河川恩智川法善寺多目的遊水地建設に伴う事業ですが、恩智川に沿った堤防となる区域で、恩智川がこの場所に定まって以降、最も河川の氾濫、増水による影響を受けやすかった地域と言えます。今回の調査でもこれまでと同様に、縄文時代晚期から古墳時代の流路や溝、古代末から中世にかけての水田や畠がみつかりました。数百年にわたって耕作地としての利用が続けられていた事や、この地域の土地利用のあり方がより明らかになりました。

最後になりましたが、発掘調査にあたって、大阪府都市整備部八尾土木事務所、大阪府教育庁、柏原市教育委員会をはじめとする関係各位より多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

今後とも埋蔵文化財調査へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和3年10月

公益財団法人 大阪府文化財センター
理事長 坂井 秀弥

例　　言

1. 本書は大阪府柏原市法善寺4丁目に所在する大県郡条里遺跡（調査名：大県郡条里遺跡20-1）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴い、大阪府都市整備部八尾土木事務所の委託を受け、大阪府教育庁文化財保護課の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 受託契約名、受託期間、調査及び整理体制は以下の通りである。

受託契約名：寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その7）発掘調査

受託期間：令和2年6月1日～令和3年10月29日

現地調査期間：令和2年6月1日～令和3年1月31日

整理期間：令和3年2月1日～令和3年10月29日

調査体制：事務局次長兼調整課長　岡本茂史　調査課長　岡戸哲紀

　　調査課長補佐　佐伯博光　主査　駒井正明、川瀬貴子

整理体制：（令和2年度）　事務局次長兼調整課長　岡本茂史　調査課長　岡戸哲紀

　　調査課長補佐　佐伯博光　主査　川瀬貴子

（令和3年度）　事務局次長　市本芳三　総務企画課長　亀井聰

　　調査課長　岡戸哲紀　　調査課長補佐　佐伯博光　主査　川瀬貴子

4. 遺構写真撮影は調査担当者が、遺物写真撮影は中部調査事務所写真室が行った。

5. 本書の作成は、第2章は駒井が執筆したものに川瀬が一部加筆し、それ以外の執筆と編集を川瀬が担当した。

凡　　例

1. 標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。使用単位はmである。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第VI系に基づき表示し、単位はmである。
3. 全体図及び遺構実測図の方位は、すべて平面直角座標系に基づく座標北を示す。
4. 現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007年度版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。記号、土色名、土質名の順に記述している。
6. 遺構名は、検出順に通し番号を付与したものと、整理時に番号を付与したものとがある。また、各調査区の調査時期が異なるため、同一遺構面であっても連続した番号にはなっていない。各々のアラビア数字の後ろに遺構の種類（例：1溝）をつけて表示している。
7. 本書では、調査区平面図は400分の1、遺構断面図は20分の1を原則として使用しているが、一部のものに関してはその限りではない。掲載挿図に関しては、縮尺を明記している。
8. 遺物実測図の縮尺は土器を4分の1、瓦・金属製品・石製品・木製品は2分の1を基本として掲載するが、一部のものに関しては、縮尺を変更して掲載している。須恵器は断面を黒色とする。掲載挿図に関しては、縮尺を明記している。写真図版の遺物は縮尺を統一していない。
9. 掲載遺物は通し番号をとれて表示し、本文、挿図、写真図版ともに一致する。

目 次

序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査・整理の方法	2
第2章 遺跡の位置と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3節 既往の調査	9
第3章 調査成果	11
第1節 基本層序	11
第2節 第3 a面・第4-2 b面の遺構と遺物	23
第3節 第5 a面の遺構と遺物	34
第4節 第6 a面の遺構と遺物	38
第5節 第7-1 a面・第7-4 a面・第8 a面・第9 a面の遺構と遺物	42
第6節 第10-1 a面・第10-2 a面の遺構と遺物	54
第7節 第11 a面・第12 a面の遺構と遺物	62
第4章 総括	69
第1節 遺構面の変遷	69
第2節 大県郡条里遺跡出土の蓮華文軒丸瓦	74
遺物観察表	77 ~ 80
写真図版	
報告書抄録	
奥 付	

挿 図 目 次

図 1 調査位置図	1	図 27 第 8 a 面平面図	46
図 2 調査区配置図・地区剖面図	3	図 28 第 9 a 面平面図	47
図 3-1 周辺の遺跡	8	図 29 第 7-1 a 層・第 7-2 a 層・54 流路出土土器 実測図	48
図 3-2 河内六寺位置図	9	図 30 第 7-1 a 層・第 7-2 a 層出土瓦・石器実測図	50
図 4 1 区南壁断面図	12・13	図 31 第 7-4 a 層・第 8 a 層・第 9 a 層出土遺物実測 図	51
図 5 1 区北壁断面図	14	図 32 第 10-1 a 面平面図	53
図 6 3 区南壁断面図	17	図 33 第 10-1 a 面遺構断面図	55
図 7 南北・東西壁断面对照図 南半	19・20	図 34 第 10-2 a 面平面図	57
図 8 南北・東西壁断面对照図 北半	21・22	図 35 第 10-2 a 面遺構断面図	58
図 9 第 3 a 面平面図	24	図 36 第 10-1 a 層・第 10-2 a 層出土土器実測 図	59
図 10 第 3 a 面遺構断面図	25	図 37 第 10-1 a 层・第 10-2 a 层出土石製品実測 図	60
図 11 第 4 a 面平面図	26	図 38 第 11 a 面平面図	61
図 12 第 4 a 面遺構断面図	27	図 39 第 11 a 面遺構断面図	62
図 13 第 4-2 b 面平面図	29	図 40 第 12 a 面平面図	63
図 14 第 4-2 b 面遺構断面図	30	図 41 第 12 a 面遺構断面図-1	65
図 15 第 3 a 層・第 4-1 a 層・第 4-2 a 層出土土器 実測図	31	図 42 第 12 a 面遺構断面図-2	66
図 16 第 3 a 層・第 4-1 a 层・第 4-2 a 层出土瓦・ 鏡貨・金属製品・木製品実測図	32	図 43 第 11 a 層・55 流路出土遺物実測図	67
図 17 第 5 a 面平面図	33	図 44 第 12 a 面合成平面図	69
図 18 第 5 a 面遺構断面図	35	図 45 第 11 a 面合成平面図	70
図 19 第 5 a 層・第 5 b 層出土土器実測図	36	図 46 第 10 a 面合成平面図	70
図 20 第 6 a 面平面図	37	図 47 第 7-1 a 面合成平面図	71
図 21 第 6 a 面遺構断面図	39	図 48 第 6 a 面合成平面図	72
図 22 第 6 a 层出土土器実測図	40	図 49 第 5 a 面合成平面図	72
図 23 第 7-1 a 面平面図	41	図 50 大県郡条里遺跡と周辺出土の蓮華文軒丸瓦	75
図 24 54 流路断面図	42		
図 25 第 7-4 a 面平面図	43		
図 26 第 7-4 a 面遺構断面図	44		

表 目 次

表 1 既往調査一覧表	10	表 3 遺物観察表	77～80
表 2 既往の調査との基本層序対応表	18		

写 真 目 次

写真1 機械掘削	5	写真6 大阪府教育庁立会	6
写真2 人力掘削	5	写真7 洗浄	6
写真3 平面実測	6	写真8 注記	6
写真4 遺構実測	6	写真9 実測	6
写真5 高所作業車による写真撮影	6	写真10 トレース	6

写 真 図 版 目 次

写真図版1 遺構	写真図版9 遺構
1. 1区第3 a面全景（南から）	1. 3区第8 a面全景（南から）
2. 1区第3 a面全景（北から）	2. 3区第9 a面全景（南から）
写真図版2 遺構	3. 3区第11 a面全景（南から）
1. 1区第4 a面近景（東から）	4. 3区第12 a面全景（南から）
2. 1区第4-2 b面検出状況（南西から）	写真図版10 遺構
3. 1区第4-2 b面歴溝断面（南東から）	1. 1区第10-1 a面全景（南から）
写真図版3 遺構	2. 1区第10-2 a面全景（南から）
1. 2区第5 a面南北全景（北から）	写真図版11 遺構
2. 2区第5 a面81畦畔（南から）	1. 1区 26溝・29溝・31畦畔（東から）
写真図版4 遺構	2. 1区 42溝・43溝（南西から）
1. 3区第5 a面全景（南から）	3. 1区第11 a面全景（北から）
2. 3区第6 a面全景（南から）	写真図版12 遺構
写真図版5 遺構	1. 2区第12 a面全景（北東から）
1. 1区第6 a面全景（北から）	2. 2区第12 a面近景（西から）
2. 2区第6 a面全景（北東から）	写真図版13 遺構
写真図版6 遺構	1. 2区 56溝断面（南東から）
1. 1区第6 a面近景（南西から）	2. 2区 55流路（東から）
2. 1区第6 a面近景（北東から）	3. 2区 55流路断面（東から）
3. 2区第6 a面全景（北から）	写真図版14 遺構
写真図版7 遺構	1. 1区南壁断面（北東から）
1. 1区第7-1 a面全景（南から）	2. 1区北壁断面（南から）
2. 2区第7-1 a面全景（北東から）	3. 3区南壁断面（北から）
3. 2区54流路断面（西から）	写真図版15 遺物
写真図版8 遺構	1. 第5 a層出土磁器
1. 1区第7-4 a面全景（南から）	2. 第4 a・5 a・5 b層出土瓦質土器
2. 2区第7-4 a面近景（北東から）	3. 第4 a層出土軒丸瓦

4. 第4 a層出土木製品

5. 錢貨

6. 第4 a層出土金属製品

写真図版 16 遺物

1. 第7-1 a・7-2 a層出土陶器

2. 54 流路出土瓦器・土師器

3. 第6 a層出土磁器

4. 第7-1 a・7-2 a層出土磁器

5. 第6 a層出土土器

写真図版 17 遺物

1. 第7-1 a～7-3 a層出土土器

2. 第7-1 a～7-3 a層出土瓦器

3. 第7 a層出土ミニチュア土器

4. 第7-1 a・7-2 a層出土平瓦

写真図版 18 遺物

1. 第7-4 a・7-4 b層出土陶器

2. 第7-4 a～9 a層出土須恵器

3. 第7-4 a～9 a層出土ミニチュア土器

4・5・7. 第7-4 a～9 a層出土土師器

6. 第9 b層出土土師器

8. 第8 a層出土瓦器

9. 第7-4 a～9 a層出土金属製品

写真図版 19 遺物

1・2. 第10-1 a層出土土師器

3・4・6. 第10-1 a～10-2 b層出土須恵器

5. 42 溝出土須恵器

7. 第10 a・11 a層出土須恵器(転用硯)

8～10. 第10-2 a～11 a層出土弥生土器

写真図版 20 遺物

1. 55 流路出土繩文土器・弥生土器

2. 第10-2 a・10-2 b層出土出土石製品

3. 第11-1 a層出土石器

4. 第10 a層以下出土石製品

第1章 調査の経緯と方法

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査の経緯

大県郡条里遺跡は柏原市の北端、大和川と石川の合流点から約2.0km北に位置する。生駒山地西麓の扇状地と旧大和川の自然堤防に挟まれた氾濫平野に立地する。南北約1.0km、東西約0.2kmに広がる遺跡である。

本調査は、大阪府都市整備部が進めている、一級河川恩智川法善寺多目的遊水地の建設に伴い実施された。一級河川恩智川法善寺多目的遊水地の建設予定地は約114,000m²に及ぶが、その範囲には大県郡条里遺跡、山ノ井遺跡が含まれる(図3-1)。そのため、平成14年度・15年度に大阪府教育委員会(現、大阪府教育庁)によって、事業予定地内の確認調査が実施された。この確認調査では、大県郡条里遺跡と山ノ井遺跡において、古墳時代から中世の遺構、遺物が確認された。その他、中世の包含層より縄文時代や弥生時代前期の遺物が出土し、また、下層にさらに古い遺構、遺物の存在が予想された。

この調査成果を受けて、公益財団法人大阪府文化財センター(以下、当センター)によって、一級河川恩智川法善寺多目的遊水地建設に伴う発掘調査が平成23年度から、山ノ井遺跡も含めると7次にわたり実施してきた。

今回の調査地は大阪府柏原市法善寺4丁目地内に所在し、多目的遊水地の越流堤部であり、事業地の西端にあたる。



図1 調査位置図

調査に先立って、当センターでは令和2年6月1日付で「寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う大県郡条里遺跡（その7）発掘調査」として、大阪府八尾土木事務所との間で委託契約を締結し、大阪府教育庁の指導の下、同日より令和3年1月31日まで現地調査を実施した。

その後は同契約により、当センター中部調査事務所において遺物整理作業を令和3年2月1日より令和3年7月31日まで実施し、令和3年10月に報告書の刊行と発送をもって終了した。

（2）調査の経過

今回の発掘調査は事業地の最も西側、恩智川沿いにあたり、南北に細長い形状をとる。旧恩智川護岸設備撤去工事や掘削土搬出の関係から、調査区を3つに分け、南側を1区、中央を2区、北側を3区とし、1区、3区、2区の順で調査に着手した（図1・2）。

掘削に際しては鋼矢板などによる土留は行わず、オープンカットの工法を行った。今回の調査地は恩智川の越流堤にあたるため、調査区西端は堤部を残して、西から東へ斜めに下がる法面を形成する必要があった。よって、調査面は下層に行くほど東にずれ、東西横断面が平行四辺形の形状となった。

発掘調査は盛土や表土、及び近世の耕作土層を重機で慎重に除去（写真1）した後、スコップやジョレン、両刃鎌などを使用して人力掘削を行った（写真2）。層序ごとに掘削を行い、遺構面、遺構の確認及び遺物の取り上げに努めた。

人力掘削では地層の堆積状況を調査区法面の断面で観察、分層し、地層堆積状況を写真撮影し、土層断面図を作成した。地層の堆積状況を観察した結果、耕作土や遺物包含層が累重している事が認められたため、必要と判断された遺構面で平面調査を実施した。

各遺構面では平板を使用して平面図を作成し（写真3）、各遺構面で検出した遺構は必要に応じて写真撮影を行い、遺構平面図や断面図を作成した（写真4）。主要な遺構面の全景写真を撮影する場合には高所作業車を使用した（写真5）。

発掘調査に使用した標高値や、断面図の記録に使用した高さは、調査区際に設置した4級基準点をもとにしており、高さ表記はすべてT.P.値である。基準点の打設、水準測量は隣接する（その6）調査が測量会社に委託しており、その委託で打設した4級基準点を使用した。

発掘調査開始（令和2年6月1日）から発掘調査終了（令和3年1月31日）までの間、大阪府教育庁文化財保護課による立会を各調査区で必要に応じて計4回受け、調査に関する指示、指導を受けた（写真6）。大阪府教育庁の立会を経て調査を終了した調査区ごとに、事業者である大阪府八尾土木事務所に引き渡し、本体工事に移行する事となった。

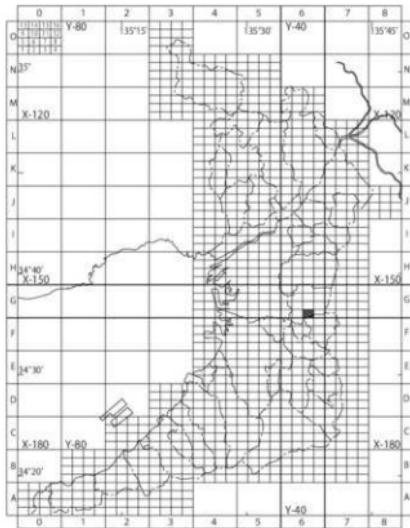
第2節 調査・整理の方法

当センターには『遺跡調査基本マニュアル』2010という発掘調査の統一や標準化をはかるマニュアルがあり、これによって発掘調査並びに整理作業を行った。

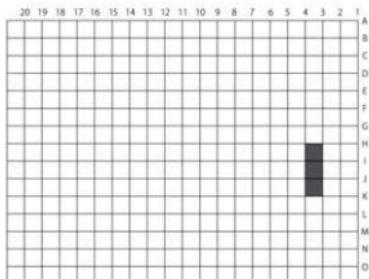
（1）調査の方法

調査区割 遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、当センターマニュアルに基づき平面直角座標系第VI系（世界測地系）を基準とした区画を使用した。これにのっとり、第I～第IVまでの大小4段階の区画を設定した（図2）。

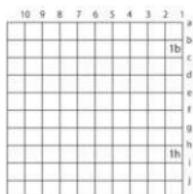
第I区画は、大阪府の南西端X = -192,000 m、Y = -88,000 mを基準とし、南北方向に6 km、



第 II区



第 III区



第 IV区

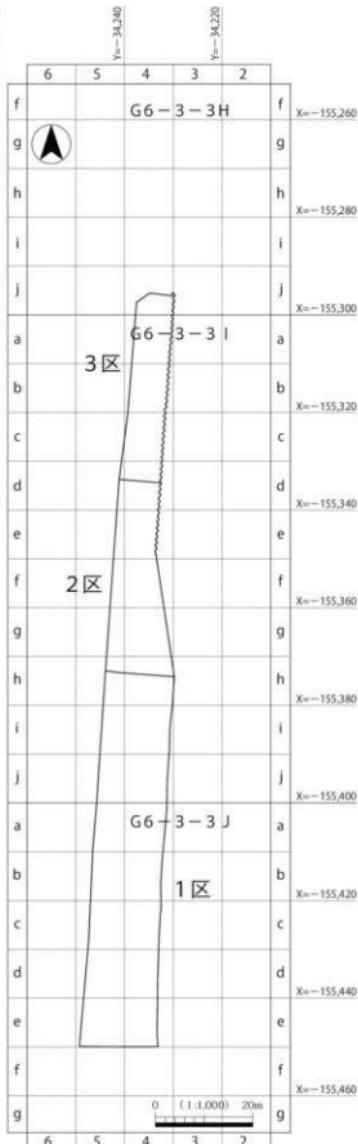


図 2 調査区配置図・地区割図

東西方向に8kmで府域を62区画に分割したものである。表示は、南西端を基点に北へA～O、東へ0～8とする。

第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北方向に1.5km、東西方向に2.0kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定する。表示は南西端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北西端を16と平行式で表す。

第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m単位で、南北15、東西20に区画する。表示は北東端を基点に、南へA～O、西へ1～20とする。

第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を10m単位で南北方向、東西方向ともに10に区画する。表示は北東端を基点に南へa～j、西へ1～10とする。

今回の調査地は第Ⅰ区画がG6、第Ⅱ区画が3、第Ⅲ区画が3Hから3Jにあたる。出土遺物を取り上げる際には、第Ⅲ区画から第Ⅳ区画までをラベルに記入した。また、遺構面や遺構の平面図作成にも区画名を表記するようにした。

なお、方位は座標北を使用し、高さはすべて東京湾平均海面(T.P.)からのプラス値を用いた。

調査名・調査区の設定・呼称 当センターでは、前述のマニュアルに従って遺跡名に調査年度を加えた調査名称を使用しており、今回の調査名は大県郡条里遺跡20-1となる。調査区名は、3つの調査区を南から1区、2区、3区とした。

遺構名 遺構の検出順に、1からの通し番号を遺構種別の前に付与した(例:1溝)。発掘調査時に実測や遺物取り上げが生じた遺構にのみ、遺構名を付与した。整理作業時にその遺構名は踏襲して使用し、それ以外に必要が生じた遺構は遺構面ごとに遺構名を付与した。従って、同じ遺構面でも遺構番号は連続していない。

記録作業 今回の調査区は立地状況などから、ラフターカーレーンなどによる航空測量は行っていない。主要な遺構面の全景写真を撮影する場合には高所作業車を使用した(写真5)。写真撮影に使用したカメラはAPS-Cデジタル一眼レフカメラと中型フィルムカメラ(6×7白黒、6×7カラーリバーサル)である。

発掘調査に使用した標高値や、断面図の記録に使用した高さは、調査区際に設置された4級基準点をもとにしており、高さ表記はすべてT.P.値である。基準点の打設、水準測量は隣接する(その6)調査が測量会社に委託しており、それで打設した4級基準点を使用して手計りで遺構実測図を作成し、レベル測量を実施した。

遺構面は平板測量で100分の1の縮尺で平面図を作成し、必要な場合にはレベル測量を行い、高低差など地形の変化を記録した。また、個別遺構の平面図、断面図、立面図や出土状況図については、必要に応じて、10分の1、20分の1の縮尺などで適宜作成した。土層観察用の断面に関しては1区外周の北壁面、南壁面、3区南壁面で20分の1縮尺の断面図を作成した。

基礎整理作業 調査と並行して、現場事務所にて基礎整理作業を実施した。発掘調査で出土した遺物は洗浄(写真7)し、調査名や登録番号を注記し(写真8)、出土調査区、層位、出土遺構などの情報を検索しやすいようにMicrosoft社のExcelを用いて台帳を作成した。

現場で記録した遺構実測図については、隣接する調査区との整合性を確認するなどの基礎的な整理を実施した。また、撮影したフィルム写真はアルバムに収納した。デジタルカメラで撮影した写真はハードディスクに保存し、必要情報(調査区、層位、遺構名など)のデータを入力して写真を貼り付けたExcel形式の台帳を作成し、遺構写真的整理を行った。

(2) 整理の方法

台帳作成 基礎整理作業から継続して、遺物台帳や写真台帳を作成した。写真台帳は、写真図版に掲載する写真を決定すると、掲載写真番号なども登録してどの写真を使用したか検索できるようにし、今後の活用に対応できるよう努めた。挿図や写真図版に使用した遺物は、実測番号や掲載遺物番号、収納コンテナ番号なども遺物台帳に入力し、整備した。

遺構挿図作成 遺構については、現場で実測した原図をもとに、Adobe 社の IllustratorCS6 を用いてデジタルトレースで調査区平面図を作図した（写真 10）。平面図や主要遺構については現地で作成した実測図を編集し、遺構挿図を作成した。

遺構挿図の合成は Adobe 社の PhotoshopCS6 を用いて行い、墨書きは Adobe 社の IllustratorCS6 を用いてデジタルトレースを行った。

遺物の抽出・実測・復元・挿図作成 洗浄と注記作業を終えた遺物は、同じ遺構や隣接する地区ごとに接合を試み、より原形を復元できるように努めた。その中から報告書に挿図や写真として掲載する遺物を抽出し、遺物実測図を作成した（写真 9）。また、一部の遺物に関しては拓本を探った。

遺物実測図は遺構、包含層ごとにレイアウトを作成し、合成は Adobe 社の PhotoshopCS6 を用いて行った。墨書きは Adobe 社の IllustratorCS6 を用いてデジタルトレースを行い、遺物挿図を作成した。

写真図版作成 現地で撮影した遺構面や個別遺構、断面の写真の中から、報告書に掲載するものを選別した。そのフィルム写真のスキャニング作業を行い、デジタルデータ化して写真図版を作成した。

また、遺物は報告書に掲載するものを選別して、どのように載せるか決定し、中部事務所写真室で写真撮影を行った。その写真をデジタルデータ化して写真図版を作成した。

原稿執筆・編集 その他、報告書作成に必要な、周辺地域や既往の調査成果を記載した文献の収集や、原稿執筆のための基礎資料を作成した。以上の作業と併行して調査報告の原稿を執筆し、編集作業を実施して報告書を完成した。入稿後、校正作業を経て本書の刊行をもって完了した。

収納 編集作業と併行して、出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類した。掲載遺物は挿図番号や写真図版番号が確定すると、個々の遺物に添付した掲載遺物ラベルに必要情報を記入し、掲載順にコンテナに収納作業を行った。未掲載遺物についても登録番号順に収納し、台帳に収納先を入力した。

遺構実測図についても図面番号を付与して番号順に図面ケースに収納した。遺物実測図は挿図番号順に並べ替え、図面ケースに並べ替えた。



写真1 機械掘削



写真2 人力掘削



写真3 平面実測



写真4 遺構実測



写真5 高所作業車による写真撮影



写真6 大阪府教育庁立会



写真7 洗浄



写真8 注記



写真9 実測



写真10 トレイス

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大県郡条里遺跡は大阪府の中央部、柏原市法善寺2・4丁目及び平野1丁目の市域北端に所在する遺跡で、大和川と石川との合流地点から約2.0km北に位置する。この大和川は宝永元（1704）年に付け替えられたもので、現在の長瀬川や玉串川などにその痕跡をみる事ができる。

当遺跡は、東に生駒山西麓からの扇状地と、西に旧大和川が形成した自然堤防に挟まれたところにある。遺跡の南半を蛇行し、北半西辺を北流する恩智川は、元来は生駒山地から流れる小河川が合流して北へ流れる自然河川であった。しかし、戦後に改修されて東西、南北と直角に曲がり、その後北西にのびて現流路に戻る、人工河川となっている。

遺跡西側を北流する恩智川から生駒山西麓にかけては、地表面に条里型地割を示す方形区画が良好に遺存する。また、大和川と石川との合流地点は水運の要衝とともに、この生駒山西麓に沿う東高野街道が長尾街道・奈良街道と交差する地点でもあった。

第2節 歴史的環境

ここでは、当遺跡に隣接する遺跡の調査成果を中心に歴史的変遷を紹介する（図3-1）。

縄文時代 大県郡条里遺跡の南東に位置する大県遺跡では、縄文時代早期の押型土器や石器、縄文時代後期の石圓い遺構がみつかっており、同時期の集落の存在を想定する。集落はその後、扇状地縁辺へ拡大したと考えられ、東高野街道付近では縄文時代後期末から晩期の遺構を検出し、多数の土器や石器が出土した。

弥生時代 恩智遺跡は弥生時代中期に集落活動を盛んにしたが、大県遺跡でも中期の竪穴建物やサヌカイト集積土坑、後期の竪穴建物を確認している。また、線刻で描かれた手柄をもった人物と、犬と思しき動物をかたどった粘土を貼りつけた中期の土器片が平野遺跡から出土した。神宮寺遺跡では中期の土器棺墓や、後期の竪穴建物を検出した。

後期には高尾山山頂遺跡に高地性集落が営まれ、同遺跡の南側の谷から多紐細文鏡がみつかっている。

古墳時代 古墳時代初頭には神宮寺遺跡で河川が検出され、平野遺跡では初頭の遺物が出土しており、生駒山西麓沿いに当該時期の集落が点在したと推測される。

弥生時代中期から後期にかけて中心的な集落となった大県遺跡では、隣接する大県南遺跡とともに鍛冶関連の遺構・遺物が多数みつかった。大県遺跡一帯に、鍛冶集団の集落があった可能性がある。また、韓式系土器も顕著に出土する事から、鍛冶集団と渡来人との関係も指摘される。

大県遺跡の東側、生駒山地中腹に築かれた平尾山古墳群平野・大県支群では、^{菅原式}ミニチュア炊飯具といった渡来系氏族を彷彿させる副葬品や鉄滓などが出土し、同古墳群と大県遺跡との関連が指摘されている。

古代 神宮寺遺跡においても、古墳時代後期の土坑・溝を検出している。

飛鳥時代から奈良時代にかけては、『続日本紀』天平勝宝8（756）年に孝謙天皇の難波宮行幸時に

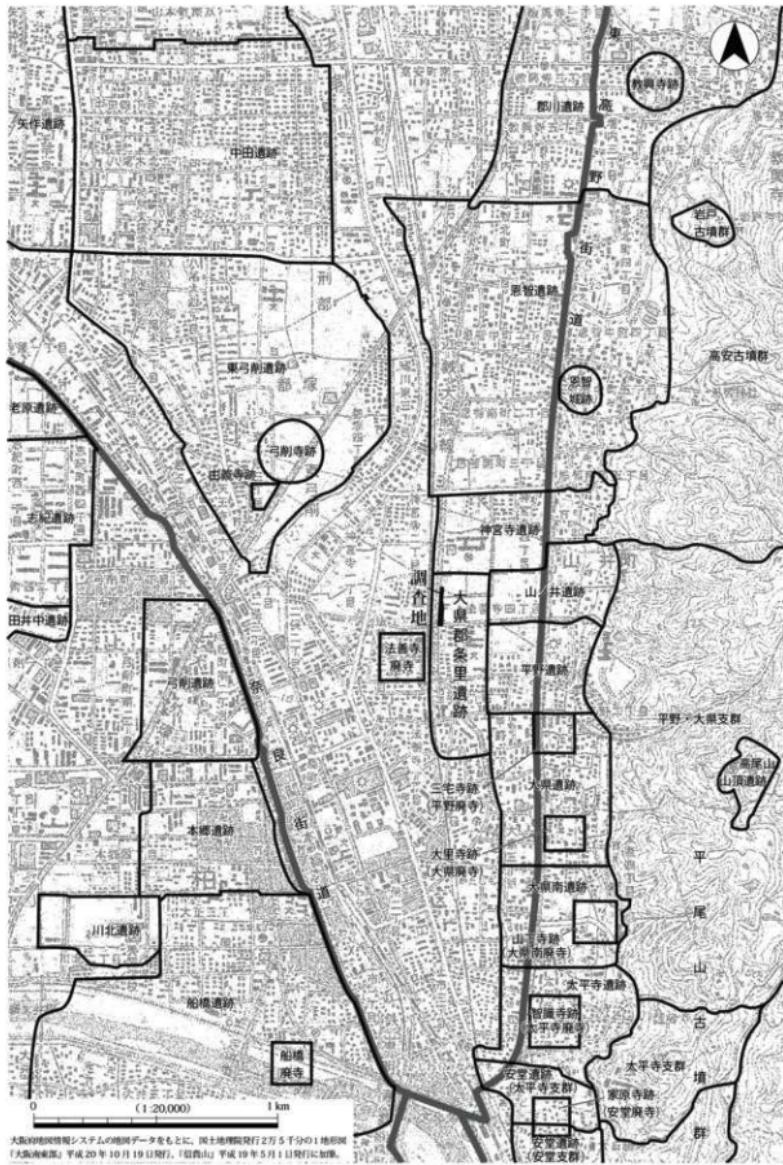


図3-1 周辺の遺跡

参拝が記された、烏坂寺、家原寺、智識寺、山下寺、大里寺、三宅寺の「河内六寺」と称される寺々が生駒山西麓に沿って建立された。『続日本紀』によれば、聖武天皇や称徳天皇はこれらの寺院にたびたび行幸したと言う（図3-2）。

この六寺院のうち、大県南遺跡に近接する大県南廃寺は河内六寺の山下寺に、大県廃寺は井戸から「大里寺」と墨書きされた土師器皿が出土した事から大里寺にそれぞれ比定される。

また、高井田廃寺は、周辺に「戸坂」の字名が残る事や「烏坂寺」と書かれた墨書き土器が出土している事から、烏坂寺と考えられている。この寺跡は、調査で塔跡、金堂跡、講堂跡などが検出され、河内六寺の中で伽藍配置がわかる唯一の寺院である（高井田廃寺は家原寺跡より約0.5km南に位置する）。

一方、大県遺跡では奈良時代の鍛冶関連遺構や、古代東高野街道の側溝の可能性がある溝を検出し、萬年通寶（760年初鑄）や神功開寶（765年初鑄）が9枚出土した。

中世 山ノ井遺跡の扇状地上の調査では鎌倉時代の石垣を検出し、10世紀末から15世紀前半に至る土師器皿をはじめ、黒色土器、瓦器、陶磁器などが多く出土した。神宮寺遺跡では、14世紀の掘立柱建物や土坑などが検出されている。

近世 付け替え以前の大和川は、たびたび洪水を繰り返した。寛文6（1666）年から10年ほどで川底が周囲の土地より数メートルも急激に上がった結果、延宝2（1674）年には法善寺前二重堤にて決壊が起り、以後『堤切所之覚付箋図』によれば、洪水が頻繁に下流域で発生した事がうかがえる。宝永元（1704）年に川が付け替えられた後は、新田開発が進むとともに、河内平野は綿花の大産地として知られるようになる。



図3-2 河内六寺位置図

第3節 既往の調査

平成14・15年度、大阪府教育委員会が恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地内の確認調査を実施し、弥生時代から中世の遺物が広範囲に出土する事を確認した。その結果、事業予定地内を調査する事が決定し、平成23年度から令和2年度にかけて、6次にわたって調査が実施されている（図1）。

平成23年度～平成26年度の（その1）・（その2）調査では、縄文時代後期後葉から晩期中葉頃の河川を検出し、河川内から滋賀里I式の深鉢が出土した。河川は縄文時代晩期中葉には埋没し、縄文時代晩期末頃の竪穴建物の検出から居住域となった事が分った。さらに10世紀～中世にかけての、南北に長い長地型条里水田を検出した。

平成27年度の（その3）調査と平成28年度の（その4）調査では、小規模ながら縄文時代晩期の遺構や古代から中世にかけての条里地割が確認されている。

表1 既往調査一覧表

調査機関	調査次数	調査期間	主な調査成果	文献
大阪府教育委員会		2003.12.20～2004.04.21	中世の溝、落ち込み検出、縄文～中世の遺物出土	1
(公財) 大阪府文化財センター	(その1) 調査	2011.06.01～2012.11.30	縄文後期の河川、古代～中世の条里地割、縄文～中世の遺物出土	2
(公財) 大阪府文化財センター	(その2) 調査	2013.04.10～2014.09.30	縄文後期の遺物、古代～中世の条里地割、縄文～中世の遺物出土	3
(公財) 大阪府文化財センター	(その3) 調査	2015.08.03～2015.11.09	縄文後期の遺構、古代～中世の条里地割、縄文～中世の遺物出土	4
(公財) 大阪府文化財センター	(その4) 調査	2016.12.01～2017.02.21	古代～中世の条里地割、弥生～中世の遺物出土	6
(公財) 大阪府文化財センター	(その5) 調査	2018.04.02～2020.05.31	古代～中世の条里地割、縄文～中世の遺物出土	8
(公財) 大阪府文化財センター	(その6) 調査	2019.10.01～2021.01.29	縄文後期の遺構、古代～中世の条里地割、縄文～中世の遺物出土	9

* 文献番号は以下の参考文献に対応する

平成30年度から平成31年度の(その5)調査では、古代～中世の条里地割の変遷がより明確になった。北側のその1・その2調査区が事業予定地北半の調査とすれば、令和元年度～令和2年度の(その6)調査は、(その5)調査と併せて事業予定地南半の大規模な調査となった。北端が坪境にあたるため、坪境を挟んでの南北の基本層序の違いを追える事となった。また、条里地割も坪境より北では南北長地型、坪境より南では東西長地型である事が明確となった。

また、条里制施行以前では、自然地形の高低に応じて古墳時代の溝や縄文時代晩期の河川が、広範囲に広がっている事が確認された。

大県郡条里遺跡は現地形においても条里地割がよく残るが、上記のように、調査によって少なくとも平安時代から現在に至るまで長期間にわたり、連鎖と地割がほぼ踏襲され、耕作が続けられてきた事が明らかとなった。

参考文献

- 1.『大県郡条里遺跡確認調査概要』2005 大阪府教育委員会
- 2.『大県郡条里遺跡』2013 (公財) 大阪府文化財センター
- 3.『大県郡条里遺跡2』2015 (公財) 大阪府文化財センター
- 4.『大県郡条里遺跡3・山ノ井遺跡』2016 (公財) 大阪府文化財センター
- 5.『大県遺跡・東高野街道』2016 大阪府教育委員会
- 6.『大県郡条里遺跡4・山ノ井遺跡2』2017 (公財) 大阪府文化財センター
- 7.『山ノ井遺跡3』2018 (公財) 大阪府文化財センター
- 8.『大県郡条里遺跡5』2020 (公財) 大阪府文化財センター
- 9.『大県郡条里遺跡6』2021 (公財) 大阪府文化財センター (刊行予定)

第3章 調査成果

第1節 基本層序

当調査区西端は、現恩智川の堤防にあたるため堤防造成時に擾乱され、基本層序を確認できなかった。また、東端は隣接する（その1）・（その5）・（その6）調査区が先行して調査されており、壁断面実測は実施していない。そこで、南北方向の基本層序は、（その1）・（その5）・（その6）調査区の西壁断面の層序を参考とした。東西断面と南北断面の対照は図示した（図7・8）。

南北長約160m、東西幅約15mの細長い調査区を3つに分け調査しており、南端の1区南壁（図4）、1区と2区の境にあたる1区北壁（図5）、2区と3区の境にあたる3区南壁（図6）の3箇所で東西方向の地層断面図を作成し、基本層序の把握に努めた。

また、2区のX = -155.360付近は坪境にあたるため、それを境とした北と南では堆積状況や各層の標高が異なる。その他、昭和20年代まで旧恩智川が坪境を東西に流れていたため、屈曲の内側と外側では堆積環境の違いもあり、大きく地層が異なった。坪境より北は（その5）・（その6）調査区と、坪境より北は（その1）調査区と堆積状況が似るため、それぞれの基本層序を参考にして（その7）調査区の基本層序を作成し、対比を一覧表にした（表2）。

既往の調査では、氾濫堆積層とその上部の耕作土層を含む土壤化層をセットとして層序を捉えている。氾濫堆積層上部の耕作土層や古土壤層と言った土壤化層をa層、母材である水成層をb層と呼称する。以下に基本層序の概要を述べる。遺構面は層の上面を層と共通した名称とする（例：第3a層の上面は第3a面）。枝番号やa・bを付して分けた層を一括して呼称する場合は「第○層」とする。

第1層 1区南側でのみ残存し、観察できた。第1a層は上部がにぶい黄橙色～灰黃褐色、下部が暗灰黄色の極細砂～細砂混じりシルトの耕作土層である。南にいくほど砂質が強まる。厚さは0.2～0.3mである。第1b層は黄灰色の中砂～細砂とシルトが混じる。人為的な攪拌を受けており、洪水堆積層を整地した地層と思われる。部分的に薄く堆積する。

第2層 a層は1区でのみ残存し、第2～4b層のみ2区でも残存している。第2層は第2～1a層から第2～4a層に分かれるa層とその最下部のb層で構成されるが、第2～1a層と第2～2a層など層別が明確でない。

第2～1a層は明黄褐色細砂で、耕作土層である。第2～2a層は黄褐色～暗灰黄色シルトで、島嵐上の耕作土層である。第2～3a層は黄灰色～にぶい黄褐色の細砂質シルトの耕作土層である。第2～4a層は黄褐色極細砂～細砂混じりシルトで、かなり粘質である。

第2～4b層は第2～4a層直下のにぶい黄褐色極細砂～細砂と暗灰黄色シルトが互層となって、厚さは0.3～0.5mと厚く堆積する。北にいくと互層が乱れ、シルトがブロック状に混じる。

第1層から第2～4b層までは中世末か近世以降の堆積であるため、重機で掘削した。

第3層 第3層は1区と2区の南半まではみられるが、2区の北半と3区では削平を受けていた。a層のみを確認した。第3a層は灰色で、中砂～細砂混じりシルトの耕作土層である。

1区では第2～4b層に覆われているので、第3層上面はほとんど削平を受けていない。上面は北から南までほぼT.P.+12.4～12.5mと平坦である。第3層は瓦質土器や陶磁器など中世後半の遺物を含む。

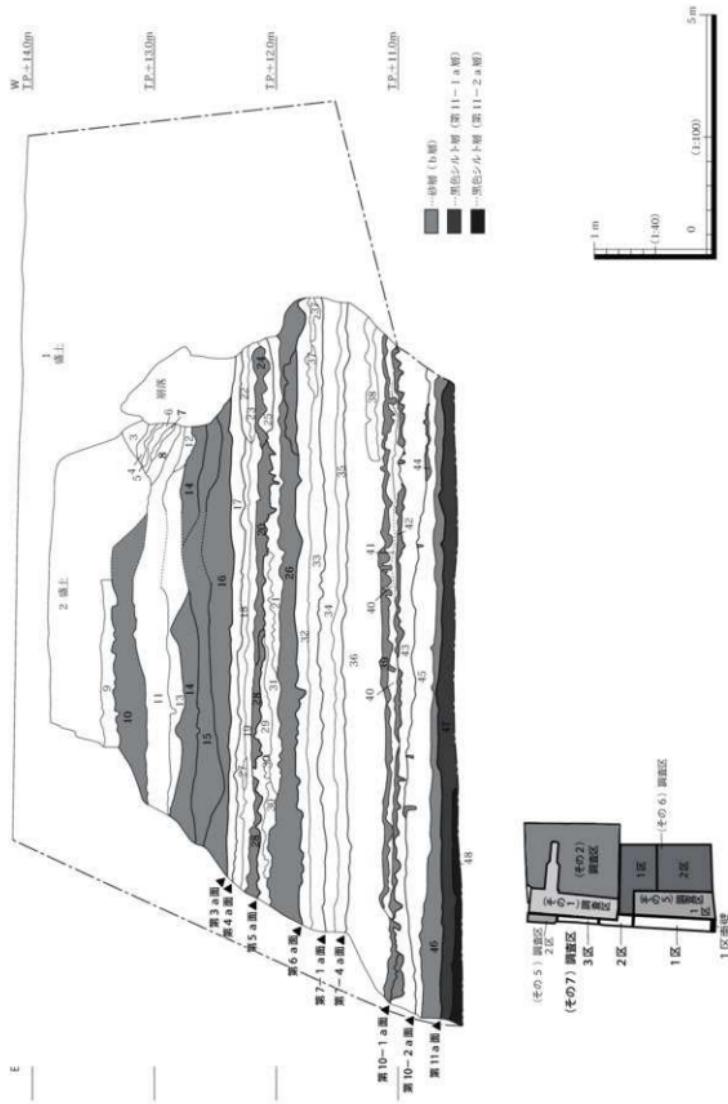


図4 1区 南壁断面図

〈1区南壁断面図 土色)

- 1 2.5Y4/3 オリーブグリーン 緩砂一層 滲上
- 2 10Y6/2 黄褐色 緩砂 2.5Y5/2 前期黄褐色 シルトブロックが散じる 滲上
- 3 2.5Y6/4 にぶい黄 緩砂時にシルトブロックが混じる 滲上
- 4 2.5Y5/4 黄褐 緩砂 滲上
- 5 2.5Y5/4 黄褐 緩砂にさざがシルトが散じる 滲上
- 6 2.5Y4/4 オリーブグリーン 緩砂 滲上
- 7 2.5Y4/3 オリーブグリーン 緩砂 10がけアリした所 滲上
- 8 10Y8/4-2 黄褐 緩砂 シルト 第1層
- 9 10Y8/6 黄褐 緩砂 第2-1・2-1 b層
- 10 10Y8/6 黄褐 緩砂 シルト-粘土-砂質
- 11 2.5Y5/4 にぶい黄 緩砂 緩砂の漂砂
- 12 2.5Y5/4 黄褐 緩砂 第2-3 a層
- 13 10Y8/5-8 黄褐 緩砂-漂砂シルト-水平安積 第2-4 a層
- 14 2.5Y5/6 黄褐 緩砂-漂砂シルト ウミナリ 第2-4 b層
- 15 2.5Y6/3 にぶい黄 緩砂と 2.5Y5/2 漂砂 緩砂が互層 ラミニエーション 第2-4 b層
- 16 2.5Y4/3 オリーブグリーン 緩砂と 10Y6/4 にぶい黄 緩砂の互層 ラミナリ 第2-4 b層
- 17 2.5Y4/1 黄色 シルト 第3 a層
- 18 5Y4/1 黄色 シルト 第3 a層
- 19 5Y4/1 黄色-緩砂シルト 第4-1 a層よりやや砂質つよい 第4-2 a層
- 20 2.5Y5/4 黄褐 緩砂 5Y4/2 (灰)オリーブグリーンシルトが混じる 褐み込み3c4h 第4-2 b層
- 21 5Y4/1 黄色 緩砂シルト 第5 a層 この中に黑色物濃化部分ある
- 22 2.5Y5/2 黄褐 緩砂シルト 近世埋 滲上か
- 23 5Y5/2 (灰)オリーブグリーンシルト 近世埋 滲上か
- 24 5Y4/3 黄オリーブグリーンシルト 近世埋 滲上か
- 25 5Y4/1 黄色 近世埋 滲上か
- 26 3Y6/1 黄 緩砂 第5 b層
- 27 3Y5/1 黄 緩砂シルト 西側底上部分
- 28 3Y4/2 黄オリーブグリーン 緩砂が漂じる 第4-2 b層 西側底上部分
- 29 3Y4/3 黄オリーブグリーン 緩砂上部分
- 30 2.5Y5/4 黄褐 細砂-中砂 緩砂-漂砂
- 31 2.5Y5/2 黄褐 緩砂 シルト-漂砂
- 32 7.5Y4/1 黄 緩砂-漂砂シルト 第6-1 a層 第6-1 a層
- 33 7.5Y4/2 黄オリーブグリーン 緩砂シルト 第6-1 a・2 a層 第6-1 a層
- 34 5Y4/2 黄オリーブグリーン 粘土-粘土質 第6-1 a層
- 35 10Y4/1 黄 細砂-漂砂 カシシタムシ成虫が混じる 第7-1 a層
- 36 5Y2/2 オリーブグリーン 細砂-漂砂 第7-1 a層 上層の3-4 a層の可能性がある
- 37 2.5Y6/3 にぶい黄 緩砂シルト
- 38 2.5Y4/1 黄色 細砂-漂砂
- 39 10Y8/6 黄褐 細砂-漂砂 第7-4 b層
- 40 5Y4/1 黄 緩砂-漂砂 第8-8層第9層の境界は灰色的 第8層の方が少々土色が濃く、第7-4 b層の漂砂層が白い
- 41 5Y5/1 黄 緩砂シルト 第9 a層 第8-8層と第9層の境界は灰色的 第8層の方が少々土色が濃く、第7-4 b層の漂砂層が白い
- 42 2.5Y5/3 黄褐 細砂-漂砂
- 43 2.5Y6/1 黄オリーブグリーン シルト 第10-1 a層
- 44 2.5Y6/4 にぶい黄 シルト-漂砂シルト-漂砂 第10-1 b層
- 45 2.5Y5/4/1 黄オリーブグリーン シルト 第10-2 a層
- 46 3Y4/1 黄 シルト 水成シルト層 第10-2 b層
- 47 3Y3/1 オリーブ黒 シルト 第10-2 b層
- 48 2.5Y3/1 黄褐 シルト 黑砂層 第11-1 a層

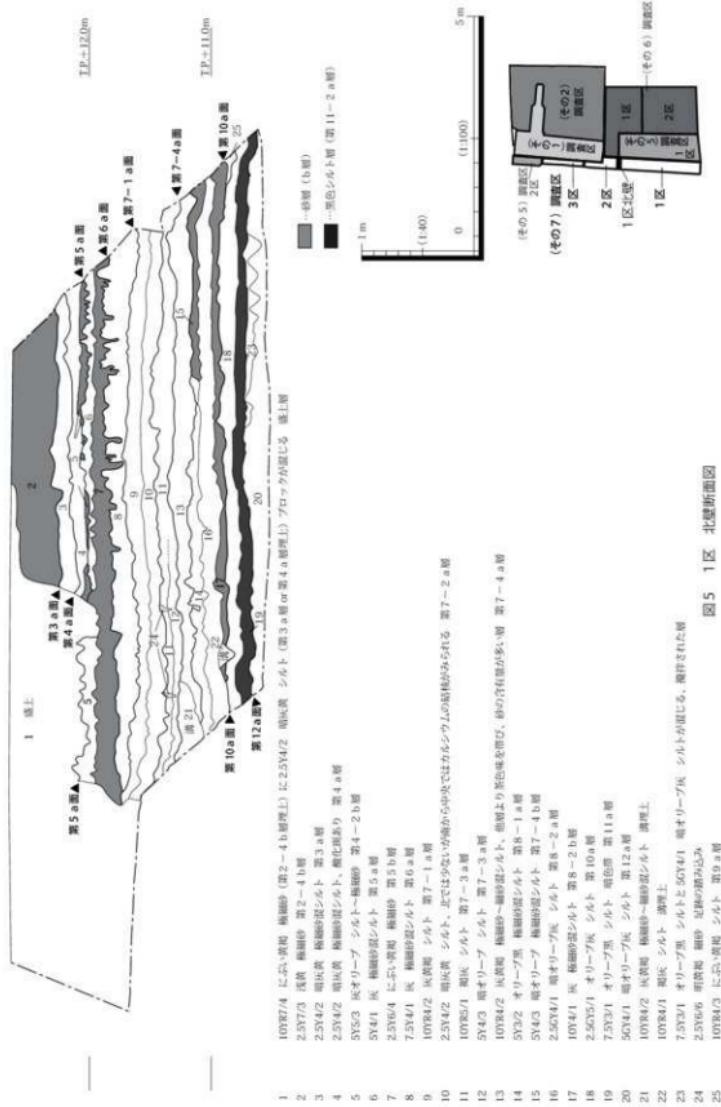


図5 1区 北側断面図

第4層 第4層のa層は南側では2つに分かれるが、北側では1層となる。3区では第4a層まで削平されていた。その下部で上半分が細砂、下半分がシルトのb層からなる。第4-1a層と第4-2a層の間にb層は認められなかった。

第4-1a層は灰色～暗灰色の中砂～細砂混じりシルトの耕作土層である。第4-1a層上面を第4a面とする。第4-2a層は灰色～緑灰色の中砂混じりシルトの耕作土層で、第4-1a層より砂質が強い。厚さはいずれも0.1m程度である。上面の高さはT.P.+12.1～12.4mで、南が高く北が低い地形である。

第4-2b層は灰オリーブ～青灰色の細砂～シルトで、ラミナのある洪水堆積層である。ラミナはかなり乱れ、足跡の踏み込みがみられる。下部のシルトの上面には土壤化の痕跡は一切なく、一回の洪水で堆積したものと言える。厚さは0.1～0.2mである。第4層も瓦質土器など中世後半の遺物を含む。

第5層 第5層は最上部の砂粒を含むa層と下部のb層に分かれる。第5a層は3区では堆積が厚く2つに分かれたが、それ以外は1つの層と認識した。

第5a層は、灰色細砂混じりシルトの耕作土層で、灰オリーブ色細砂のブロックを含む。上面の高さはT.P.+11.9～12.1mで、南が高く北が低い。厚さは0.1～0.2mである。第4-2b層で覆われていたため第5a層上面は削平を受けず、1区から3区のすべての区で畦畔・溝などが検出されている。下面の土壤化はさほど進行していない事から、比較的短期間で埋没したものと思われる。

第5b層は、厚さが平均0.2～0.3mと比較的厚く堆積していた。灰オリーブ色細砂～灰色細砂混じりシルトのブロックからなり、ブロックの中にはラミナが残るものもある。第5層は瓦質土器などを含むが、第4層より若干古い遺物が混じる。

第6層 a層のみからなり、第6a層はわずかに細砂を含む灰色シルトの耕作土層である。第6a層以下の層はシルト～粘質土が主体となる。厚さは0.1～0.2mで、1区南側では第6-1a層と第6-2a層に分かれたが、北にいくほど層厚が薄くなり、分層できなかった。第6-1a層上面を第6a面とする。上面の高さはT.P.+11.7～11.8mで、南が高く北が低い、東が高く西が低い地形である。

第5b層で覆われているので、第6a層上面はほとんど削平を受けておらず、1区から3区のすべての区で畦畔や畝溝、耕作具痕、人や牛の踏み込みを検出した。第6層の遺物は13世紀後半～14世紀前半の瓦器などが主体となる。

第7層 第7層は坪境より北では厚く堆積し、3層に分かれるa層と、最下層のb層から構成される(隣接する(その5)調査区ではa層を4つに分層しているが、当調査区では第7-2a層と第7-3a層、もしくは第7-3a層と第7-4a層の判別が困難で、合致すると想定する層名のみ隣接区から踏襲した。よって、第7-3a層は1区北壁断面では分層しているが、第7-2a層もしくは第7-4a層として掘削している)。ただし、坪境を超えた3区では第7層の堆積は極めて薄く分層できない。

第7-1a層は灰色～灰オリーブ色の細砂混じりシルトで、わずかに細かい植物遺体を含む耕作土層である。上面の高さはT.P.+11.6～11.7mで、厚さは0.1mである。上面では、畦畔の痕跡を検出した。

第7-2a層は灰色の中砂混じりシルトで、炭酸カルシウムの結核が上半部に目立つ耕作土層である。上面の高さはT.P.+11.5～11.6mで、厚さは0.1mである。

第7-4a層は暗オリーブ灰色～灰黄褐色の粗砂混じりシルトの耕作土層である。砂質の強いa層であり、上層(第7-2a層もしくは第7-3a層)との差異は、北にいくほど砂質が強くなり明瞭である。上面の高さはT.P.+11.5mで、厚さは0.3mである。上面では、畦畔や溝の痕跡を検出した。

第7-4 b層は1区の南から北東部にかけて部分的に堆積していた。青灰色～灰白色の粗砂～細砂で、かなり人为的に攪拌されている。第7層の遺物は13世紀から14世紀前半の瓦器・土師器などが主体となるが、第7-4 a層以下には12世紀前半代の瓦器も含まれる。

第8層 1区と2区では第8層と第9層の分層が困難で、第8 a層上面の調査も行っていない。1区北壁でのみ第8-1 a層と第8-2 a層を識別した。3区では第8層と第9層の間にわずかに砂層（第8 b層？）が認められる。

第8-1 a層は灰色極細砂混じりシルトの耕作土層である。第8-2 a層は暗オリーブ灰色極細砂混じりシルトである。第8-2 b層は灰色極細砂混じりシルトで部分的に存在する。

坪境以北では第7層の堆積が薄かったが、3区では第8 a層が厚さ0.2mと厚く堆積し、その結果、第8層以下は標高も北が高くなり、これまでと逆転する。上面の高さは1区南端でT.P.+11.1m、3区でT.P.+11.4～11.5mと、第7層までの南が高い地形から、北が高く南が低い地形へと変化する。第5 a層から第8 a層までは瓦器が含まれているが、第8 a層から第9 a層になると11世紀後半から12世紀前半の遺物が主体となる。

第9層 a層と黄褐色極細砂～細砂のb層で構成される。第9 a層は暗灰黄色シルトの耕作土層である。1区と2区では第8層と第9層の分層が困難で、第9 a層上面の調査も行っていない。1区ではa層とb層合わせて0.1m程の層厚であったが、3区では第9 a層が0.2mと比較的厚く堆積している。第9 a面の高さはT.P.+11.3～11.4mである。

1区南半でのみ、にぶい黄色細砂の第9 b層を確認した。第9 b層は厚さ0.05～0.1mであるが、遺物の含有量が多い。遺物は瓦器は含まれず黒色土器や須恵器が目立つようになる事から、瓦器出現以前の古代末に属すると考えられる。

第10層 第10層は2層に分かれるa層とその間、最下層の2層のb層で構成される。ただし、第10-1 b層が確認されるのは1区南半のみで、北側では第10-1 a層と第10-2 a層の判別は困難である。第10-2 b層は1区と2区で認められる。

第10-1 a層は暗オリーブ灰色の細砂混じりシルトの耕作土層である。上面の高さはT.P.+11.0～11.3mで、厚さは0.1m程度である。第9 b層を除去し、1区南半や2区で畦畔や溝を検出した。

第10-2 a層は暗オリーブ灰色シルトの耕作土層で、上面の高さはT.P.+10.9～11.1mで、厚さは0.1m程度である。1区南半で溝などを検出した。第10層は1区南端ではT.P.+11.0m前後だが、2区ではT.P.+11.3mと高くなり、3区では再びT.P.+11.0mと低くなる。

第10-2 b層は厚さ0.1m程度の灰オリーブ色シルトで、北にいくとやや粘性が強くなり、a層との判別が難しい。第10層までを耕作土層と捉える。第10層には弥生時代から奈良時代の土器が含まれる。

第11層 第11層は2層に分かれるa層であるが、粘質の強い黒色土層である事から、他の層とは容易に判別できる鍵層となる。ただし、北にいくほど2層の分層は困難で、3区では1層にしか認識できなかった。第11-1 a層上面を第11 a面とした。第11層までは全調査区で調査を実施した。

第11-1 a層はオリーブ黒色シルト～粘土で下層よりやや黒色が薄く、わずかに細砂を含む。第11-1 a層の上面の高さがT.P.+10.7～10.9mである。第12 a面で検出した2区の56溝～58溝や土坑は第11層から切り込む可能性も高いが、遺構埋土と第11層が認識できず、第12 a面で検出した。

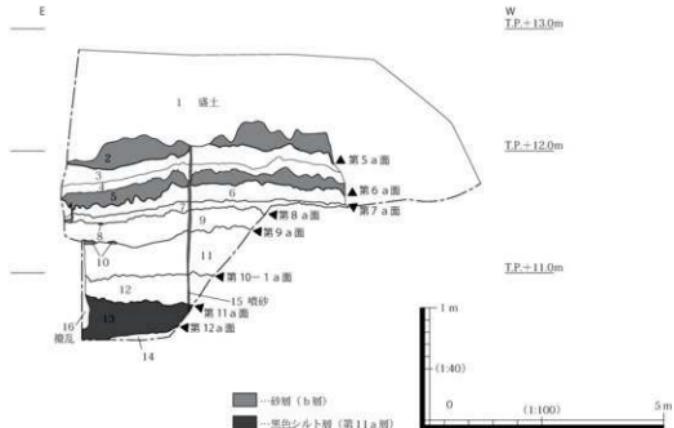
第11-2 a層は黒色シルト～粘土である。第11-2 a層の上面の高さがT.P.+10.5～10.7mと、第11-2 a層は南から北にいくほど高くなる。

第11層からはわずかに古墳時代から奈良時代の須恵器などが出土し、古代以前の層と考えられる。また、3区では第11層から液状化現象によって、第4-2b層まで巻き上がった地震痕跡（噴砂）が観察できた。

第12層 第12a層は青灰色シルトの古土壤層である。第12層以降は遺物が出土しない無遺物層となる。第12a面までを調査対象とした。

上面の高さがT.P.+10.3~10.5mと南が低く北が高い地形で、1区南半では設計掘削深度が第12層上面より高い。よって、構造調査は1区の南半では第11a面で、それより北では第12a面で終了した。しかし、隣接する（その5）・（その6）調査区の下層流路から古墳時代の土師器が出土した。そこで、1区の第11面で調査を終了した区域において、流路が延伸すると想定される部分のみ下層確認を行ったが、顕著な遺構・遺物は認められなかった（図40）。

2区から3区にかけては、第12a面で（その6）調査区から続く流路（55流路）や溝、土坑などを検出した。55流路は大規模な流路で、縄文時代晩期前半から弥生時代前期の土器が出土している。



- 1 IOYR7/4 にぶい黄褐色 細砂に 2.5Y4/2 噴灰黃 シルトブロックが混じる
盛土
- 2 2.5Y7/3 黄褐色 細砂 ラミナあり 第4-2b層
- 3 SY5/1 灰 黏砂混シルト 第5-1a層
- 4 SY5/1 灰 黏砂混シルト 第5-2a層
- 5 2.5Y7/3 黄褐色 細砂 ラミナあり 第5b層
- 6 NS5/0 灰 黏砂混シルト 第6-a層
- 7 NS5/0 灰 黏砂混シルト 6よりシルト質が強い 第7a層
- 8 NS5/0 灰 黏砂混シルト 第7b層
- 9 OYS/1 灰 黏砂混シルト 6・7より砂質強い 上面にわずかに砂層残る
第8a層
- 10 SY5/1 灰 黏砂 第8b層
- 11 2.5Y5/2 噴灰黃 シルト 上面にわずかに砂層残る 第9a層
- 12 SBS/1 青灰 黒シルト 第10a層
- 13 7.5Y3/2 オリーブ黒 シルト 第11a層
- 14 10GY5/1 灰灰 黏砂混シルト 第12a層
- 15 2.5Y6/4 にぶい黄褐色 細砂～中砂 14以下から2まで貫通する
複疊（鋼矢板打設時のもの）

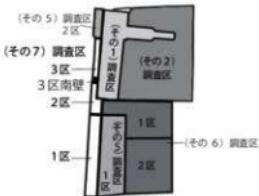


図6 3区 南壁断面図

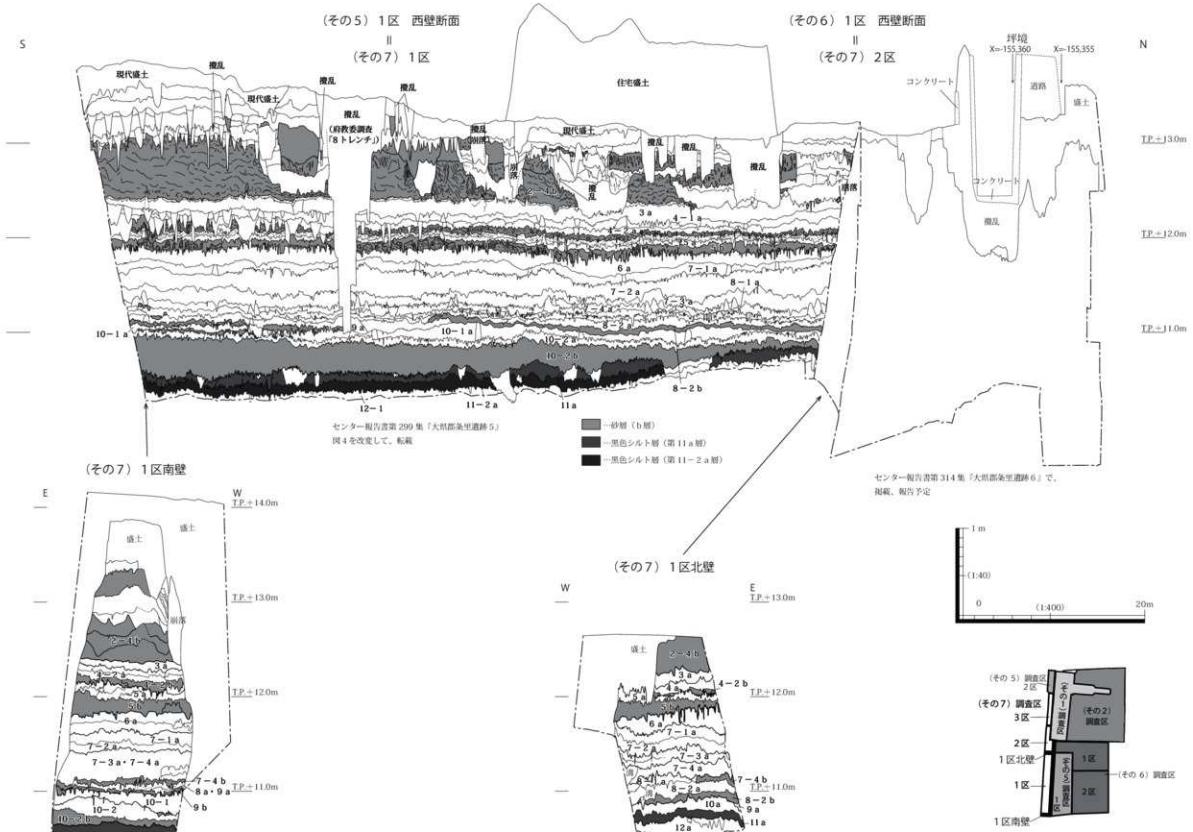


図7 南北・東西壁断面对照図 南半

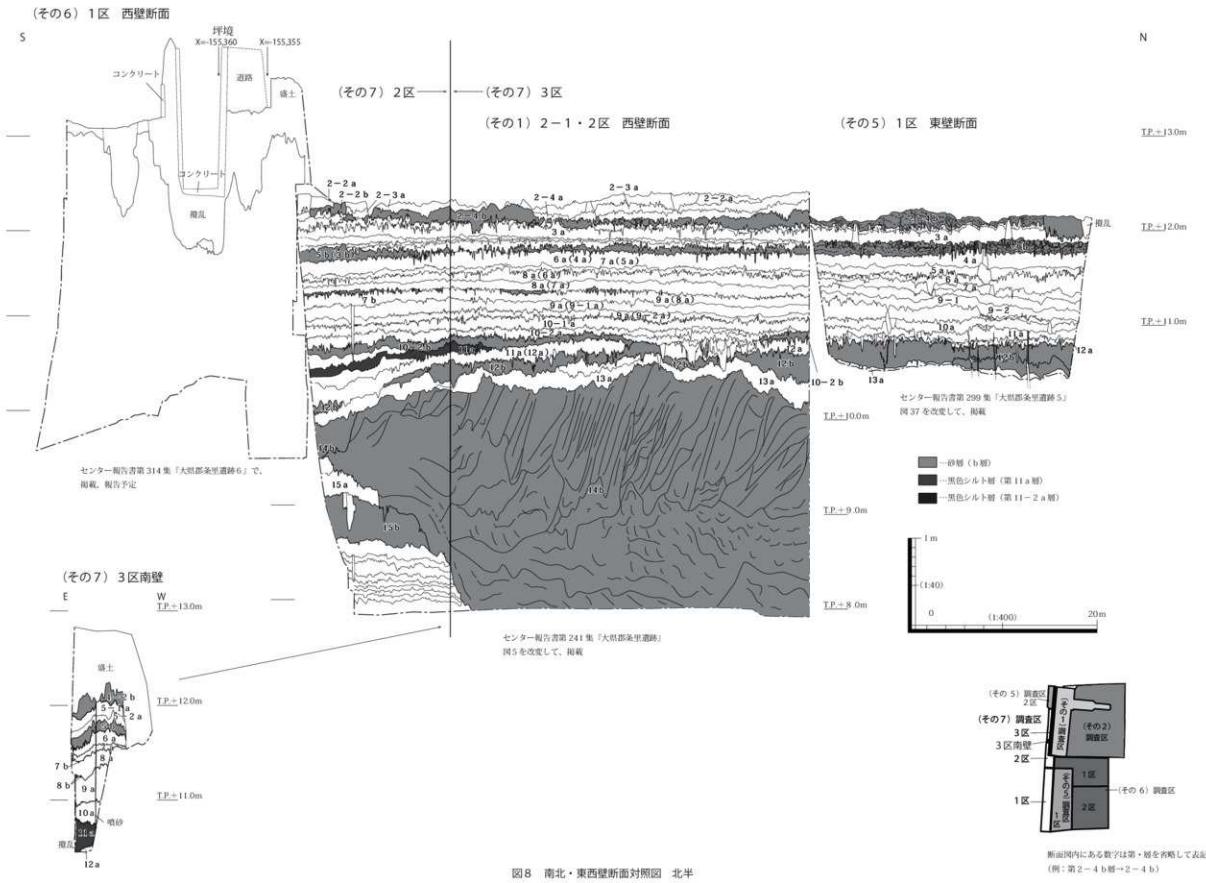


図8 南北・東西壁断面对照図 北半

断面図内にある数字は第・層を省略して表記
(例: 第 2-4 b 層→2-4 b)



表2 既往の調査との基本層序対応表

(その5・6) 南の坪	(その5・6) 北の坪	(その7)	(その1) (その5) 2区	(その2)
第0層	第0層	第0層	第0層	
第1 a層	第1 a層	第1 a層	第1 a層	
第1 b層	第1 b層		第1 b層	
第2-1 a層	第2-1 a層	第2-1 a層		
第2-1 b層		第2-1 b層		
第2-2 a層?	第2-2 a層?	第2-2 a層		
第2-2 b層	第2-2 b層	第2-2 b層		
第2-3 a層	第2-3 a層	第2-3 a層		
第2-3 b層				
第2-4 a層	第2-4 a層	第2-4 a層		
第2-4 b層	第2-4 b層	第2-4 b層		
第3 a層	第3-1 a層	第3 a層		
	第3-2 a層		第2-2 a層?	
	第3-3 a層		第2-2 a層?	
	第3-3 b層		第2-2 b層	
第4-1 a層	第4-1 a層	第4-1 a層	第2-3 a層	
第4-2 a層	第4-2 a層	第4-2 a層	第2-4 a層	
第4-2 b層		第4-2 b層	第2-4 b層	ここまで第0層
第5 a層	第5 a層	第5 a層	第3-1 a層 (第3-2 a層・ 第3-3 a層)	第1-1層
第5 b層	わずかに砂層	第5 b層	第3-3 b層	第1-2層
第6 a層	第6 a層	第6-1 a層・第6-2 a層	第4 a層	第2層
第7-1 a層	第7 a層	第7-1 a層	第5 a層	第3-1層
第7-1 b層	第7 b層			
第7-2 a層		第7-2 a層		
第7-3層洪水?		第7-3 a層		
第7-4 a層	第8 a層	第7-4 a層	第6 a層	
第7-4 b層	第8 b層	第7-4 b層		
第8-1 a層	第9-1 a層	第8-1 a層	第7 a層	第4層
第8-2 a層		第8-2 a層		
第8-2 b層		第8-2 b層		
第9 a層	第9-2 a層	第9 a層	第8 a層・第9-1 a・ 第9-2 a層	第5層
第9 b層		第9 b層		第5層下層?
第10-1 a層	第10 a層	第10-1 a層	第10 a層	第6層
第10-1 b層	第10 b層	第10-1 b層	第10 b層	
第10-2 a層		第10-2 a層		
第10-2 b層	第10-2 b層	第10-2 b層	第10-2 b層	
第11-1 a層	第11 a層	第11-1 a層	第11 a層	第7層・8層・第9層 上面
第11-2 a層	第12 a層	第11-2 a層		
第12-1 層	第12 b層	第12 a層	その1 第12 a層・ その5・2区 第12 b層	第9層下面
第12-2 層	第12 b層		第12 b層	
	第13-1 a層		第13-1 a層	
	第13-2 a層		第13-2 a層	第10層
	第13 b層		第13 b層	
	第14 a層		第14 a層	第11層
	第14 b層		第14 b層	

第2節 第3 a面・第4 a面・第4-2 b面の遺構と遺物

(1) 第3 a面の遺構(図9・10、写真図版1)

調査は、南北長約160m、東西幅約15mの細長い区画を3調査区に分けて行った。調査区名は南北から1区、2区、3区とした(図2)。調査は掘削土の置き場を確保するため、1区、3区、2区の順で行った。重機で盛土から近世の包含層である第1層、第2層合わせて0.5~1.0m掘削した後、人力による掘削を第3 a層から行った。

調査区によっては、近現代の擾乱によって上層の遺構面が削平されているか、あるいは認識できずに遺構面数が少なくなった場合もあるが、1調査区で平均6、7遺構面を調査した。調査時に基本層序の層名に合わせて、同一層上面の遺構面名は揃えたが(例:第3 a層上面は第3 a面)、坪境を境に堆積状況が変わることもあり、1つの区の南北で遺構面にずれが生じた場合もあった。整理作業でその整合性を検証し、3つの区を結合させた各遺構面の平面図を作成した。

第3 a面は、重機で盛土から近世の包含層である第1層、第2層を除去して検出した。各区とも西端から幅10mにわたっては、恩智川のコンクリート擁壁や護岸造営のため、約1.0mの深さで搅乱されており、擾乱は第6 a面まで達していた。それより東は、1区では第2層のa層や第2-4 b層が厚く堆積していたため、第3 a面は良好な状態で残存していた。

しかし、2区と3区では、現代の恩智川に流れる水路や水門調節室などの構造物造成時に大きく搅乱されていた。2区はX=-155,365より北、Y=-34,238より西は、第3 a面は削平されて検出できなかった。3区は全域が削平されていた。

第3 a面は浅黄色や黄灰色の極細砂混じりシルトをベースとし、遺構面の高さは1区でT.P.+12.3~12.4m、2区でT.P.+12.1~12.2mである。ほぼ平坦だが、南から北に低くなる傾向にある。

1区では東西方向の畦畔や溝、ピットを検出した。隣接する(その5)・(その6)調査区同様、東西長地型地割である事が判明した。耕作面は第2-4 b層の砂層に覆われていたため、人や牛の足跡が踏み込みとなって、明瞭に残る。

65・67~69・71・73畦畔(図10) 1区全域にわたって、北端の73畦畔から南端の65畦畔まで、6本の東西方向を横断する畦畔を検出した。畦畔と畦畔の間隔は、約11.0~12.0mが多いが、71畦畔と72畦畔は間に3溝を挟み、約18.0m離れている。真の東西方向より、わずかに北西にふる畦畔が多い。幅は0.5m程度、高さは頂部を削平しているため、0.05m程度である。断面は台形だが、高さが低いため緩やかな盛り上がりをみせる。

1区の東に隣接する、(その5)調査区の第3 a面でも東西畦畔を複数検出しており、位置的にも合致するので、連続した畦畔と言える。(その5)調査区の東、(その6)調査区も含めると、約80mは東西長地型の地割が続いている事が分る。

66・70・72畦畔 66畦畔は65畦畔の北、67畦畔の南東部に位置する。70畦畔は71畦畔の北西に位置する。72畦畔は2溝の南に位置する東西畦畔である。上記の畦畔に比べると、短くて畦畔と畦畔の距離も不均等である。

72畦畔と70畦畔はほぼ東西の真方位にのびるが、66畦畔は西端が北にふる。各畦畔とも長さは約2.5~3.0m、幅は0.5m程度で、高さも0.05m程度である。

70畦畔と71畦畔のように東西畦畔が並列するのは、北側と南側の畦畔で小時期差があるのかも知れ



Y=-34.290

Y=-34.290

Y=-34.290

Y=-34.290

Y=-34.290

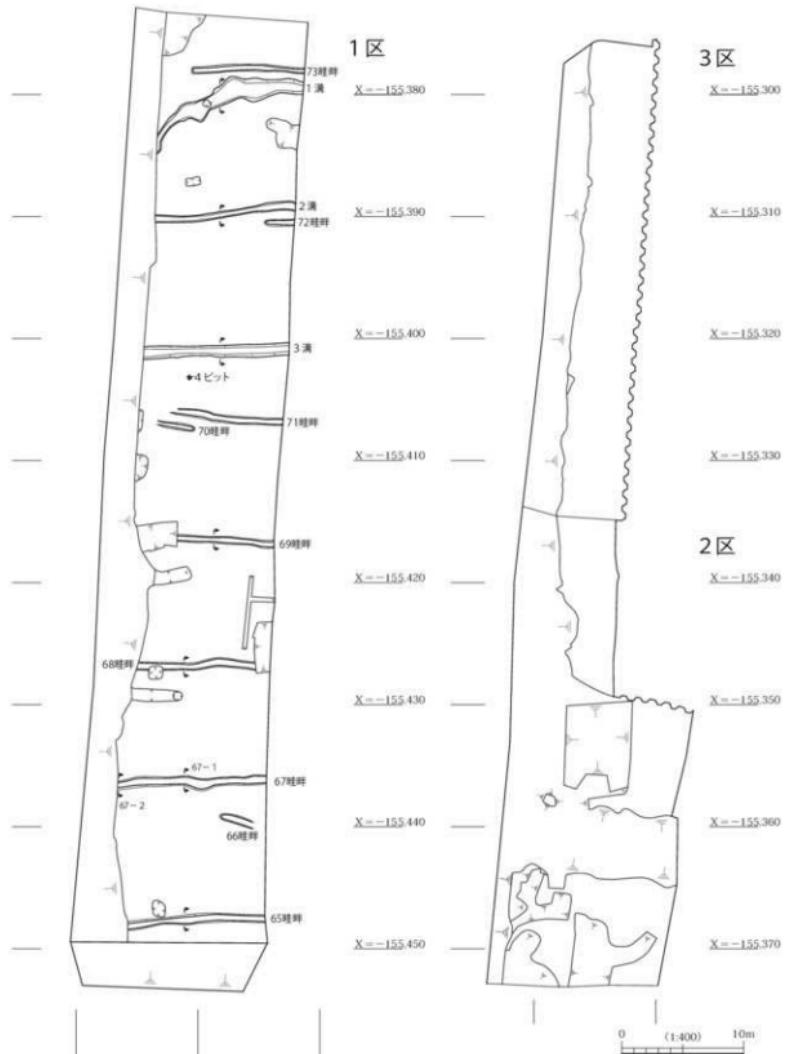


図9 第3a面平面図

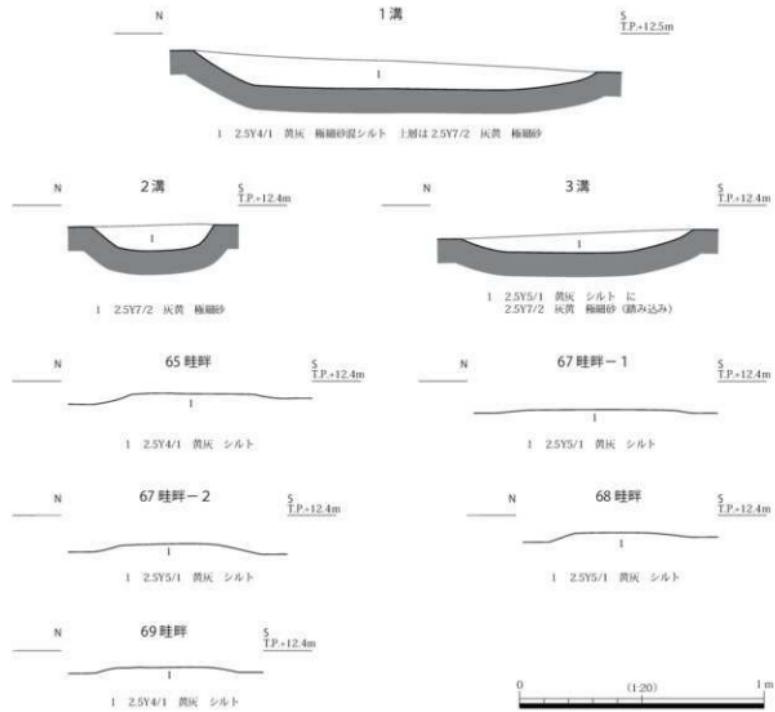


図 10 第3 a面遺構断面図

ないが、畦畔中から遺物も出土していないため不明である。

1・2・3溝（図10） 1溝は73畦畔の南、X = -155,380付近で検出した。東西方向から途中で西へと弧を描いて曲がる不整形の溝であるが、自然のたわみ、落ち込みとした方がいいかもしれない。

最大幅2.0m、最小幅0.5m、深さ0.13mをはかる。第2-4 b層の黄灰色シルトから灰黄色極細砂が埋積する。

2溝は72畦畔の北、X = -155,390付近で検出した、東西に直線的にのびる溝である。幅0.5m、深さ0.1mをはかる。第2-4 b層の灰黄色極細砂が埋積する。

3溝はX = -155,400付近で検出した、東西に直線的にのびる溝である。幅1.0m、深さ0.1mをはかる。第2-4 b層の灰黄色極細砂が埋積する。

1溝から3溝は約10.0m間隔で位置するが、2溝と3溝は直線的だが1溝は曲線的で、互いの相関性は不明である。ただし、73畦畔と2溝、2溝と3溝は約11.0m間隔であり、3溝以南の畦畔の間隔とも一致する事から、2溝・3溝は畦畔と関係をもつ遺構と言える。

4ピット 3溝と71畦畔の間で検出した。直径0.4mの円形のピットである。

第3 a面は第2-4 b層、第3 a層から瓦質土器や陶器が出土しており、15世紀後半以降の遺構面

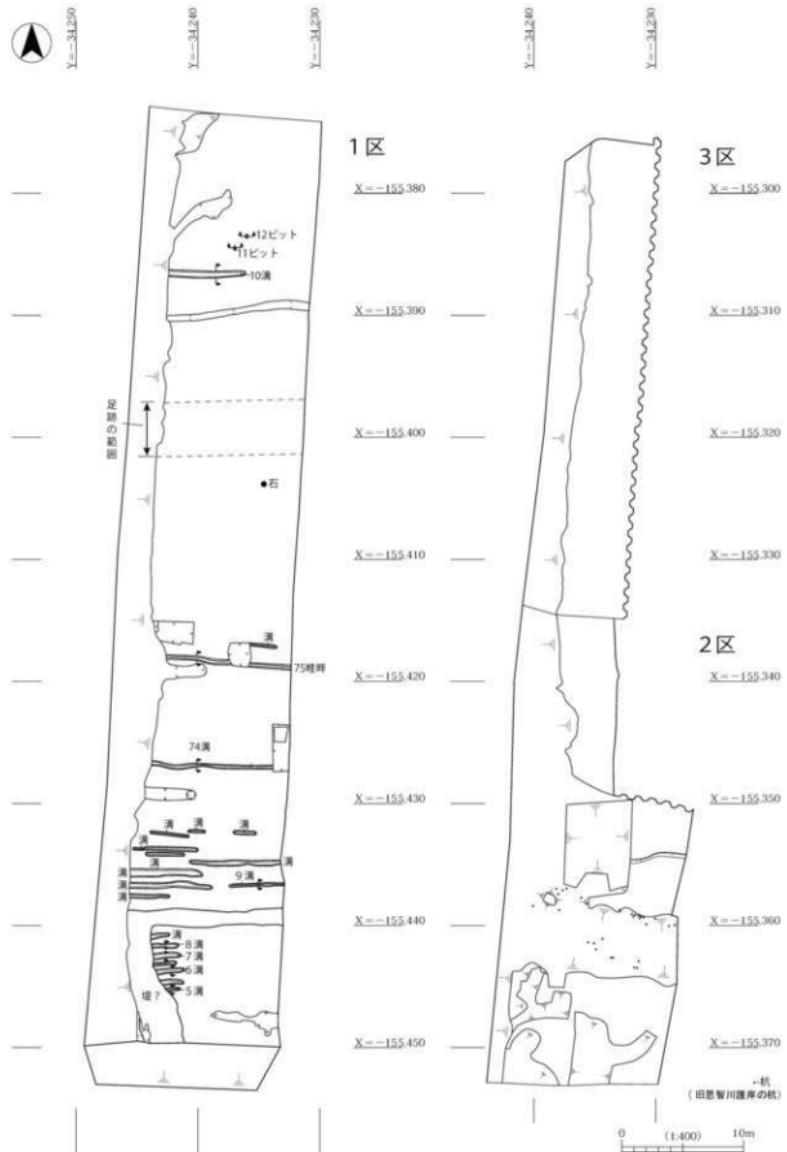


図 11 第 4 a 面平面図

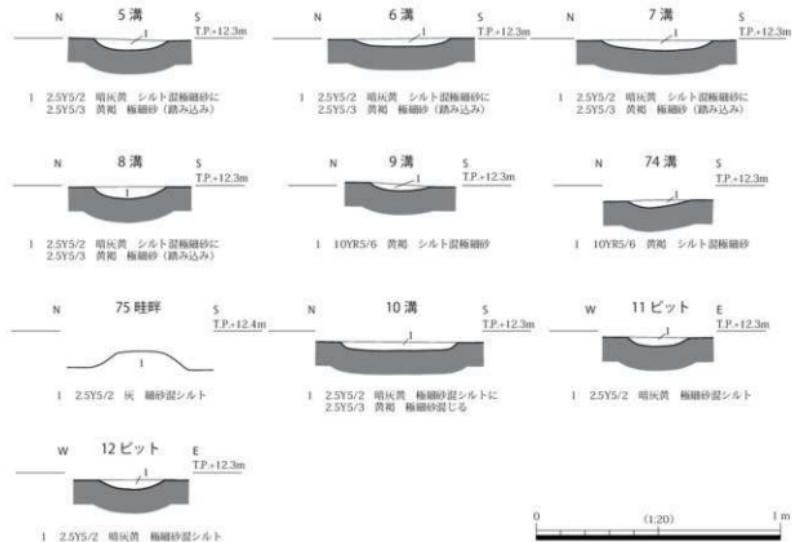


図 12 第4 a面遺構断面図

と考えられる。

(2) 第4 a面の遺構(図11・12、写真図版2)

1区では第4 a層を第4-1 a層と第4-2 a層に分層し、各々の上面で調査を行ったが、他の調査区では分層不可能だった。1区の第4-1 a面上面が2・3区の第4 a面に相当するとし、第4 a面として報告する。第4 a面は灰色や暗灰色の極細砂混じりシルトをベースとし、遺構面の高さは1区でT.P.+12.2~12.3m、2区でT.P.+12.0~12.1mである。ほぼ平坦だが、南から北に低くなる傾向にある。

2区は1区同様、現代の恩智川や水門調節室などの近現代の構築物による擾乱が著しいが、X=-155,360以北、Y=-34,235より東(北東部)と、X=-155,365以南、Y=-34,238より西(南西部)では遺構面が残存している。X=-155,355~-155,365の間で段状の落ちを確認した。2区の中央、X=-155,360~-155,366付近に約5.0m幅で東西方向の溝状の擾乱があるが、これは旧恩智川である。掘削を進めると旧恩智川の北肩と南肩に、2列に並ぶ木杭が露頭した。時期は決定できないが、これらの木杭は旧恩智川の護岸施設であったと考えられる。

3区は全域が削平されていた。第3 a面同様、遺構の検出は1区のみにとどまった。

1区では東西方向の畦畔と溝、畠溝、ピットを検出した。調査区南端からX=-155,440までは南北にのびて5~8溝を切り、X=-155,440で屈曲して東西にのびる幅1.5~3.0mの土色や土質が異なる範囲を検出した。溝より上面の堤か大畦畔とも思われるが、高さを失っており遺構と断定できなかった。

74溝・75畦畔(図12) 75畦畔は1区の中央、X=-155,418付近で検出した東西方向の畦畔で

ある。調査区を横断し、東端は（その5）調査区に続く。畦畔の頂部は上層の耕作により削平されているが、頂部幅0.2m、底部幅0.4m、高さ0.1mの断面台形である。第4-1a層を盛り上げて成形する。

74溝は75畦畔より約9.0m南、X=-155.427付近で検出した東西方向の溝である。幅0.25m、深さ0.05mをはかる。

5~9溝（図12、写真図版2） 74溝より南の区域では、等間隔に並ぶ20本弱の溝を検出した。いずれも幅0.25~0.4m、深さ0.05mの溝で、暗灰黄色シルト混じり極細砂や黄褐色極細砂が埋積する。溝と溝の間隔は0.5mで、形状や規則的に並ぶ事から畠の畝溝と推測する。

10溝（図12） 1区の北側、X=-155.386付近で検出した東西方向の溝である。1区南半で検出した畝溝群とも似るが、10溝のみ単独で検出した。幅0.45m、深さ0.05mをはかる。

11・12ピット（図12） 10溝の北東部で検出した。直径0.2~0.25m、深さ0.05mの小穴である。また、遺構ではないがX=-155.397~-155.401の範囲に、人や牛の足跡が集中してみられた。この範囲が他より低いため湿地状になりやすく、踏み込んだ跡が強く残ったものと思われる。この範囲より南東では、人頭大の自然石1点を検出した。用途は不明だが、何かの印目として他の場所から持ち込まれた可能性がある。1区の南半でのみ畝溝が検出されたのは、水田と併用して畠が作られた事を示すか、この区域が第4a層の堆積が厚く、削平を受けても残ったためと考えられる。

第4a面は第4a層に瓦器や瓦質土器が包含されており、15世紀後半の遺構面と考えられる。

（3）第4-2b面の遺構（図13・14、写真図版2）

第4-2b層は、第4a層と第5a層を識別するb層として1区から3区まで遍く存在したが、1区の南半や3区では厚さ0.2mと堆積が厚く、1区北半から2区にかけては厚さ0.1m弱であった。1区でのみ上面を精査して、遺構検出を行い、東西方向の溝を多数検出した。第4-1a面か第4-2a面から切り込まれた遺構である。規則的に並ぶ事から、耕作に伴う畝溝と考える。

第4-2b面は黄褐色細砂と灰オリーブ色シルトが混じりあった砂層（b層）で構成され、遺構面の高さはT.P.+11.9~12.1mである。ほぼ平坦だが、南から北に低くなる傾向にある。

13~16溝（図14） 調査区南側、X=-155.440以南で検出した。13~15溝は調査区東端から中央にかけてのびる長さ10.0~15.0m程度の溝である。第3a層と第4-2b層の上に埋積する。

13溝と14溝は隣接する東西溝で、その距離は約0.5mである。13溝は幅0.25m、深さ0.1m、14溝は幅0.3m、深さ0.1mをはかる。

15溝は平面形では1つの溝として検出したが、断面でみると13溝・14溝と同規模の3つの溝が、北から南へと切り合っている事が分る。幅0.4~0.5m、深さ約0.1mをはかる。16溝は13~15溝とは異なり、調査区西端から中央にかけてのびる長さ5.0mの溝である。幅0.4m、深さ0.1mをはかる。これらの溝は東西端からのびて中央で途切れたように見えるが、17溝より北は東西に横断する溝であり、本来は同様に1本の長い溝だった可能性もある。

17溝（図14） X=-155.440付近で検出した、調査区を横断する東西溝である。

平面では幅約0.9mの太い溝にみえるが、断面を観察すると13溝や14溝と同規模の、幅0.4m、深さ0.1m程度の2つの溝が切り合ったものを、1つの溝として検出したと考えられる。

18溝より北では、調査区東端から西端まで通して横断する溝が多くなるが、X=-155.430辺りまでは溝と溝の間隔が0.5mと密で、それより北では1.0~3.0mと疎らになる。西にいくと真方位よりもわずかに南にふる。



図 13 第4-2 b面平面図

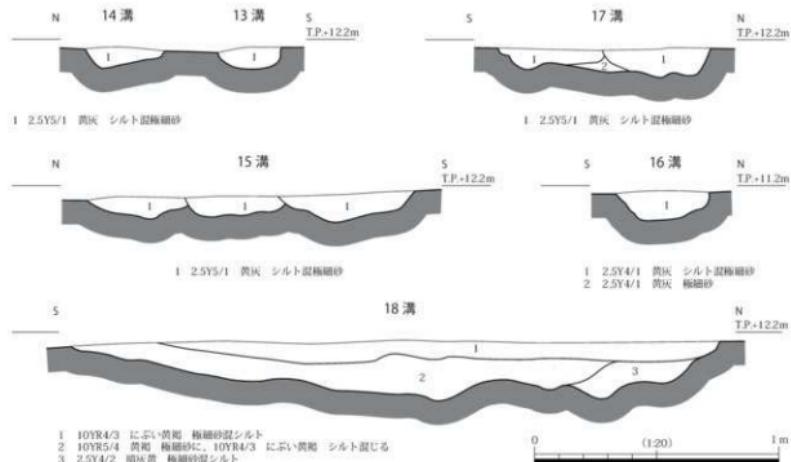


図 14 第4-2 b面遺構断面図

18溝(図14) X= -155,435~-155,438で検出した、幅の広い溝である。最大幅2.7m、深さ0.25mをはかる。西端は途切れる。18溝は、その規模から敵溝とは考えにくく、低地部に集水して溝となつた落ち込み状の遺構と捉える。

(その5) 調査区でも、第5 a面で第4-2 b面の溝を検出している。X= -155,415より南の、Y=-34,200辺りから西にのびる東西溝である。(その7) 調査区で検出した溝は、この溝の延長と考えられるが、検出範囲はより北まで及んでいる。

第4-2 b面は、第4 a層、第5 a層から15世紀以降の遺物が出土している事から、15世紀後半の遺構面と考えられる。

(4) 遺物(図15・16、写真図版15)

1~3は1区の第4 a層中から出土した。

1・2は瓦質土器摺鉢の口縁部である。1・2とも小片で、外面は縦横ともヘラ状工具で削られている。2の内面は右上がりのハケメがみられる。いずれも断面三角形を呈する。

3は肩に把手がついた須恵器の破片である。手ごねで作った把手を体部になでつけている。自然軸が上から下へと流れる方向から、体部に対して縦方向に貼り付けていると判断した。提瓶、もしくは耳壺の肩に貼り付けた耳の一つであろうか。

4は1区の人力掘削開始面の堤部上溝から出土した。体部外面に梅と思われる5弁の花と枝文を、高台に三重圓線を描く、染付磁器碗である。口縁端部は細く尖り、底部は厚く、高台は直立する。内面見込みは蛇の目軸剥ぎで、疊付から高台にかけて重ね焼きで使用した砂が付着する。

5は口径が相当大きい陶器火鉢体部で、口縁部に近い部分と思われる。外面に突帯を貼り付け、それを菱形につまみ成形する。胎土も精良で、きわめて硬質で滑の漆焼であろう。4・5とも機械掘削終了直後の遺構面攪乱などから出土しており、近世の所産で、第2-4 b層からの混入と考える。

6は蓮華文軒丸瓦の瓦当部分である。胴部は剥離し、瓦当部も外縁は失われ、全体の4分の1程度の

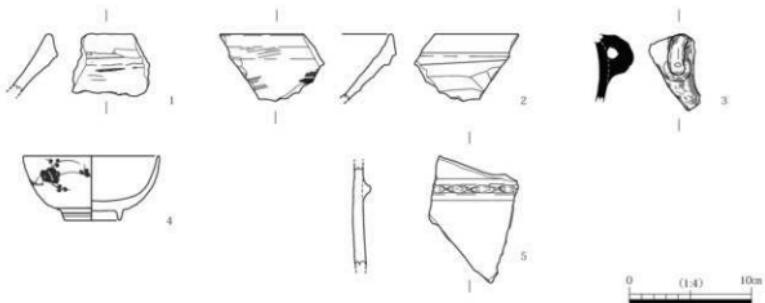


図15 第3a層・第4-1a層・第4-2a層出土土器実測図

残存状態である。蓮子径 0.7cm、複弁長 3.0cm程度で、複弁と複弁の間はT字状の棒芯線が入る。復元直径約 18.0cm、中房径約 8.0cmの、おそらく八葉の複弁蓮華文軒丸瓦と考えられる。川原寺式と呼ばれる飛鳥時代末の古代瓦である。

6が出土したのは1区の第4a層であり、古代の遺構面ではなく中世後期の遺構面である。また、当遺跡は古代から連綿と耕作地であるため、当地に寺院等が建立されていた可能性は低い。近辺から川の流れ等によって運ばれてきたものが巻き上がり、上層に混入したと考えられる。

古代において、当調査地より南東約 1.0 ~ 2.0kmの範囲にわたって、東高野街道沿いに河内六寺と呼ばれる寺院が点在していた（第2章図3-2参照）。これらの寺院からは瓦が多数出土しており、6は智識寺跡出土の軒丸瓦と類似する。（その2）調査区でも重弁蓮華文軒丸瓦が1点出土しており、それは鳥坂寺跡出土の軒丸瓦と類似する。軒丸瓦は古代寺院との関係を示す貴重な資料と言える（詳細は第4章第2節参照）。

7・8は機械掘削時や表採で出土した銅錢である。7は寛永通寶で、直径 2.5cm、厚さ 0.1cm、中心に1辺 0.8cmの方形孔を穿つ。字体から18世紀に鋳造された新寛永一文錢と考える。

8は直径 2.5cm、厚さ 0.1cm、中心に1辺 0.7cmの方形孔を穿つ。表裏とも鋸が付着し、かなり腐食しているため判然としないが、地が永、右が通、左が寶と読み取れる事から、寛永通寶でないかと推測する。

9・10は1区の第4a層中から出土した金属製品である。

9は笄^{こうい}だが、装着するための小孔がない事から、刀装具でなく結髪道具と考えられる。

完形で、全体の長さ 18.9cm、駒の最大幅 1.4cm、厚さ 0.18cmで、穂先の幅 0.6cm、厚さ 0.1cmである。材質は赤銅であろうか、やや金色を帯びる。竿部分は土圧を受けたためか、下半の竿はくねくねと湾曲して反る。上端に耳搔と頸、肩を作り出し、上端より約 8.5cm下がると竿となって穂先に向け先が細くなる。駒の上鉢は蕨手と眉形をなし、下鉢は木瓜形で取り囲む。駒内の地板は圓点状の鑿を打って、粟粒のような文様を表現した魚子地であるが、その中心に幅 0.1 ~ 0.15cmの圓線を巡らせた長さ約 5.0cm、幅 0.5cmの無文の長円形をもつ。近世期の所産であろう。

10は薄板状の製品で、上に鈎状の突起をもつが先端は欠損する。下半も欠損し、残存長は 8.7cm、幅は 1.75cm、厚みは 0.3cmである。鉄製であるが、表面に鋸が付着し隆起するため、本来の厚さより厚くなっている。用途は不明である。

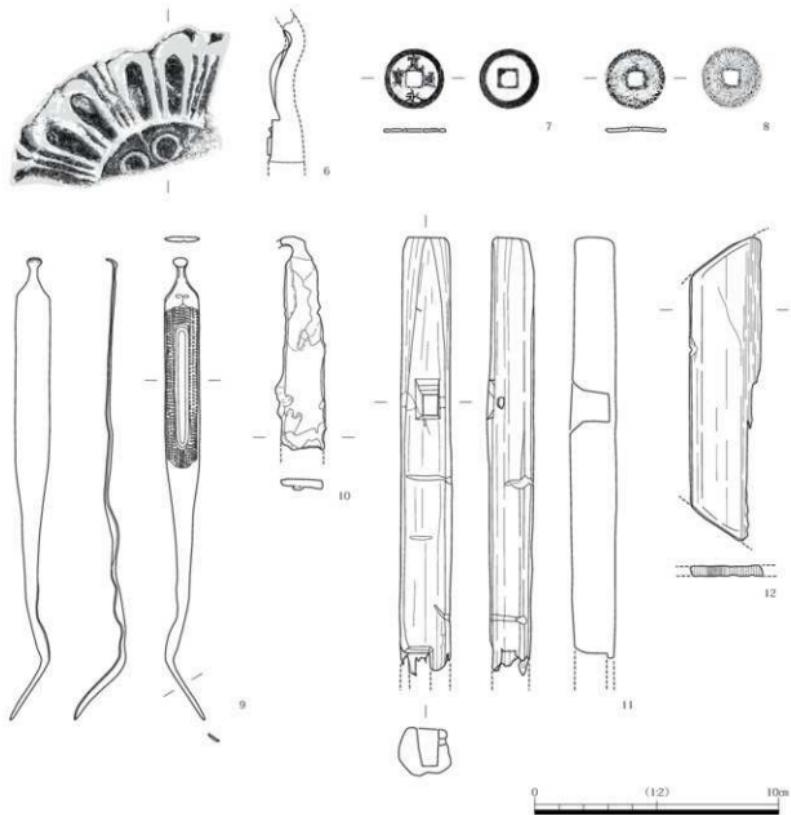


図 16 第3a層・第4-1a層・第4-2a層出土瓦・銭貨・金属製品・木製品実測図

11・12は1区の第4a層中から出土した木製品である。

11は残存長17.8cm、1辺約2.0cmの角材状製品だが、上端は面取りを施し四隅は丸められている。下半は欠損しており、2箇所に長辺1.6cm、短辺1.0cm、深さ1.5cmの長方形の穴をもつ。穴は貫通しておらず、枘穴になっていて、断面逆台形に削りこまれる。側面にも木釘の装着によると推定される圧痕、擦痕が認められる事から、他の部材をこの角材の穴に差し込んで固定し、さらに木釘を打って補強したと推定される。建築部材の一部であろうか。

12は曲物底板の一部分である。左右とも失われているが、直径15.0cm程度の底板であったと推測される。針葉樹の柾目材である。

第4a層からの出土遺物がほとんどであるが、攪乱に埋積した第2-4b層中の遺物など、近世の遺物も一定量含まれる。図化し得なかった遺物も含め、第3a層、第4a層出土遺物はおむね中世後期、15世紀代を示す。



Y=-34.250

Y=-34.240

Y=-34.230

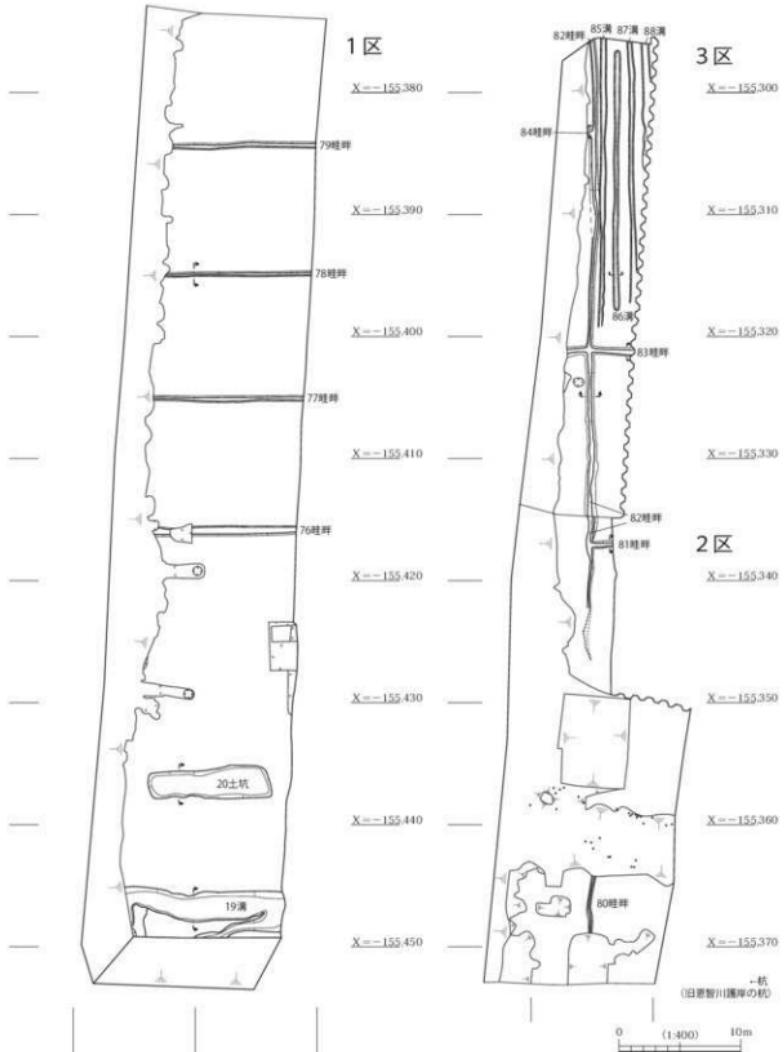


図17 第5a面平面図

第3節 第5a面の遺構と遺物

(1) 遺構(図17・18、写真図版3・4)

3区では第5a面に至って、ようやく擾乱が消失し遺構の検出をみた。盛土を除去して検出した1面目の遺構面なので、他の区と同じく第3a面と捉えていたが、検出高や層序を検討した結果、第5a層上面、すなわち第5a面と決定した。2区もX=-155,360以北と以南で、検出した遺構面にずれがある事が判明した。X=-155,360付近に坪境が存在しており、これを境に堆積状況が大きく変わる。(その1)・(その5)・(その6)調査区の南北基本層序をもとに検証し、(その1)調査での第3a面が坪境以南の第5a面に相当すると結論づけ、整合させた(第3章第1節の図7・8、表2参照)。

各区とも厚さの差はあるが、第4-2b層の洪水堆積砂層に覆われていた事もあり、遺構の残存状況が良かった。1区、2区、3区のすべてで畦畔や溝を検出した。水田面からは一面に人や牛馬の足跡が検出できた。

2区北側では南北の畦畔と、その東で南北畦畔にとりつきL字状となる東西の畦畔を、南側では南北の畦畔を検出した。3区では南北の畦畔と、それに交差して十字状となる東西の畦畔と、畦畔と畦畔の間に南北方向の敵溝を検出した。

第5a面は灰色細砂混じりシルトをベースとし、遺構面の高さは1区でT.P.+11.9~12.0m、2区でT.P.+12.0m、3区でT.P.+11.9~12.0mとほぼ平坦である。

76~79畦畔(図18) 1区ではX=-155,420より北で、東西方向の畦畔を4本検出した。いずれも調査区東端から西端までを横断し、畦畔と畦畔の間隔は10.0~11.0mとかなり等間隔に近い。真方位よりやや南西にふる。

畦畔頂部は削平されているが、頂部幅は約0.2m、底部幅は約0.5m、高さは0.05m程度である。隣接する(その5)調査区でも、同じ位置に東西畦畔を検出しており、連続した畦畔と捉える。

19溝(図18) 1区南端で検出した東西方向の溝である。最大幅4.0m、深さ0.1mをはかる。第4-2b層が埋積する。東端から1.5m西にいくと二股に分かれ、一方は約2.0m幅でほぼ真方位に西にのびるが、一方は約幅1.0m幅で南へのび、中央で調査区外へと抜けていく。

20土坑(図18) 1区の南半、X=-155,435~-155,438で検出した土坑である。第4-2b面の18溝とはほぼ同位置である事から、18溝の底面痕跡とも考えられる。幅2.1m、深さ0.15mをはかる。第4-2b層の埋土が埋積する。

80畦畔 2区の南半で検出した南北方向の畦畔である。真方位よりやや西にふる。幅約0.5m、長さ2.5mをはかる。南北両端とも擾乱によって消失しているが、擾乱より北で検出した82畦畔が、80畦畔の延長の可能性がある。

82畦畔(図18) 2区の北半及び3区で検出した南北方向の畦畔である。真方位よりやや北西-南東にふる。検出長50.0mで北は調査区外にさらにのびていく。頂部幅約0.3m、底部幅約0.5m、高さ0.05~0.1mをはかる。2区で81畦畔、3区で83畦畔と84畦畔の3つの東西畦畔がとりつく。

また、3区の82畦畔と83畦畔に囲まれた北東区画には南北方向の85~88溝が存在し、敵溝と考えられる。隣接する(その1)調査区でも南北に長い畦畔の間に敵溝が確認されている。

81・83・84畦畔(図18) 2区と3区で検出した、82畦畔にとりつく東西畦畔である。81畦畔は2区で、それ以外は3区で検出した。

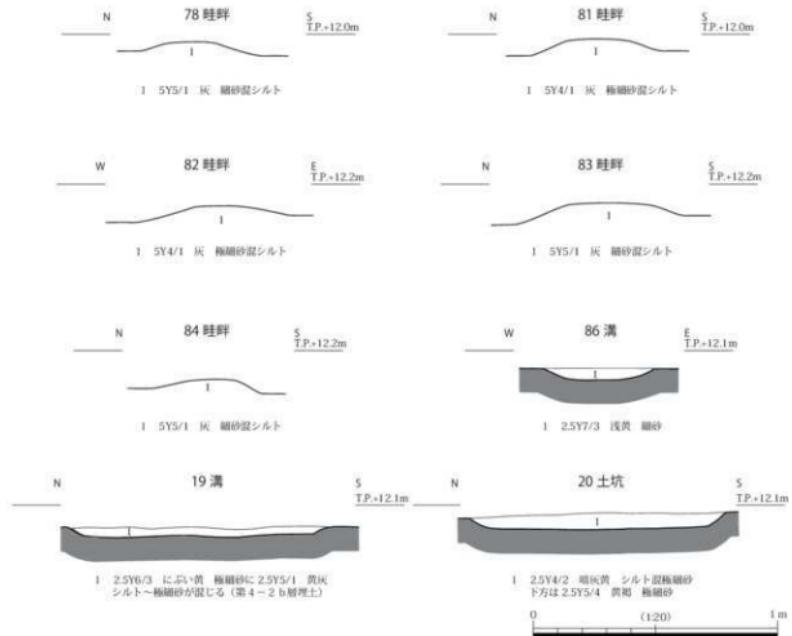


図 18 第 5 a 面造構断面図

83 畦畔はその中央で 82 畦畔と交差して十字状をなすが、81 畦畔は 82 畦畔の東側に、84 畦畔は 82 畦畔の西側に位置し、L 字状もしくは逆 L 字状をなす。いずれの畦畔も頂部幅 0.3 ~ 0.4 m、底部幅 0.5 m、高さ 0.05 ~ 0.1 m をはかる。81 畦畔と 83 畦畔の間隔は約 16.0 m、83 畦畔と 84 畦畔の間隔は約 17.0 m とほぼ等間隔だが、1 区の東西畦畔の間隔とは異なる。

85 ~ 88 溝 (図 18) 83 畦畔と 82 畦畔に囲まれた区画で、82 畦畔に沿って東側で、敵溝が 4 本確認される。いずれも幅 0.4 m、深さ 0.05 m で浅黄色細砂が埋積する。約 1.0 m 間隔で南北に並び、86 溝のみ 3 区内で南北端とも検出されており、その長さは約 20.0 m だが、他の溝では北端は検出されず、調査区外にさらにのびていく。

第 5 a 面で特筆すべきは、1 区は東西方向の地割で水田であるのに対し、2 区より北では南北方向の地割で、敵溝の存在から畠への転作が示唆される事である。これは他の調査区でも、坪境以北、以南で広域で確認される (図 49)。1 区と 2 区の境に東西型地割から南北型地割への変換点があると言える。

2 区や 3 区に隣接する (その 1) 調査区では、南北方向の長地型地割の畦畔やその中に多数の南北敵溝、溝を第 3 a 面から第 10 - 1 a 面に至るまで検出している。今回調査した 2 区や 3 区でも、同様に南北方向の長地型地割であった事が判明した。1 区は東西長地型の地割であるので、1 区から 2 区の途中で地割方向が東西から南北に変化すると推測されるが、1 区と 2 区の境界付近が大きく攪乱されているため変化箇所は不明である。

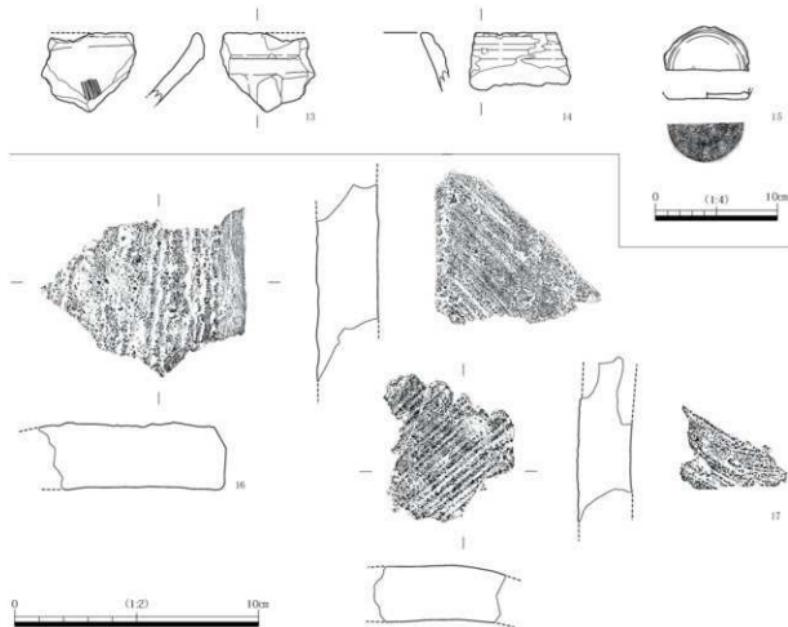


図19 第5a層・第5b層出土遺物実測図

第5a層の包含遺物から、第5a面は中世後半、15世紀前半の遺構面と考えられる。

(2) 遺物(図19、写真図版15)

13は1区で出土した瓦質土器擂鉢である。口縁端部はやや丸みをもち、肥厚氣味となる。内面は8本1組の摺目が残るが、全体に使用によると思われる摩耗を受け、器面が荒れている。外面体部は継のヘラケズリ後にハケ状のもので縦横にナデた痕跡が残る。

14は1区で出土した瓦質土器羽釜である。口縁部のみの小片で、3つの段をもち、口縁部は内傾する。川の流れなどによってローリングを受けたのか、摩耗し欠損が多くみられる。

15は3区で出土した白磁皿である。底部のみの出土で、口縁部から体部は欠損する。内外面とも施釉され、内面見込みには沈線が入る。底部は回転糸切りの平底で、底部と体部の境界辺まで施釉されている。口縁部口禿の皿と思われる。

16・17は平瓦である。16は2区、17は1区から出土した。

16の右側面は凸面から斜めに面取りされた状態だが、もう1側面と天地は欠損する。厚みは2.8cmである。凸面には砂目と格子状のタタキ痕が、凹面には弧状の糸切り痕が残る。中世後期、室町時代のものであろうか。17も小片で天地左右とも欠損する。厚みは2.5cmである。凸面には斜め方向の繩タタキの痕跡が、凹面には弧状の糸切り痕が残る。中世後期、室町時代のものであろうか。

第5a面出土遺物は少量だが、おおよそ中世後期、15世紀前半を示す。第3a面から第5a面までは小時期差はあるが、徐々に古い時期を示す。



Y=-34.290

Y=-34.280

Y=-34.290

Y=-34.280

Y=-34.290

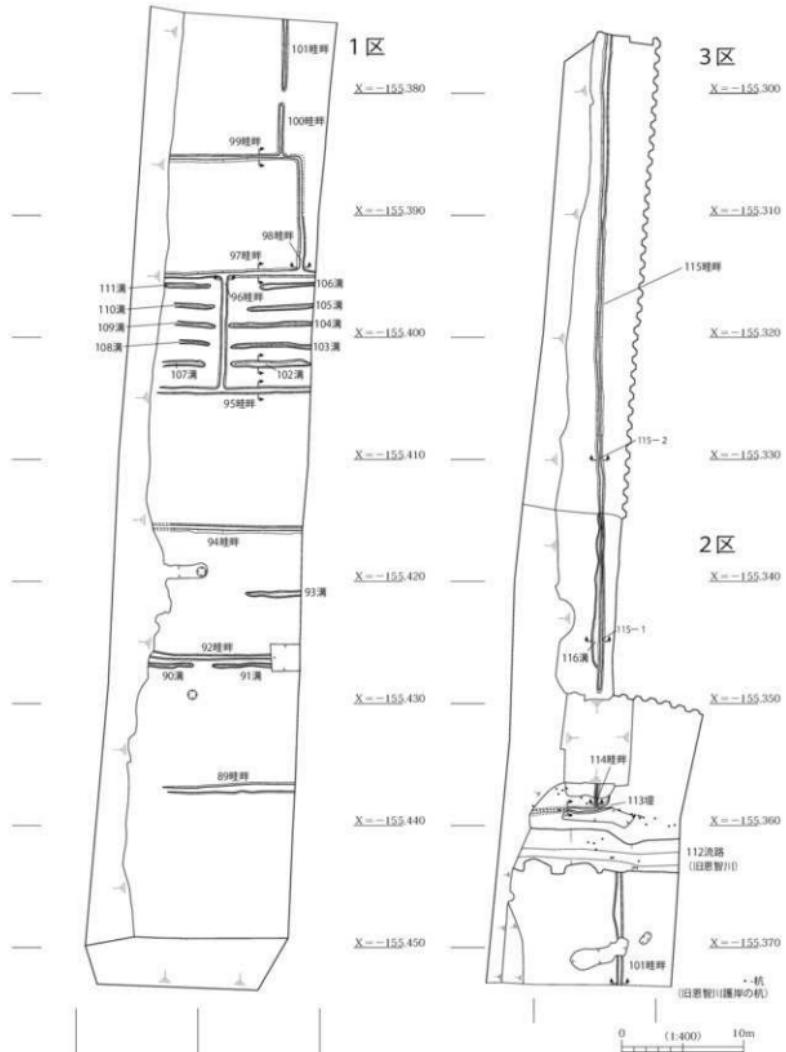


図20 第6a面平面図

第4節 第6a面の遺構と遺物

(1) 遺構(図20・21、写真図版4~6)

第6a面は第5b層の厚い洪水堆積層に覆われており、各区で畦畔や畝溝などを、水田面からは人や牛の足跡、耕作具痕を検出した。全遺構面で最も残存状況の良い遺構面と言える。

第6a面は灰色極細砂混じりシルトをベースとし、遺構面の高さは1区でT.P.+11.7~11.8m、2区でT.P.+11.6~11.8m、3区でT.P.+11.7~11.8mと、2区の北半が最も低く、南北端にいくと高くなる地形をとる。また、1区北側の水田区画では、東から西へと段状に低くなる。

89・92・94畦畔 1区のX=-155,415より南で検出した東西方向の畦畔である。89畦畔と92畦畔の間隔、92畦畔と94畦畔の間隔はともに約11.0mで等間隔である。ほぼ真方位で、頂部幅0.2~0.3m、底部幅約0.5m、高さ0.05~0.1mをはかる。西にいくと削平されて不明瞭となる。

90・91・93溝 1区のX=-155,415より南で検出した東西方向の溝である。90溝と91溝は92畦畔の南で92畦畔に沿うように、93溝は92畦畔と94畦畔の間で検出した。いずれも長さ4.0~5.0m、幅0.3~0.5m、深さ0.05mである。

95~101畦畔(図21) X=-155,405より北では、間隔が9.0~10.0mで並ぶ東西畦畔を3本検出した。95畦畔と97畦畔の間には南北の96畦畔が交わり、エの字状になる。97畦畔と99畦畔の間には南北の98畦畔が走るが、99畦畔との交点の角で屈曲してコの字状となる。99畦畔の北にある100畦畔と101畦畔の間には1.0m途切れた箇所があり、ここが水口と思われる。

96畦畔を挟んで東西の区画には高低差はないが、98畦畔を挟んだ区画は東が0.1mほど高く、100畦畔と101畦畔を挟んだ区画でも、東が0.15mほど高い。東から西へと水を引いていたと考えられる。101畦畔は1区から2区まで約15.0mの長さで続く。

畦畔はいずれも頂部幅が0.3~0.4m、底部幅が0.5~0.6m、高さ0.1~0.15m程度である。地表面には人や牛馬の足跡、耕作具痕が多数残る。

102~111溝(図21) 95畦畔と96畦畔、97畦畔で囲まれた区画は地表高が低く、特に第5b層の堆積が厚かった。この区画で等間隔に並ぶ溝列を検出した。

102溝から106溝は長さ5.0~7.0m、107溝から111溝は長さ2.5~4.0m、いずれも幅は0.5m、深さは0.1m、第5b層のにぶい黄褐色細砂が埋積する。各溝は1.5mの等間隔で並び、畝溝と考えられる。

隣接する(その5)調査区では、第6a面は断面に激しい凹凸があり、平面では人や牛の足跡が耕作区画とは無関係な動きを示し、耕作具痕が多数認められる。調査担当者は、第5~2a層堆積の洪水後、浸水状態で、砂層の下から耕作土を掘りあげ、耕作土層を復旧する作業の痕跡と推論する。しかし、今回の調査では、畦畔や畝溝が明確に存在する地表面で多数の足跡や耕作具痕が併存してみられた。洪水で水田や畠が侵食された後の復旧遺構面とは考えられず、耕作時の工具痕と考えた方が無難と思われる。

112流路・113堤(図21) 第6a面で検出した旧恩智川(2区のX=-155,361~-155,364間)は川の底部を検出したもので、実際の川幅より狭まっている。この北肩に沿うように東西の堤防もしくは大畦畔の痕跡と考えられる、113堤を検出した。

113堤から計測すると川幅は5.0m以上で、113堤の周辺が坪境にあたると推定される。113堤も実際はさらに大きかったと推測されるが、残存幅0.4m、高さ0.1mをはかる。113堤に沿うように、直径0.2mの丸杭や角杭が散在しており、これらの杭は旧恩智川の護岸施設と思われる。

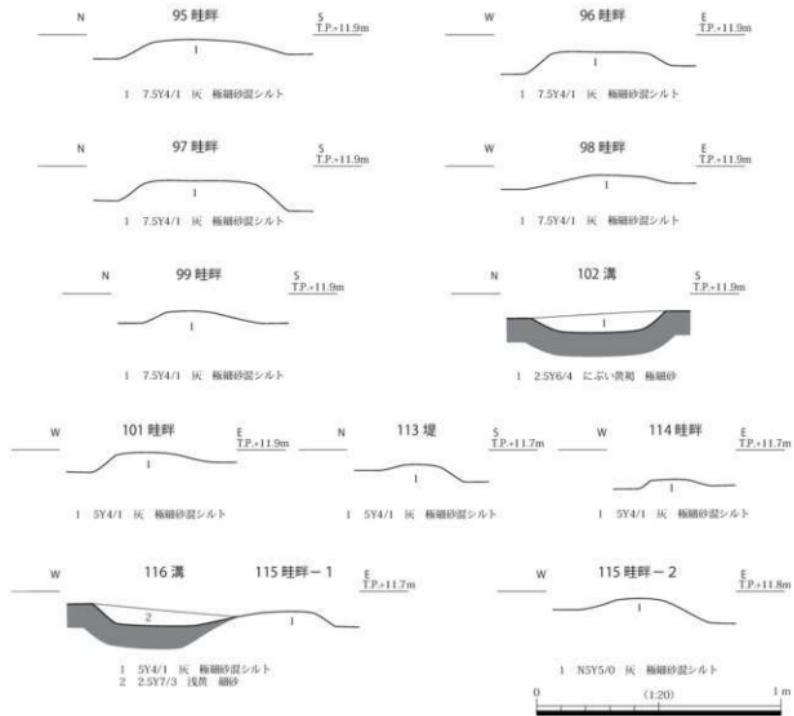


図 21 第 6 a 面遺構断面図

114 畦畔（図 21）旧恩智川流路北肩の 113 堤から垂直に北にのびる南北畦畔である。113 堤と 114 畦畔の切り合いは不明であるが、101 畦畔と 114 畦畔が相関性をもつとするなら、畦畔を切るよう 112 流路が形成されている。114 畦畔は 101 畦畔より約 2.0 m 西にずれた位置にあり、擾乱を挟んで、ほぼ同位置に 115 畦畔、116 溝が存在する。幅約 0.2 m、高さ 0.05 m をはかる。

115 畦畔・116 溝（図 21）2 区の北半で検出された南北方向の畦畔と溝である。116 溝は 115 畦畔の西に沿い、2 区の中で消失する。幅 0.5 m、深さ約 0.1 m をはかる。

115 畦畔は 2 区からそのまま 3 区北端まで 50.0 m 以上の長さでのびる事が確認できた。真方位より 北西—南東にふる。頂部幅 0.2 m、底部幅 0.5 m、高さ 0.1 m をはかる。隣接する（その 1）調査区では、10.0 m 間隔で南北畦畔が 2 本検出されており、115 畦畔はこれらの畦畔と間隔や方向もぴったりと合致する（図 48）。

第 5 a 面と同じく、第 6 a 面でも南では東西長地型の、北では南北長地型の地割が行われていた事が判明した。その変化箇所を X = -155,385 の 99 畦畔以北と捉えるか、X = -155,360 付近の坪境以北と捉えるかは検討の余地がある。

第 6 a 層の包含遺物は、12 世紀後半から 14 世紀までと広い時期に及ぶ。第 6 a 面は上層遺構面と

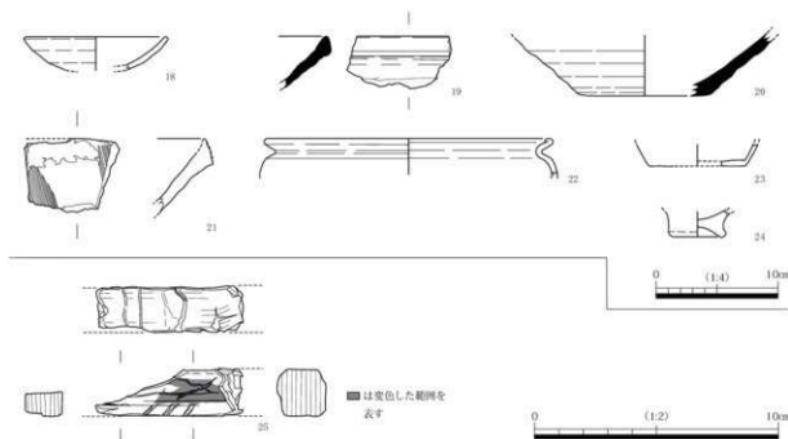


図22 第6a層出土遺物実測図

の関係から、13世紀後半から14世紀前半の遺構面と捉える。

(2) 遺物 (図22、写真図版16)

18～21は1区から出土した土器である。

18は瓦器椀である。内外面ともにミガキはみられず、外面の口縁部と体部の境にわずかにユビオサエが認められる。法量も小さくなった最終段階の、和泉型IV-3型式、13世紀末～14世紀初めのものである。

19・20は東播系須恵器こね鉢である。19は口縁部で、断面三角形だが端部は尖らずに丸みを帯びる。口縁部と体部の境に粘土紐の継ぎ目痕がみられる。第Ⅱ期第2段階、12世紀末～13世紀初めのものと思われる。20は体部下半から底部で、底径10.8cmである。内面は摩耗しており、かなり使用されたと思われる。19よりやや古い、第Ⅱ期第1段階、12世紀後半位のものか。

21は陶器鉢の口縁部で、内面の一部は剥離する。硬質の胎土や赤褐色の色調から備前焼陶器と思われる。断面は鋭角的な三角形であるが、外側に肥厚はない。内面には9本1組程度の摺目が2箇所にみられる。13世紀後半位のものか。

22は3区から出土した土器師羽釜口縁部である。口縁端部は内側に巻き込み、口縁部から体部へは、くの字に屈曲する。器壁は薄く胎土も精良で、ナデで丁寧に仕上げられている。13世紀代のものか。

23・24は3区で出土した。23は白磁皿底部である。内外面とも施釉され、底部から体部は直線的に立ち上がる。白磁皿Ⅸ類、13世紀半ば以降のものか。

24は弥生土器甕の底部である。底面は外に張り出す。これのみ他の遺物と大きく時期が異なることから、下層遺物の混入と考えられる。

25は1区で出土した杭状木製品である。1辺2.0cm四方の角材で1端は欠損し、もう1端は斜めにそぎ落とされている。1面に「×」状の刻み痕と斜めに走る3本の擦痕が認められる。用途は不明である。

第6a面は、出土遺物に時期幅があるが13世紀後半から14世紀前半を主軸とする年代が与えられる。



図23 第7-1a面平面図

第5節 第7-1 a面・第7-4 a面・第8 a面・第9 a面の遺構と遺物

(1) 第7-1 a面の遺構(図23・24、写真図版7)

第7 a層は1区や2区では堆積が厚く4層に分層ができるが、第7-4 b層以外はa層とa層の間にb層がみられず、各層の識別が困難だった。ただし、第7-2 a層はカルシウムの結核を含み、第7-4 a層は砂質が強く、酸化すると茶褐色に見えるなど比較的の識別が容易だったため、これらの層を鍵層として第7-2 a層と第7-3 a層を分層し、第7-1 a面と第7-4 a面で遺構面調査を実施した。3区では第7 a層は堆積が薄く、1層としか把握できなかったため、第7 a層とした。第7 a層上面を第7-1 a面として報告している。

第7-1 a面は灰黄色シルトをベースとし、遺構面の高さは1区でT.P.+11.5~11.6m、2区でT.P.+11.6~11.7m、3区でT.P.+11.6~11.7mと、2区と3区はほぼ平坦で、1区がやや低く、北から南に低くなる地形をとる。1区全域で畦畔を、2区のX=-155,360付近で流路を検出した。

117~123畦畔 1区では東西方向の畦畔を7本検出した。畦畔の頂部は上層の耕作により削平されており、土色や上の継まり具合などから判断し、幅0.5m程度の畦畔の平面痕跡のみ検出した。

調査区東から西まで横断するのは119畦畔のみで、他の畦畔は両端が途切れた状態で検出され、長さも4.0~9.0m程度しかない。いずれの畦畔も底部幅が約0.5m、高さは削平されているため0.05m未満で、真方位より南にややふる畦畔が多い。

119畦畔と120畦畔の間隔は9.0m、121畦畔と122畦畔の間隔は9.5m、122畦畔と123畦畔の間隔は11.0mと、畦畔の間隔は不均等である。119畦畔の南にある117畦畔と118畦畔は連続した畦畔になる可能性もある。隣接する(その5)・(その6)調査区でも東西方向の畦畔が検出されており(図47)、これらの畦畔の延長で畦畔が連続していたなら、東西長地型の地割が西まで踏襲されていたと言える。

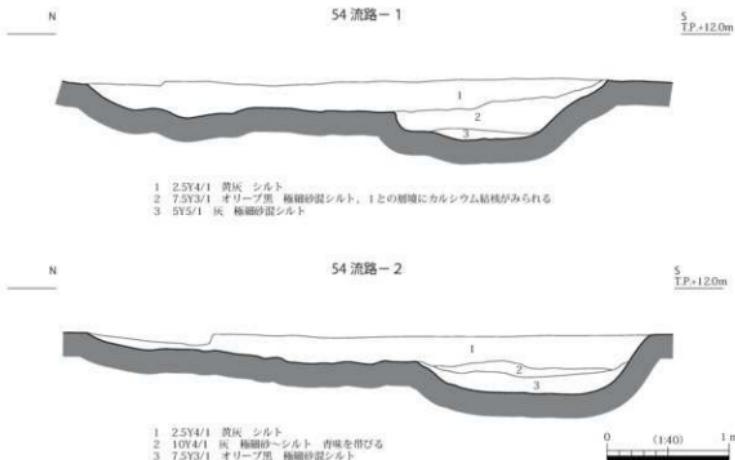


図24 54流路断面図

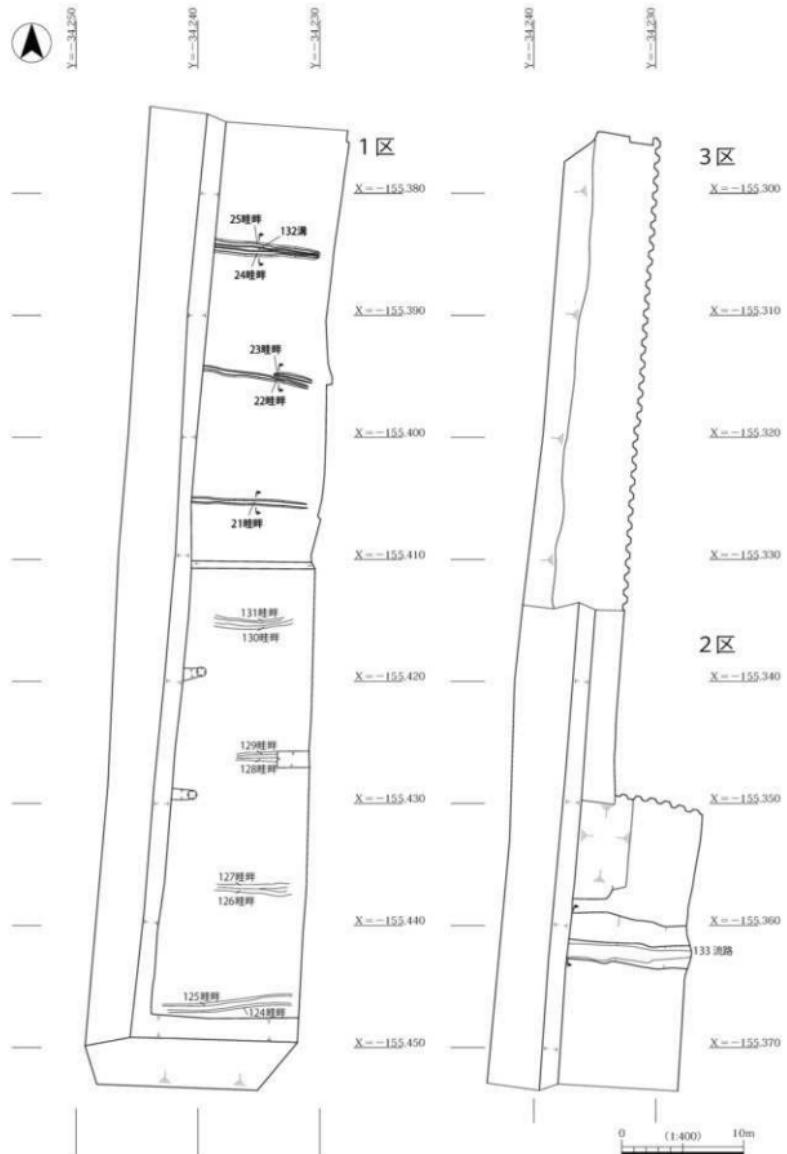


図25 第7-4 a面平面図

54 流路（図 24）2 区では畦畔は検出できなかったが、旧恩智川となる 54 流路を検出した。上面の第 6 a 面 112 流路よりやや北にずれ、X = -155,360 ~ -155,365 間で検出された。

南の肩は 1 段だが、北の肩は落ちから 2.0 ~ 3.0 m 入って、もう一段深くなる 2 段落ちの形状をとる。

幅 4.3 ~ 4.6 m で、深さは浅い所で 0.2 m、段が落ちた最深部で 0.5 m をはかる。黄灰色シルト、灰色シルト、オリーブ黒色シルトが埋積するが、これらは上層の包含層が埋没したもので、水平堆積する事から、時間をかけて緩やかに堆積したと考えられる。両肩に護岸施設の杭が認められる。

54 流路内からは、13 世紀半ばから 14 世紀初めの瓦器碗や土師器皿が出土し、14 世紀初めに廃絶したと考えられる。

第 7-1 a 面は遺構が希薄で、2 区の 54 流路より北、及び 3 区では遺構は検出できなかった。

第 7-1 a 層・第 7-2 a 層には 13 世紀半ばから 14 世紀初めの遺物を含み、第 7-1 a 面は 13 世紀後半から 14 世紀初めまでの遺構面と考えられる。

(2) 第 7-4 a 面の遺構（図 25・26、写真図版 8）

第 7-4 a 層は暗オリーブ灰色粗砂混じりシルトで、砂質が強く、酸化すると茶褐色を呈する。坪境以南では層厚 0.3 m と厚く堆積するが、坪境以北では堆積が薄くなる。

第 7-4 a 面の遺構面の高さは、1 区で T.P. + 11.3 ~ 11.5 m、2 区で T.P. + 11.2 ~ 11.5 m である。1 区から 2 区南半までは南から北へ徐々に低くなり、2 区の坪境を越えると再び高くなる地形をとる。1 区で多数の畦畔を、また、2 区坪境付近で 133 流路を検出した。2 区の 133 流路より北と、3 区では遺構を検出していない。

21 ~ 25・124 ~ 131 畦畔・132 溝（図 26）1 区では東西方向で 2 本 1 組の畦畔 6 組と単独の畦畔 1 本、計 13 本の畦畔を検出した。また、2 本の畦畔の間に部分的だが溝が検出された。

各畦畔の頂部は上層の耕作により削平されているため、平面形の痕跡を部分的に検出したものも多い。

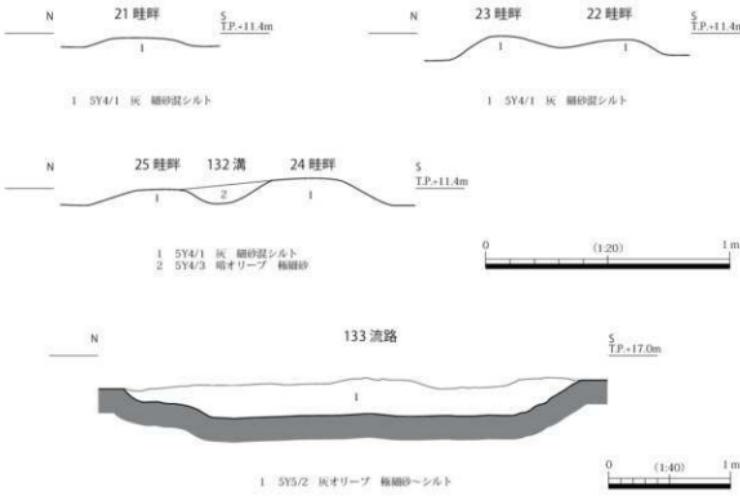


図 26 第 7-4 a 面遺構断面図

第7-4 a面の特徴は、例えは24 畦畔と25 畦畔の間に132溝があるように、2本の畦畔とその間の溝を1単位としているものが見受けられる事である。(その5) 調査区でも同様の、2本の畦畔と溝の組み合わせを検出している。2本の畦畔に切り合いがあり、北側畦畔が南側畦畔の盛土にのる事から、2本の畦畔は同時に作られたのではなく、時期差があると報告されている。しかし、1区で検出した畦畔は、明確に北側畦畔と南側畦畔の切り合いを認められず、どちらが上層遺構か決定できなかった。いずれの畦畔も頂部幅が0.1~0.15m、底部幅が0.2~0.25m、高さが0.05~0.1mをはかる。その間の溝は132溝の場合、幅0.2m、深さ0.05mをはかる。

24 畦畔と25 畦畔の対と23 畦畔と22 畦畔の対との間隔は約10.0m、22 畦畔と21 畦畔の間隔も10.0m、と1対の畦畔同士はほぼ等間隔である。隣接する(その5)調査区では、ほぼ連続する位置に東西の畦畔が、そのさらに東の、(その6)調査区では東西畦畔とそれに25.0m間隔で交差する南北畦畔が検出されている。しかし、1区では調査区の東西幅が10.0mと狭い事もあり、南北方向の畦畔は検出されなかった。

西にいくほど遺構面が削平されて低くなっている、畦畔の検出は平面形での痕跡を検出したのみである。畦畔と畦畔の間がくぼみとなっている部分もあるが、132溝以外は不明瞭である。

133流路(図26) 2区では第7-1 a面54流路とほぼ同位置に、より古い段階の恩智川流路である133流路を検出した。

133流路は54流路と比較すると川幅が若干狭くなり、最大幅4.0m、底部幅2.2m、深さ0.3mをはかる。遺物は出土していない。

第7-4 a面は第7-4 a層や第7-4 b層に瓦器椀や土師器を含み、13世紀前半代の遺構面と考えられる。

(3) 第8 a面の遺構(図27、写真図版9)

第8 a面は、断面観察では識別できるが層界が曖昧であり、3区でのみ遺構面調査を行った。1区北壁付近では第8 a層はさらに2層に分層可能であり、第8-2 b層も部分的にではあるが堆積していた(図7)。

3区では、1・2区と反対に第7 a層の堆積が薄く、第8 a層は層厚0.2mと一定の厚さで堆積していた。また、第7 a層と第8 a層の間にわずかに砂層(b層)が残るため、識別が容易であった。

第8 a面は灰色細砂混じりシルトをベースとし、遺構面の高さは1区でT.P.+11.1~11.2m、2区でT.P.+11.2~11.3m、3区でT.P.+11.3~11.4mである。第8 a面以降は南から北へ低くなる傾向が逆転し、南から北へ高くなる地形をとる。3区の中央から北で、特に傾斜の度合いが強くなり北へと下がる。遺構は、3区で畦畔を1本検出した。

134畦畔 3区では、調査区南端で南北方向の134畦畔を検出した。真方位よりやや西にふり、北西-南東を主軸とするが、長さ約3.0m検出したのみで、北端は調査区外へとのびて途切れる。隣接する(その1)調査区でも、わずかに西にふる南北畦畔が検出されており、南北長地型の水田区画が確認されている。この畦畔と134畦畔の間隔もほぼ合致する事から、1区から3区まで連続した南北長地型地割の区画があったと推定する。

第8 a面は瓦器椀などの出土遺物から、12世紀代の遺構面と考えられる。

(4) 第9 a面の遺構(図28、写真図版9)

第9 a面は、断面観察では識別できるが層界が曖昧であり、3区でのみ平面調査を行った。

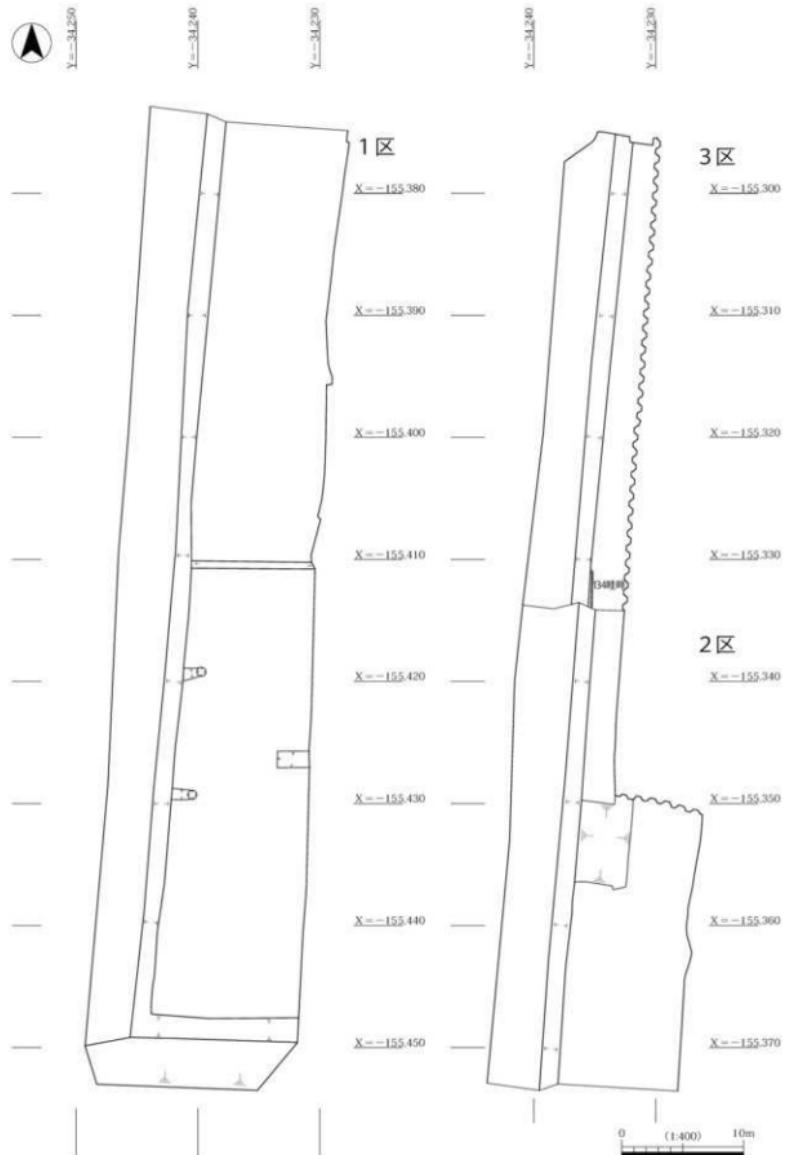


図27 第8a面平面図



図28 第9a面平面図

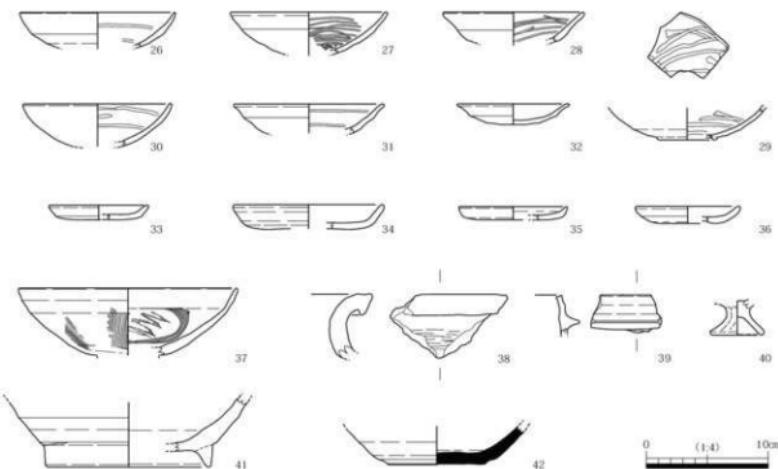


図29 第7-1a層・第7-2a層・54流路出土土器実測図

第9a層は第8a層よりやや緑色を帯び、粘質が強い。第9a面は灰色シルトをベースとし、遺構面の高さは1区でT.P.+11.0~11.1m、2区坪境以南では第9a層はほとんどなくなるが、坪境以北では段違いに高くなってT.P.+11.3~11.4m、3区でT.P.+11.2~11.3mである。

3区では第9a層は層厚0.3~0.4mと厚く、北にいくと若干薄くなる。平面精査を行ったが遺構は検出されなかった。1・2区に隣接する(その5)・(その6)調査区では、格子状の地割が、3区に隣接する(その1)・(その2)調査区では南北長地型の地割が検出されている。

第9a面は瓦器椀などの遺物から、第8a面よりわずかに古くなり、11世紀後半から12世紀前葉の遺構面と考えられる。また、第9b層以下は出土遺物に瓦器が含まれなくなり、土師器、須恵器、黒色土器が主となる。古代から中世への転換期にあたるのが、第8a面から第9a面であり、この時期に地割にも変化が生じると思われる。

(5) 遺物(図29~31、写真図版16~18)

26~28は1区の第7-1a層・第7-2a層から出土した瓦器椀である。

26は体部下半から底部を欠損する。口径も小さく器高も浅くなっている。体部内部のミガキは大きく、数条しか認められない事から、高台も消失した和泉型IV-3型式相当の瓦器椀と考えられる。27と比較すると新しい時期のものである。

27の口径は26とほぼ同法量だが、器高は深い椀形をなし、底部は欠損する。外面口縁部に強い棒状工具でなでた痕跡があるが、体部にミガキは認められない。体部内部は幅1~2mmの細いミガキが密に施され、わずかに残る内面見込みには、体部と同じ幅の平行線ミガキが認められる。和泉型IV-2型式相当の瓦器椀と考えられる。

28は26・27と比較すると法量は小さいが、器壁が厚く口縁部は外反気味である。体部内面にはミガキが疎らに施される。和泉型IV-3~4型式相当の瓦器椀と考えられる。

29は3区の第7a層から出土した瓦器椀である。体部下半から底部のみ残る。底径が4.8cmと大きく、

体部も大きく広がる椀器形をなす事から、口径は14.0～15.0cm、器高も4.0～5.0cmあったと推測される。高台は、粘土紐状のものを貼り付けただけで整えられずに高さを失い、底面はつぶれ丸みを帯びる。外面の成形はかなり粗く、ユビオサエ痕が明瞭に残る。内面には幅4mmの太いミガキを疎らに施す。和泉型III-1～2型式相当の瓦器碗と考えられる。

30・33は2区の第7-1a面54流路から出土した。30は瓦器碗で、底部を欠損する。器壁は口縁部から体部まではほぼ同じ厚さで、口縁端部は丸みを帯びる。外面にはミガキは認められず、内面は幅3mmの太いミガキが数条巡るのみである。和泉型IV-3型式相当の瓦器碗と考えられる。

33は土師器皿で、器壁は厚く、底部から体部が直線的に立ち上がる。13世紀半ばと考えられる。54流路から出土した遺物は、30が14世紀初め、33が13世紀半ばと時期差があるが、遺構の特質上古い時期のものを巻き上げたと考えられ、54流路の廃絶時期として14世紀初めが求められよう。

31・32は2区の第7-1a層～第7-3a層から出土した。31は瓦器碗で、法量も小さく内面のミガキもごく疎らな事から、和泉型IV-3型式相当の瓦器碗と考えられる。32は瓦器皿で、強いユビオサエのために口縁部は外反する。胎土も精良で精巧なつくりだが、内外面にミガキは認められない。

34～36は土師器皿である。34は大形で、口径12.4cmをはかる。口縁部は緩やかに立ち上がる。35は33に似るがより器高が浅く、口縁端部は細くつまみ上げる。36はやや厚く、口径に比して器高が深い。いずれも13世紀半ば～後半と考えられる。

37は2区の第7-1a層・第7-2a層から出土した青磁碗である。口径17.8cm、器高5.4cm、底径5.4cmをはかる。口縁部は直線的に上方にのび、屈曲して体部へと続く。胎土は精良で、体部内外面ともオリーブ黄色に施釉されるが、底面は施釉されない。体部外面には櫛目文が、内面にはヘラによる片彫りで團線を描き、その中に櫛でジグザグ文様を描いている。同安窯系の青磁で、12世紀半ば～後半のものと思われる。

38は1区の第7-1a層・第7-2a層から出土した。陶器甕の口縁部である。口縁部を外に折り曲げ、断面がN字形で、常滑焼と思われる。外面ともに煤が付着し、被熱した痕跡が残る。

39は3区の第7a層から出土した。瓦質土器羽釜の口縁部から鍔部である。いぶし焼が不十分で炭素が吸着していない。

40は1区の第7-1a層・第7-2a層から出土した。土師器ミニチュア土器高杯である。杯部は欠損し、脚部から台部のみ残る。

41は2区の第7-1a層・第7-2a層から出土した。陶器鉢で体部下半から底部のみ残る。底径13.6cm、高台高1.8cmをはかる大形の鉢である。体部外面に粘土紐の接合痕が残る事から、粘土紐を巻き上げた後にロクロ成形されている事が分る。外面は縦横にヘラナデ、底部近くは回転ヘラケズリを施し高台を貼り付ける。高台は断面三角形でほぼ垂直にのびる。内面は使用による荒れか、ローリングを受けたものか、かなり摩耗している。胎土は粗く、5mm程度の白色礫を含み、灰白色を呈する。胎土や成形技法から常滑焼の鉢1類（山茶碗系）と考えられ、片口鉢になる可能性が高い。12世紀後葉～13世紀前葉のものか。近畿では出土例が少ない。

42は1区の第7-1a層から出土した。東播系須恵器こね鉢の底部である。内外面を回転ナデで仕上げるが、全体に粗雑な作りで外面にはユビオサエ痕が残る。

43・44は平瓦である。43は1区の第7-1a層・第7-2a層から出土した。側縁のみが焼成時のままで、それ以外は欠損する。凹面には布目痕が残る。

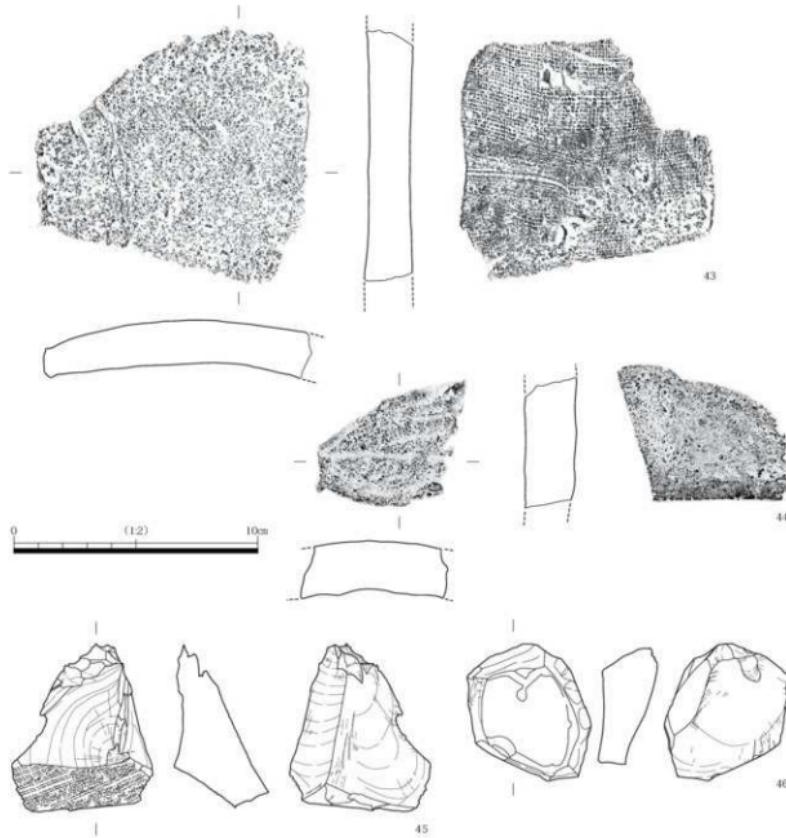


図30 第7-1a層・第7-2a層出土瓦・石器実測図

44は3区の第7a層から出土した。小片で、凹面と狭端面は火を受け、炭化している。

45・46は2区から出土したサヌカイトの剥片である。45の1面は自然面で残り、石核から打ち欠いたままの状態と思われる。46も石核から打ち欠いた際に生じた破片と思われる。b面以外の3面が風化し、蝕化しているのは、地中の水分や鉄分によって変質を受けたものか。

47は3区の第8a層から出土した瓦器椀である。口径17.8cm、器高6.2cm、底径5.3cmで、深い椀形を呈する。体部から口縁部は緩やかに立ち上がり、ヨコナデによってわずかに外反し、先端は丸く収める。高台もきれいに整えて貼り付け、断面三角形である。体部内面は幅1mmの細いミガキを密に施す。内面の見込みは格子状ミガキである。和泉型瓦器椀I-3型式相当、12世紀前半のものと考えられる。

48は1区の第9b層から出土した瓦器椀である。体部下半わざかと底部のみ残存する。底径7.6cmである。高台は外に大きく張り出す。内面には密にミガキが、見込みには格子状ミガキが施され、外

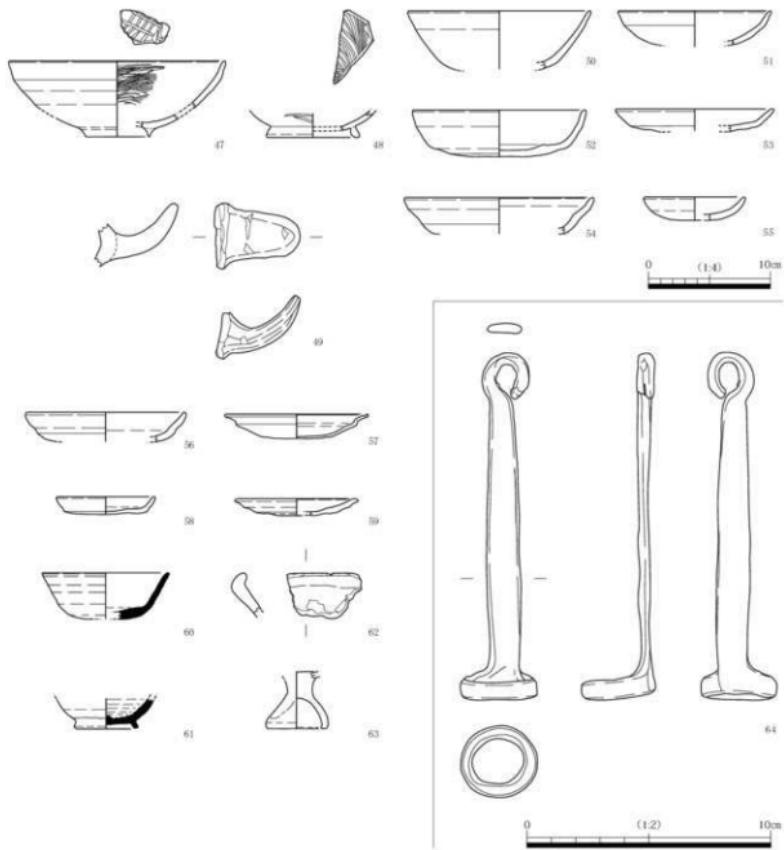


図31 第7-4a層・第8a層・第9a層出土遺物実測図

面にもわずかにミガキが認められる。ミガキの太さや高台のつくりなどは47よりやや新しい印象だが、47と同じく和泉型I-3型式相当であろう。

49は1区の第7-4a層～第9a層から出土した土師器楌の把手である。手づくねで成形され、湾曲して上方にのびる。8世紀後半のものであろうか。

50は2区の第7-4a層～第9a層から出土した土師器楌である。底部を欠損する。内外面ともナデで仕上げられている。51は1区の第9b層から出土した土師器楌である。器高は浅く、口縁端部は平らである。

52～59は第7-4a層～第9a層から出土した土師器杯もしくは皿である。52は1区の第9a層もしくは第9b層から出土した土師器杯である。底部から体部が直線的に立ち上がる。53は1区の第7-4a層～第9a層から出土した土師器大皿である。口縁部はわずかに外反する。54は2区の第7

— 4 a 層～第 9 a 層から出土した土師器杯である。器壁は厚く、外面の強いユビオサエによって、口縁部と体部の境に凹凸ができる。55 は 1 区の第 7 — 4 a 層～第 9 a 層から出土した土師器皿である。口縁部から体部は緩やかに立ち上がる。

56 は 2 区の第 7 — 4 a 層～第 9 a 層から出土した土師器杯である。器壁は厚く、外面の強いユビオサエによって、口縁部と体部の境に凹凸ができる。57 は 2 区の第 7 — 4 a 層～第 9 a 層から出土した土師器皿である。器壁はきわめて薄く、口縁端部を内側に巻き込む、いわゆるての字状口縁皿で、10 世紀代のものであろう。58 は 2 区の第 7 — 4 a 層～第 9 a 層から出土した土師器皿である。底部から体部が直線的に立ち上がる。内外面に煤が付着する。59 は 3 区の第 9 a 層から出土した土師器皿である。ヨコナデとナデで成形されるが、凹凸が激しい。

土師器椀・杯・皿は時期的に幅があるが、10～11 世紀代のものが多い。

60 は 2 区の第 7 — 4 a 層～第 9 a 層から出土した須恵器杯身である。底部は平らで、稜も消失し底部から口縁部へとなだらかに広がっていく。口縁端部は平らである。内外面とも回転ナデ調整である。飛鳥時代のものであろう。

61 は 2 区の第 7 — 4 a 層・第 7 — 4 b 層から出土した須恵器杯身である。上半は欠損し、体部下半から底部の出土である。底径 5.2cm と小形で、体部の膨らみから長胴の壺になると推測される。高台の接地面は平らであり、わずかに外に張り出す。底部と高台の境には接合痕が残る。内面は回転ナデ、外表面は回転ケズリ、ナデ調整である。奈良時代中期と思われる。

62 は 3 区の第 8 a 面から出土した。土師器甕の口縁部である。小片であるが、口縁部は短くつまみ上げ、くの字状を呈する。

63 は 2 区の第 7 — 4 a 層～第 9 a 層から出土した。土師器のミニチュア土器高杯で、杯部から上を欠損し、脚部のみである。内外面ともナデで仕上げられるが、外面には成形の際のシボリの痕跡や、焼成時の黒斑が残る。奈良時代から平安時代のものであろう。

64 は 2 区の第 7 — 4 a 層～第 9 a 層から出土した。金属製品の馬具で、引手である。長さ 14.2cm、最大幅 3.15cm で、厚さ 0.4cm をはかる。上端には直径約 2.0cm の鉤部分をもち、下端には鉤に対しては直角の方向で直径約 3.0cm の環が作られている。引手とは轡の一部で、馬の口に嵌める喰にまず、遊金という円環の金具を連結させる。引手の鉤部分をこの遊金に連結させ、もう一方の環部分に手綱を繋げる道具である。喰は遊金以外には鏡板、立聞とも連結しており、これらは馬の頬から耳の後ろを通って、頭の面繫へと続く。出土品は鉄製で完形品だが、全体に錆が付着する。出土層位から 11 世紀から 13 世紀のものと推定される。

古墳時代の馬具は古墳からの出土品などで報告例があるが、古代末から中世になると伝世品はあっても出土品はほぼない。平成 22～23 年度、滋賀県高島市の天神畠遺跡の川跡から、12 世紀末から 13 世紀の土器と共に轡が出土しているのが、鎌倉時代の出土資料としては初出とされている。立聞、鏡板、遊金、喰、引手が繋がった状態で一式出土した。64 も出土時期に幅があるが、包含遺物は古代から中世前期を示しており、引手の出土品としては古い時期の貴重な資料と言える。ただし、耕作地の開墾に馬を使用したとしても、その際に轡や鞍を装着して騎乗したとは考えにくい。川などに流されて漂着なし、何らかの形で耕作土中に混入したものか。

第 7 — 4 a 層は 13 世紀前半まで、第 8 a 層は 12 世紀前半までの遺物を含み、第 9 a 層と第 9 b 層は、10 世紀から 11 世紀を主体とする。

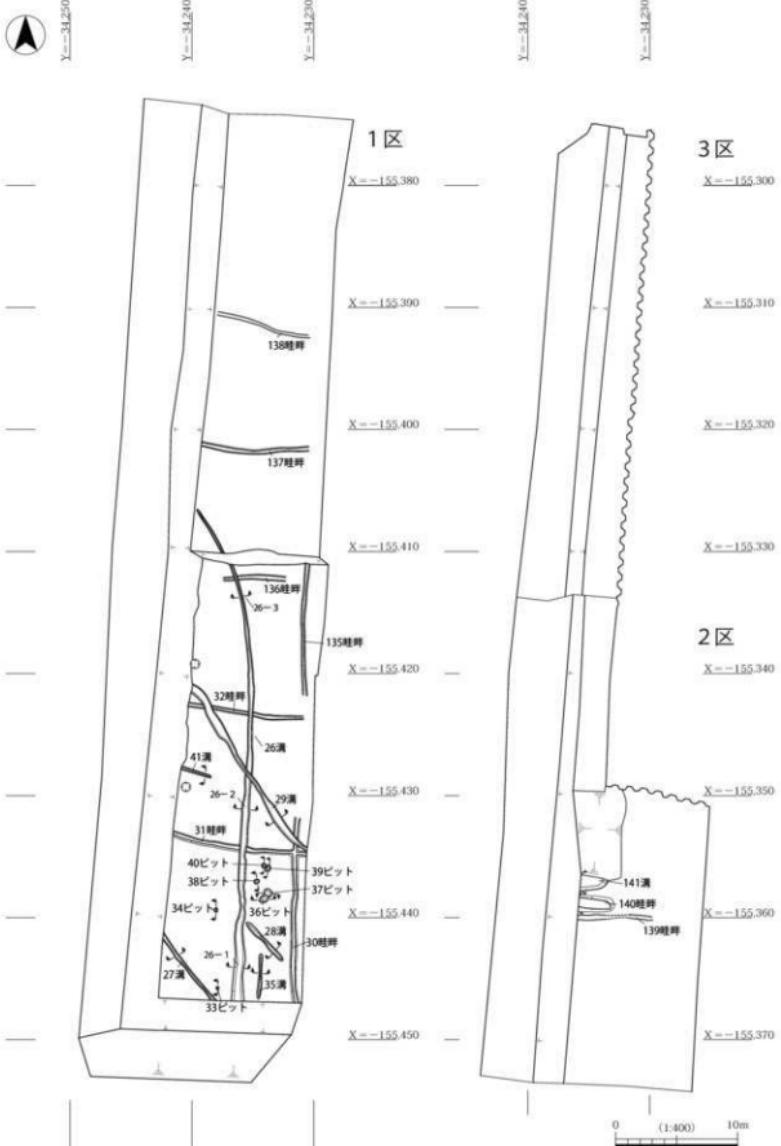


図32 第10-1a面平面図

第6節 第10-1a面・第10-2a面の遺構と遺物

(1) 第10-1a面の遺構(図32・33、写真図版10・11)

1区南半では第9b層が厚く堆積していたため、遺構面の残存状況が良好であった。第10a層の堆積は南で厚く、1区南半では第10-1b層を挟んで第10-1a層と第10-2a層に分層可能だった。しかし、第10a層の堆積は北にいくほど薄くなり1層としか判別できず、2区と3区では第10-1a面のみの検出となった。従って、第10-1a面は全区を通して調査を行ったが、第10-2a面は1区のみで調査した。

第10-1a面は暗オリーブ灰色シルトをベースとし、遺構面の高さは1区でT.P.+11.0~11.1m、2区でT.P.+10.8~10.9m、3区でT.P.+11.0mである。南から北へ低くなる地形をとる。

1区では、東西方向の畦畔5本と、東端で南北方向の畦畔を2本検出した。その他、畦畔を切る溝やビットを検出した。2区では、X=-155,360付近で東西方向の畦畔や溝を検出した。3区では遺構は検出されなかった。

31・32・136~138畦畔 1区で検出した東西方向の畦畔である。いずれも底部幅0.5m程度、高さ約0.1mで、頂部を削平されて痕跡を検出した。真方位よりやや北にふる。畦畔と畦畔の間隔は10.0~11.0mと考えられる。

隣接する(その5)調査区では、第10-1a面で、それまでの東西長地型の地割から、ほぼ正方形の格子状の地割へと変遷する(図46)。しかし、当調査区では東西の31畦畔と南北の30畦畔が十字状に交差する以外は、格子状の地割区画はみられない。

30・135畦畔 1区東端で検出した南北方向の畦畔である。東西畦畔同様、削平されて平面痕跡の検出にとどまった。30畦畔は31畦畔と交差して十字状を呈する。南北畦畔と東西畦畔が交わるのはこの1箇所のみなので、1区に格子状の水田区画が存在したかは明らかでない。

26溝(図33) 31・32・136畦畔の上面の遺構として、畦畔に交差して南北にのび、X=-155,420付近から弧を描いて緩やかに西に曲がる溝である。幅を狭めて調査区外へとのびていく。検出長は40.0m以上あり、最大幅0.8m、最小幅0.3m、深さ0.05~0.1mをはかる。

埋土は単層で、第9b層の灰色シルトが埋積する。東西畦畔を切る事から、水田区画より新しい遺構と言える。26溝は、そのさらに上面遺構の29溝に切られる。

27~29溝(図33) 1区南半で、北西-南東を主軸として45°の角度で斜行する、27~29溝を検出した。

27~29溝は北西-南東を主軸として規則的に並行に並ぶ事から、相関性をもった遺構と捉える。条里型地割には沿っていない遺構だが、直線的な形状や、(その5)調査区でも同方向、同規模の溝が検出されており、並行する溝が数本並ぶ事からすると、人為的な溝と考えられる。29溝が26溝や30畦畔、32畦畔を切る事から、これらの溝は第10-1a面では最も新しい遺構と言える。

27溝は幅0.5m、深さ0.05mを、28溝は幅0.45m、深さ0.05mを、29溝は幅0.6m、深さ0.08mをはかる。27溝と28溝は6.5m、28溝と29溝は7.5mの間隔で並行に並ぶ。

35・41溝(図33) 35溝は1区南東端で検出された南北溝である。26溝の東で、26溝に沿うように位置する。幅0.3m、深さ0.05mをはかる。

41溝は31畦畔と32畦畔の中間に位置する東西溝である。幅0.2m、深さ0.05mをはかる。

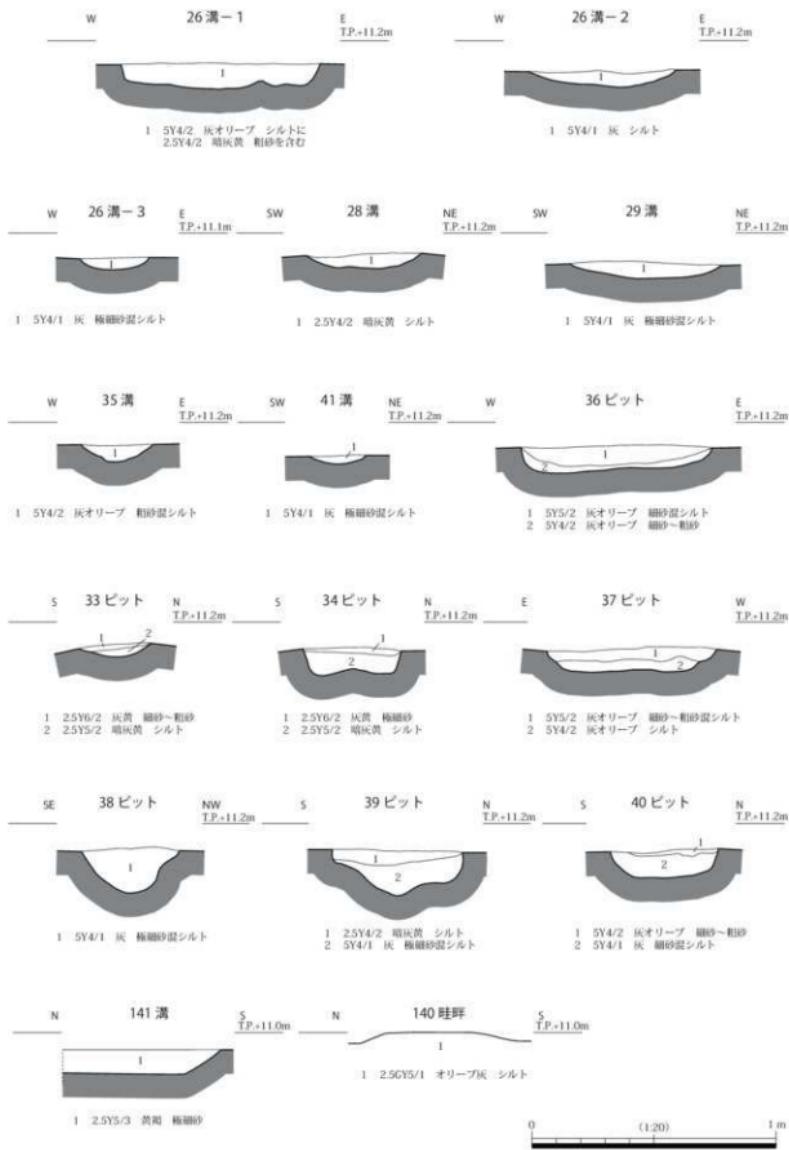


図33 10-1a面遺構断面図

33・34・36～40 ピット（図 33）1 区南半で検出した、円形もしくは楕円形のピットである。最小の 33 ピットで直径 0.25 m、深さ 0.05 m、最大の 36 ピットで直径 0.8 m、深さ 0.2 m をはかる。

38 ピットは断面 U 字形で、人為的な埋め戻しによる土が埋積していた。それ以外のピットは、第 10 - 1 a 面のベース土が埋積するので、自然のくぼみに近いかもしれない。

139・140 畠畔、141 溝（図 33）2 区の坪境付近で検出した東西方向の畠畔と溝である。139 畠畔は頂部を削平されており、痕跡のみ検出した。幅 0.4 m で、調査区西端から約 7.0 m 東にのびて消失する。140 畠畔は 139 畠畔の北に位置し、西端から長さ 3.0 m で消失する。頂部幅 0.7 m、底部幅 1.1 m、高さ約 0.1 m をはかる。位置と規模から坪境の大畠畔とも考えられる。

141 溝は 140 畠畔の北に位置し、やはり西端から東に 2.5 m で途切れる。北半は攪乱によって切られる。残存幅 1.3 m、深さ 0.2 m をはかる。

第 10 a 層に古代の土師器や須恵器などを含む事から、第 10 - 1 a 面は 10 世紀を中心とする遺構面と考えられる。また、第 10 a 面より上層に巻き上がった遺物ではあるが、2 区で 7 世紀後葉の複弁蓮華軒丸瓦が 1 点出土している。

第 10 - 1 a 面以前になると、畠畔などの耕作遺構は検出されないので、第 10 - 1 a 面は条里地割に基づいて区画された、最古の耕作遺構面と言える。しかし、今回の調査で東西方向の畠畔は確認できたが、既往の調査区でみられるような格子状の地割は確認できなかった。また、遺構の検出範囲も X = -155,360 の坪境より南に限定される。

（2）第 10 - 2 a 面の遺構（図 34・35、写真図版 10・11）

第 10 - 2 a 面は、第 10 - 1 b 層の存在によって、第 10 - 1 a 層と第 10 - 2 a 層が分層可能な 1 区南半でのみ検出した。従って、2 区と 3 区では遺構面を検出していない。

第 10 - 2 a 面は暗オーリープ灰色シルトをベースとし、遺構面の高さは 1 区で T.P. + 10.8 ~ 11.0 m である。南から北へ低くなる地形をとる。2 本の溝や複数のピットを検出した。

42・43 溝（図 35）42 溝と 43 溝は、第 10 - 1 a 面と逆方向の、北東 - 南西を主軸として真方位より 45° 斜行する溝である。42 溝と 43 溝は約 1.5 m 間隔で並行する。

42 溝は蛇行しながら 43 溝に沿ってのび、調査区内で両端が検出される。長さ約 11.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.05 m をはかる。第 10 - 1 b 層が埋積する。

43 溝は両端とも調査区外に続く。北東端から途中までは直線的だが、北西に向かって蛇行して、調査区外に延長する。長さ約 18.5 m、幅 0.6 ~ 1.35 m、深さ 0.05 ~ 0.15 m をはかる。断面を観察すると、浅く広がる部分、深く V 字形を呈する部分、踏み込みによって攪拌された部分と様々である。

42 溝、43 溝は幅も一定でなく、平面形も直線的ではなく不定であるため、人工的に構築されたものではなく、自然地形によって生じた落ち込み、溝状の遺構と捉えられる。

44～51 ピット（図 35）44～50 ピットはいずれも直径 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.05 m の円形の小形のピットである。1 区南東部に集中するが、検出位置は様々で相互距離にも一定性がなく、建物などを構成するピットにはなり得ない。従って、各ピットに相関性はないと思われる。

51 ピットは 43 溝内で検出した。断面形が楕形で、直径 0.5 m、深さ 0.2 m をはかる。

第 10 - 2 a 面は第 10 - 2 b 層に古墳時代から平安時代の遺物を含み、第 10 - 1 a 面と大きな時期差はない、10 世紀代の遺構面と考える。

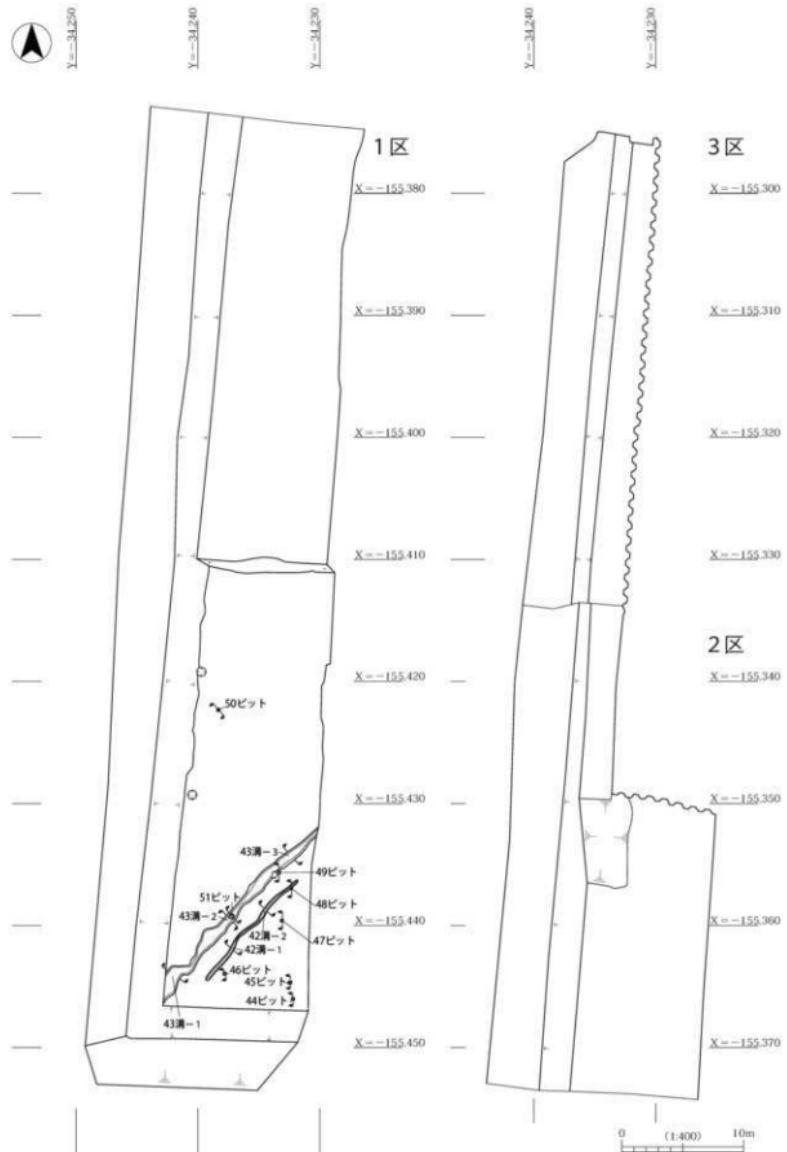


図34 第10-2a面平面図

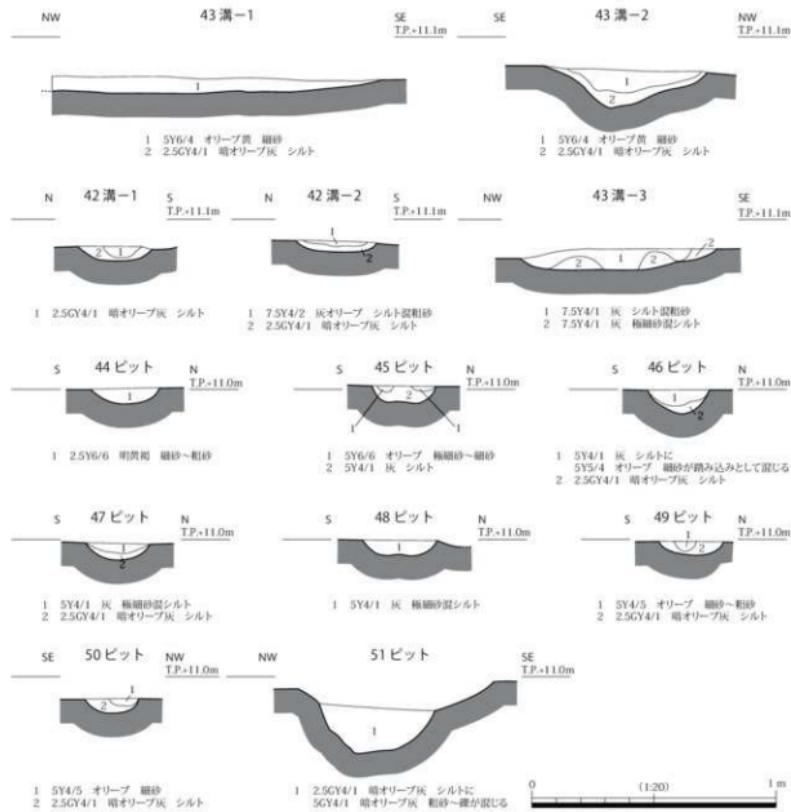


図35 第10-2a面遺構断面図

(3) 遺物 (図36・37、写真図版19・20)

65~70は第10-1a層~第10-2b層から出土した須恵器である。

65は1区の第10-1a層から出土した杯蓋である。天井部のみ残り、口縁部は欠損する。天井はほぼ平坦で、中心には宝珠形の直径3.0cmのつまみを有する。稜線までは回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデ調整である。66も1区の第10-1a層から出土した杯蓋である。65が平坦なのに対し、66はドーム形の器形であるが天井部とつまみを欠損する。かえりではなく、口縁端部は平らだが、中央がわずかにくぼむ。回転ナデ調整である。65、66とも平城三型式、8世紀中頃の所産と思われる。

67は1区の第10-2a面42溝及び第10-2a層から出土した。須恵器杯蓋で、天井部と口縁部を欠損する。復元口径14.0cm、残存器高3.1cmをはかる。稜線や天井部の段が明瞭に残る事から6世紀前半のものと考える。

68は2区の第10a層・第11a層から出土した。本来は杯蓋であるが、天井部内面が擦られて摩耗

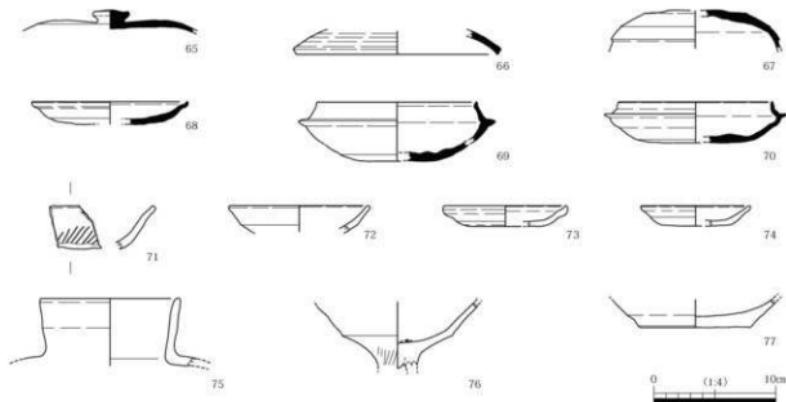


図36 第10-1a層・第10-2a層他出土土器実測図

している事から、裏返して硯に転用したと考えられる。口縁先端は丸みを帯びる。平城VII型式、9世紀半ばのものと考えられる。

69は1区の第10-1a層から出土した杯身である。口縁部の立ちあがりは内傾し、端部は平らである。受部は短く、水平にのびる。底部外面は平らだが、内面は凹凸が激しい。TK 10型式からTK 43型式、6世紀中頃のものである。

70は1区の第10-2a層・第10-2b層から出土した杯身である。立ちあがりは短く、内径したのち、垂直にのびる。口縁端部は丸く細い。受け部も細くやや上外方にのびる。口径、器高とも大きく、MT 85型式、6世紀中頃のものである。

71・72は2区の第10a面から出土した土師器杯と皿である。71は小片であるが、体部内面下半に幅1mmの放射線状ミガキが4mm間隔で施される。平城III型式、8世紀中頃のものである。

72は小形の椀とした方がいいかもしれない。口縁部は上方にのび、端部は丸くおさめる。

73は1区の第10-1a面30畦畔付近から出土した土師器皿である。口縁部は厚く肥厚し、口縁部と体部の境は、強いユビオサエによって屈曲する。74は3区の第10a層から出土した土師器皿である。底部は平らで、底部から口縁部は外上方にのびる。口縁部はつまみあげ、端部は丸い。73、74とも10世紀代のものか。

75～77は1区の第10-2a層・第10-2b層から出土した弥生土器である。75は短頸壺の口縁部から肩部で、肩から垂直に頸部が立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。生駒西麓産の胎土で、弥生時代後期のものである。76は高杯で、杯部上半から口縁部と脚部から台部は欠損する。摩耗しており調整不明だが、杯部と脚部の境にはタテハケメが認められる。77は壺の底部である。内面に一部焼成時の黒斑があり、弥生時代前期のものと思われる。

78は1区の第10-2a層・第10-2b層から出土した台皿状石製品である。表面、内面に直径2、3mmの気泡がみられ、一部を除き欠けや割れが生じている。図でアミセした部分や側面は摩耗しており、凹状にくぼんでいる。78を台として、すりつぶす、こねるといった作業により摩滅したと考えられるが、側面の摩耗は何かをあてがってこすった痕跡であろうか。時期は不明であるが、75～77と

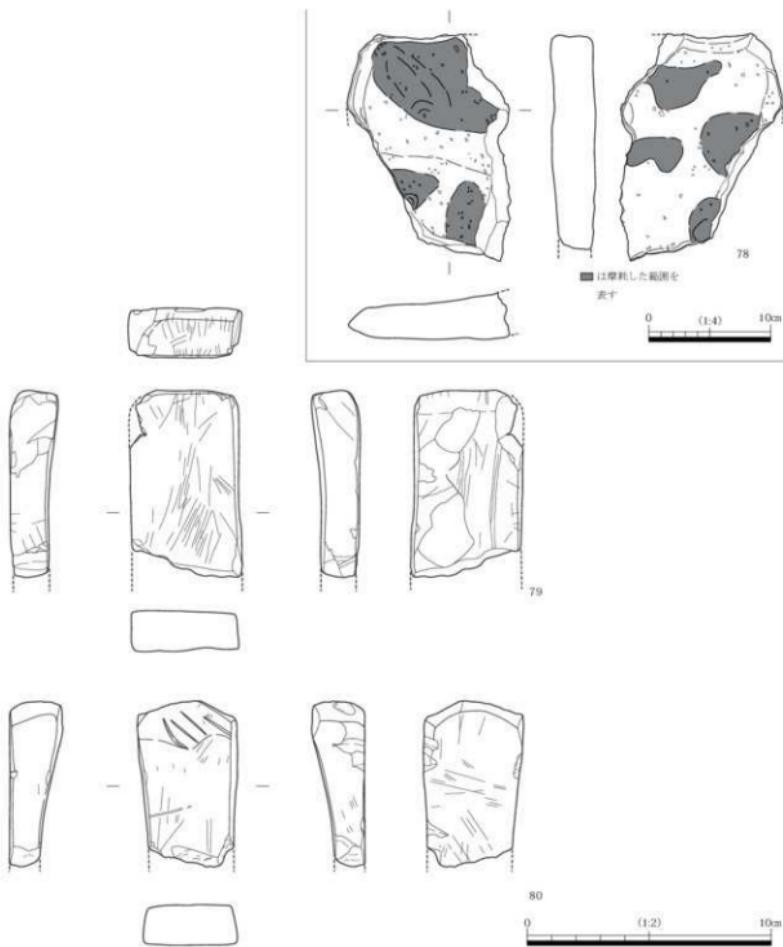


図37 第10-1a層・第10-2a層出土石製品実測図

同層からの出土であるので、弥生時代以降、古代以前と言える。

79は2区の第10a層・第11a層から出土した砥石である。表裏面だけでなく、上と左右の側面にも刃物による擦痕が多数認められる。特に表面は中心部分がくぼんでおり、かなり使い込まれて摩耗している。目の細かい砂岩製で、手に握れる程度の大きさであり、仕上げ砥と思われる。

80は3区の第10a層以下から出土した砥石である。表裏面、側面に多数の擦痕や研磨痕が残る。79と似た法量であり、石材も同じ砂岩製で、仕上げ砥と思われる。

第10-1層・第10-2a層は弥生時代、古墳時代と8~10世紀代の遺物を含んでいる。

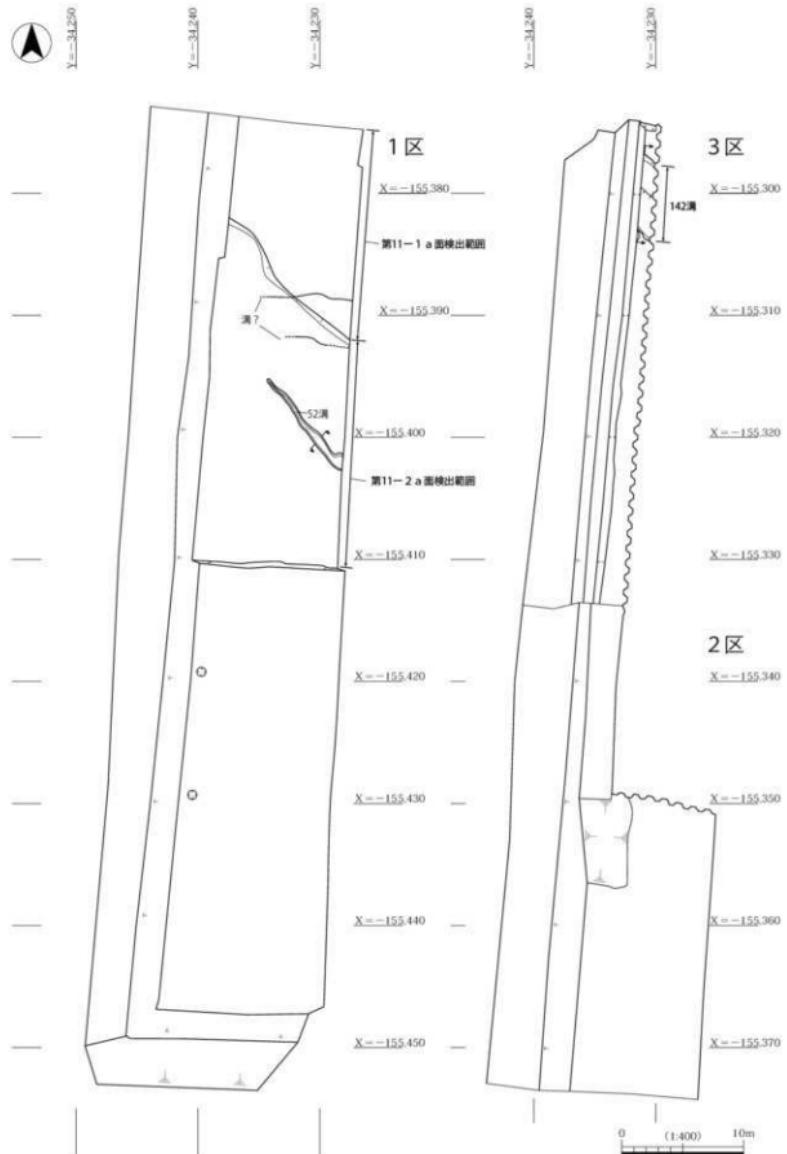


図38 第11 a面平面図

第7節 第11 a面・第12 a面の遺構と遺物

(1) 第11 a面の遺構(図38・39、写真図版11)

第10-2 b層は付近が水域化して堆積した止水堆積層である。第10-2 b層に覆われた第11 a層は黒色シルトをベースとする暗色帶層で、他層と識別が容易で鍵層となる。1区南半では第11-1 a層と第11-2 a層に分層可能であるが、第11-2 a層の方がより黒色化し、有機物を含む。第11 a層は長期間かかって堆積した古土壤層である。

2区では第11-1 a層と第11-2 a層の境界が曖昧となり、3区では分層できなかった。

遺構面の高さは1区でT.P.+10.7m、2区でT.P.+10.8~10.9m、3区でT.P.+10.9mである。北から南へ徐々に低くなる地形をとるため、全域で第11 a面を検出し得なかった。

第11 a層は2層合わせて、南では約0.1mの厚さだが、北にいくにつれて0.2~0.3mと層厚が増す。1区の南端から3分の2は設計掘削深度より深くなるため、第11 a面の調査を行っていない。そこで、図38で図示した箇所は、設計掘削深度より高い箇所のみ、第11-1 a面を調査した。その後、X=-155.405付近までは設計掘削深度より高かったので第11-1 a層を掘削し、第11-2 a面の遺構として52溝を検出した。つまり、1区のみ第11-1 a面と第11-2 a面が混在するが、あわせて第11 a面として報告し、2区と3区は第11-1 a層上面を第11 a面とした。

52溝(図39) 1区北半で北西-南東方向に斜行する52溝を検出した。北西-南東を主軸とし、調査区中央で途切れる。検出長約10.0m、幅0.8m、深さ0.1mをはかる。52溝は(その5)・(その6)調査区の第11-1 a面で検出した溝の続きと思われる(図45)。また、52溝の北で幅4.0mの東西方向の溝状の痕跡を検出するが、これも(その5)調査区で検出した溝(流路)の続きと思われる。

142溝(図39) 3区は調査区東西幅が1.0mと狭小であるが、北端で142溝を検出した。

142溝は主軸を北西-南東とする溝で、南北幅6.0m、北端から2.8mまでは深さ0.1mをはかるが、そこから南は一段深くなり、深さ0.2mをはかる。

2区は調査を行っていないが、第12 a面で検出した56~58溝やその上面の土坑が、第11 a面の下面遺構となる可能性がある。

第11 a面ではこれまでの耕作遺構は消失し、自然地形に沿って溝を検出した。第11 a面は、弥生土器や古墳時代、古代の須恵器などを含む事から、古代以前の遺構面と考えられるが、詳細な時期は不明である。遺物量としては、弥生時代のものが多い。

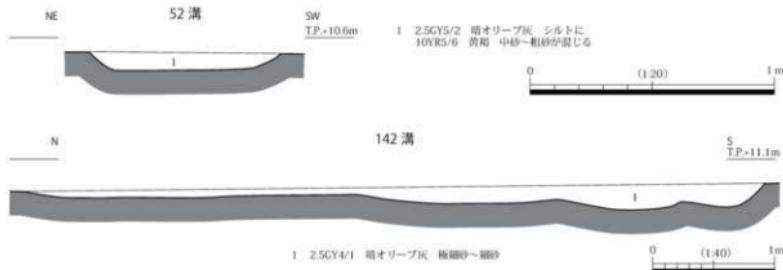


図39 第11 a面遺構断面図

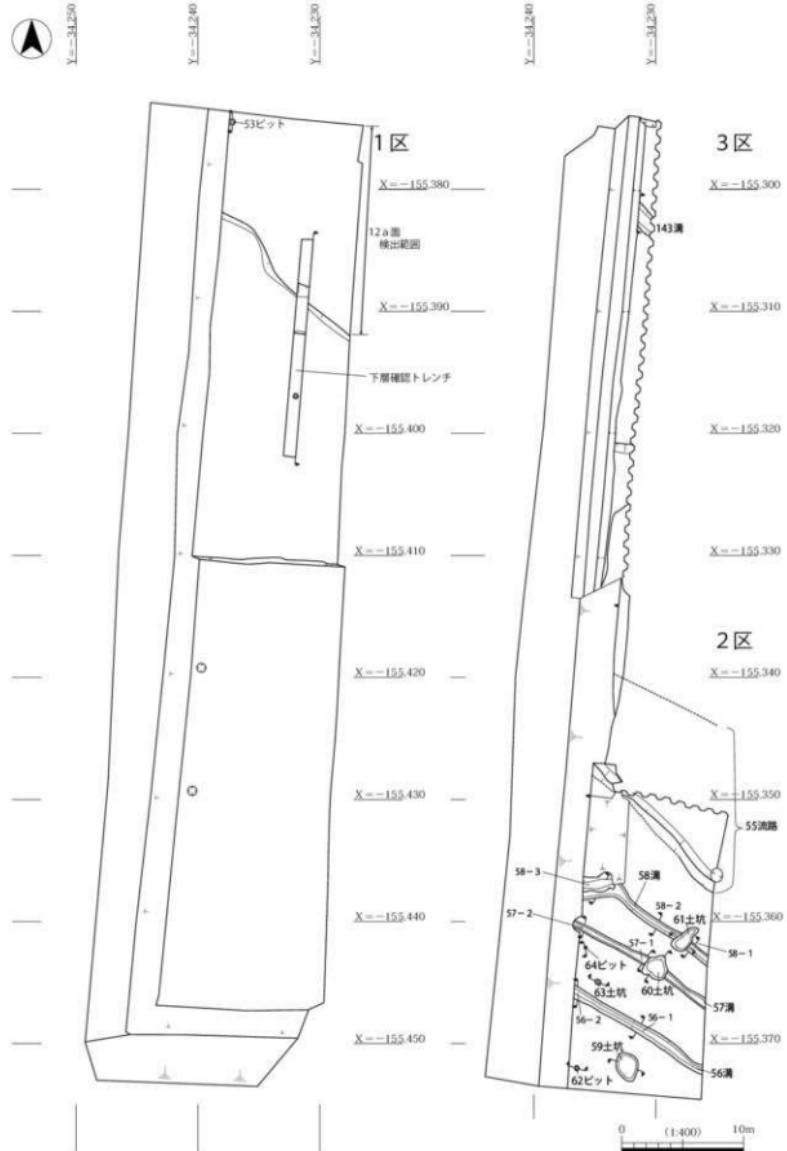


図 40 第 12 a 面平面図

(2) 第12a面の遺構(図40~42、写真図版12・13)

第12a層は青灰色シルトをベースとする層で、第12a層以下は遺物を包含しない無遺物層となるため、第12面を最終遺構面と捉える。

1区は第11a面同様に、第12a面を検出し得たのはX=-155,390以北にとどまり、北西端で53ピットを検出した。また、(その5)・(その6)調査区で検出された溝(流路)が、(その7)調査区まで続いているか確認するため、X=-155,384~-155,402の南北約18.0mにわたって、幅1.0mの下層確認トレンチを設定した。このトレンチでは第11a面、第12a面で調査を行い、第11a面では遺構を検出しなかったが、第12a面で溝状遺構やピットを確認した。

2区から3区にかけて、(その6)調査区からのがびてくる大規模な55流路を検出した。他に2区では56~58溝、土坑、ピットなどを、3区は北端で143溝を検出した。

遺構面の高さは1区でT.P.+10.4~10.5m、2区でT.P.+10.5~10.7m、3区でT.P.+10.6~10.7mである。1区から2区へと高くなり、2区では南から55流路に向けて低くなり、55流路を過ぎて北の3区に入ると再び高くなる。高低差があるなかでも2区の低地部に遺構が集中する。

53ピット(図41) 1区の北西端では53ピットを検出した。直径0.5m、深さ0.2mをはかる円形のピットである。第11a層と第12a層の土が攪拌された土が埋積する。

1区のX=-155,390以南では、第11a層の途中で設計掘削深度に達したため、第11a面を最終面として第12a面の調査を行っていない。下層確認トレンチで検出した溝状遺構やピットは、自然地形のくぼみや落ちと考えられる。

56~58溝(図41) 2区では北西~南東を主軸とする56~58溝を検出した。各溝とも調査区を斜行して横切り、さらに調査区外へのがびていく。3つの溝は並行しており、その間隔は56溝と57溝が4.5m、57溝と58溝が2.5mである。

56溝は検出長12.5m、幅0.65~0.85m、深さ0.3~0.35mをはかる。断面は逆台形を呈し、3層の土が水平に堆積する事から、比較的長期間機能していたと考えられる。

57溝は検出長13.0m、幅0.75~0.8m、深さ0.1~0.2mをはかる。断面は皿形を呈し、単層の土が堆積する。60土坑に切られる。

58溝は検出長12.0m、幅0.6~1.85m、深さ0.1~0.35mをはかる。断面は皿形を呈し、幅が狭い個所では単一層の土が、幅広の部分では段落ちになって数層が堆積する。61土坑に切られる。他の溝が直線的なのに対し、58溝は水流が緩やかなためか、西側で幅広になる。

壁断面を観察すると、これらの溝は第11a面から切り込んでおり、第11a面の遺構を第12a面で検出したと言える。隣接する(その5)・(その6)調査区を斜めに走る溝と規模が合致し、位置的にも連続する。(その6)調査区東端から計測すると全長80.0m以上の長い溝である(図44)。

また、主軸の方向が北に位置する55流路や、さらにその北の(その1)調査区で検出した溝群とも同じであり、これは南東から北西に向かって低くなる自然地形によって、水流が微低地に集まつた結果と言える。

62・64ピット、63土坑(図41) 2区の南東で検出した小形のピットもしくは土坑である。

62ピットは直径0.35m、深さ0.2mをはかる。63土坑は直径0.5m、深さ0.3mをはかり、断面逆台形を呈する。64ピットは直径0.25m、深さ0.05mをはかる。底部の凹凸が著しい。

59~61土坑(図42) 2区南半で検出した、やや大形の土坑である。59土坑は隅丸方形の土坑で、

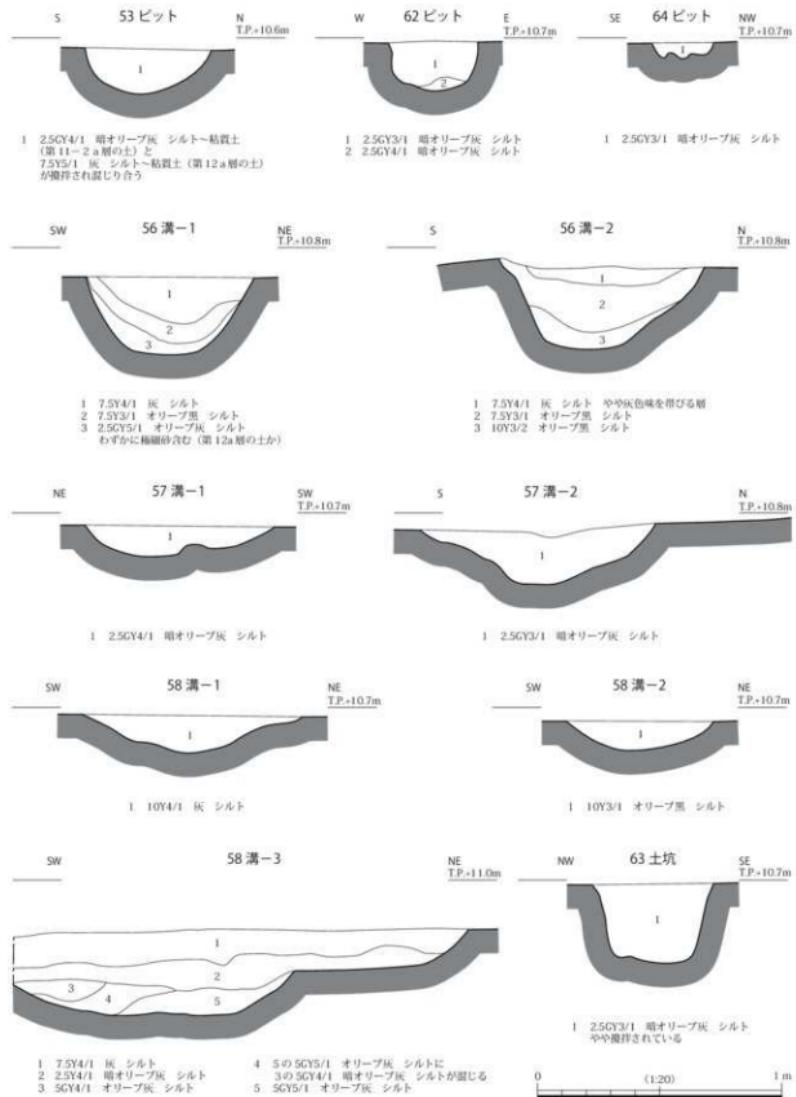


図41 第12a面遺構断面図-1

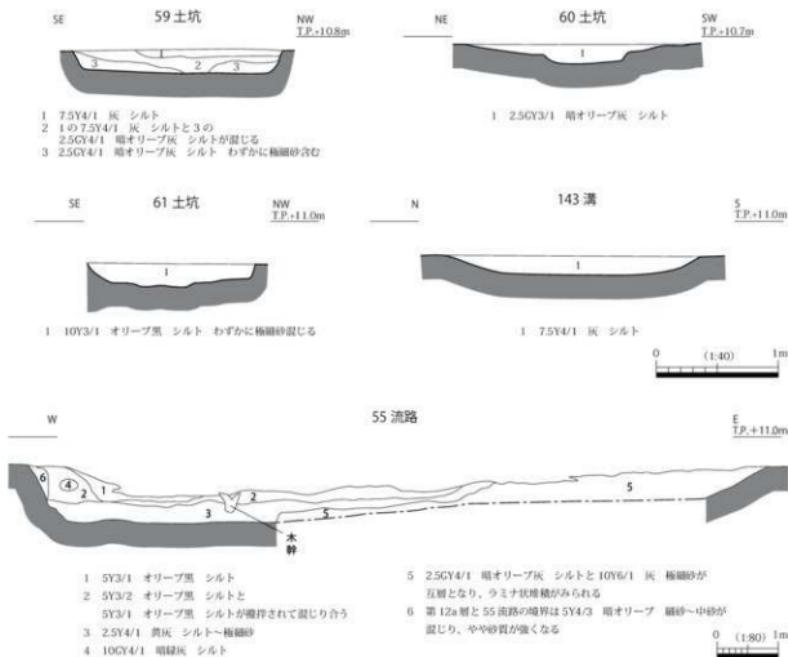


図42 第12a面遺構断面図—2

長辺 1.7 m、深さ 0.2 mをはかる。断面逆台形を呈する。

60 土坑は不整円形の土坑で、直径 1.9 m、深さ 0.15 mをはかる。断面逆台形を呈する。57 溝を切る。

61 土坑は長円形の土坑で、直径 1.25 m、深さ 0.2 mをはかる。断面皿形を呈する。58 溝を切る。隣接する(その5)・(その6)調査区でも同様の土坑が検出されているが、用途、機能は不明である。

55 流路(図42) 2区北端から3区にまたがって55流路を検出した。55流路は、(その6)調査区で検出した流路の延長と考えられ、北西から南東に主軸をもつ大規模な流路である。地形に即して、南東から北西に流れていたと考えられる。

2区と3区で検出したが、幅が10.0 m、深さ 1.0 m以上をはかる。3区では調査区幅が狭小となるため平面形はほとんど確認できず、調査区の法肩断面で55流路の川幅を確認した。55流路は隣接する(その6)調査区の流路が延伸してきたもので、(その6)調査区東端からはかると全長 80.0 m以上となり、さらに調査区を抜けて西へとびてゆく(図44)。上層にはオリーブ黒色シルトが堆積し、下層になると暗緑灰色や灰色のシルトへ極細砂がラミナ状に堆積する(写真図版13-3)。最下層には有機物を含む茶褐色シルトから粘質土が堆積していた。

最下層中から、縄文時代晚期前半から弥生時代前期の土器が少量出土する。(その6)調査区の流路では、縄文時代晚期の土器と共に、古墳時代の土器も含まれるようである。よって、縄文時代晚期から機能していた流路であるが、廃絶時期は弥生時代前期か、さらに新しい古墳時代となるかは不明である。

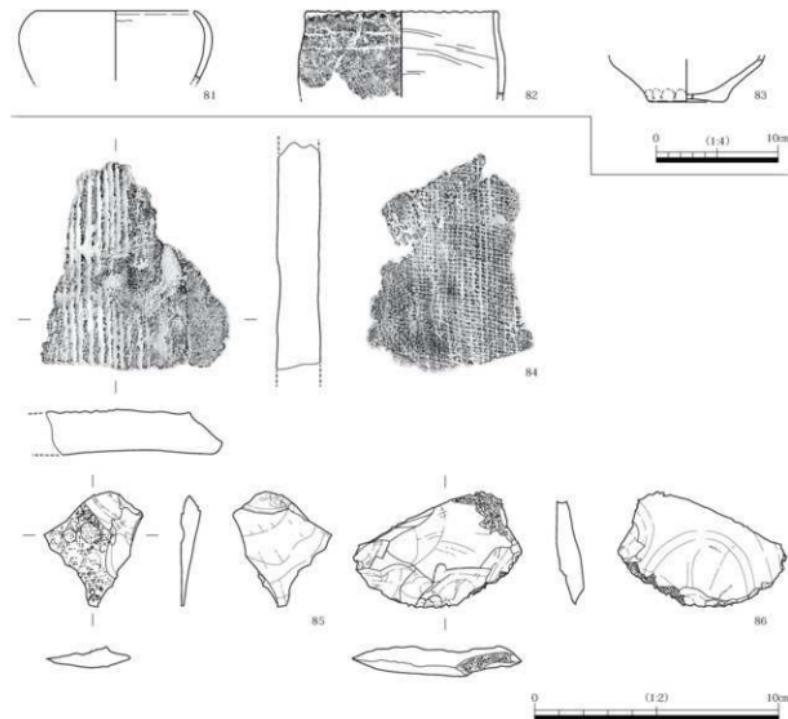


図43 第11a層・55流路出土遺物実測図

143溝(図42) 3区では北端で北西—南東を主軸とする143溝を検出した。幅2.0m、深さ0.15mをはかる。隣接する(その1)調査区の溝の延長となる溝で、合わせて100m以上の長さとなる。

第12a面では、流路や溝などを検出した。上層包含遺物や55流路出土遺物から、縄文時代晩期から弥生時代の遺構面と考える。

(3) 遺物(図43、写真図版19・20)

81は1区の第11-1a層から出土した弥生土器鉢であり、底部を欠損する。胸部の最大径が器高的中心よりかなり上にあり、そこから内傾する口縁部は細く、先端は丸い。剥離が著しく外面の調整は不明だが、内面はナデと思われる。器形から、弥生時代前期のものと思われる。

82・83は2区の第12a面55流路から出土した。

82は縄文土器深鉢である。体部下半から底部は欠損する。口縁部からわずかに膨らむが、ほぼ垂直に下にのびる。口縁部は波状口縁、外面は口縁部と胸部の境に、口縁部と平行する沈線を2条巡らす。胸部外面には右斜め下がりの貝殻条痕をもつ。胸部内面は板状工具によるナデで、工具痕が残る。胎土には、石英やクサリ礫を含む。

縄文時代晩期前半、滋賀里Ⅲb式～Ⅳ型式のものである。(その1)・(その2)調査区の河川堆積層

や土坑などの遺構から、縄文時代晚期、滋賀里式や船橋式の土器が一定量出土している。事業地西側北半のみならず、南半でも縄文時代晚期の土器が出土した事は、当該期に広い範囲で人が活動していた事の証左となる。

83は弥生土器壺底部である。底径6.8cmで、底部に胴部を貼り付けた際のユビオサエがみられる。体部は摩耗のため調整は不明である。器形からは、弥生時代前期のものか。

84は3区の第11層から出土した平瓦である。3方向は欠けるが、狹端面は残る。凸面には縄状のタキ痕が、凹面には布目痕が残り、側縁はケズリ後ナデ消している。古代の瓦であるが、詳細な時期は不明である。

85・86は1区の第11-1a層から出土した。85はサヌカイトの削片で、石核から剥離した後、加工されていない。

86もサヌカイトで、石器の未製品である。スクレイバーなどに加工途中のものか、下端を細かく打ち欠き刃部を作り出そうとした痕跡がみられる。

第3章 遺物に関する参考文献

- 家根祥多「晚期の土器 近畿地方の土器」『縄文文化の研究 縄文土器II』 1981 雄山閣
『須恵器のものさし』 2006 大阪府立近つ飛鳥博物館編
中村浩『須恵器集成図録1』近畿編 1995 雄山閣
『古代の土器I 都域の土器集成』 1992 古代の土器研究会編
『概説 中世の土器・陶磁器』 1995 中世土器研究会編 真陽社
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』 第3号
1996 (財) 京都市埋蔵文化財研究所
青木修「片口鉢の研究—中世知多古窯跡群を中心として—」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』 第1輯
1993 (財)瀬戸市埋蔵文化財センター
『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世常滑系』 2012 愛知県史編纂委員会
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として」 1978 『九州歴史資料館研究論集』 4
「天神畑(てんじんばた)遺跡出土の鎌倉時代の櫛(くつわ)について」 2011. 7 (財)滋賀県文化財保護協会報道提供資料

第4章 総括

第1節 遺構面の変遷

第3章第2節では、調査を開始した第3 a面から最終面の第12 a面まで、各遺構面の調査結果を検出遺構、出土遺物からみてきた。

(その7) 調査区の調査をもって、事業予定地西半の調査は大部分が終了した事となる。

当調査区は恩智川沿いの南北に長い狭小な区域でもあるので、当調査区だけでは遺構のつながりが不明瞭な部分もある。また、恩智川の堤防造営や越流による浸水、削平などによって、遺構面の残存状況が良好ではなかった。そこで、隣接する調査区も含めてこれまで調査した全域を概観する事で、遺構面の変遷を追いたい((その6)調査区については、(その7)調査区と同時期に発掘調査を終了し、当センター報告書としての刊行が予定されているため掲載した)。

(1) 縄文時代晚期以前(図44)

第12 a面もしくは第12 b面が相当する((その2)調査区のみ遺構面の呼称が他と異なるため、第9面下面が第12面に相当する)。

第10 a面より古い遺構面では畦畔などは検出されず、耕作地としての利用はされていなかったと判明している。

第11 a面と第12 a面で検出される遺構は、溝や流路等である。北東が高く、南西が低い地形であるため、水流も自然地形に沿って北東から南西へと流れる。

(その7)調査区では、2区から3区の南端にかけて、遺構を集中して検出した。なお、1区は第12 a面が掘削深度より低くなるため、調査を実施しておらず不明である。

(その7)調査区で検出した55流路は、(その6)調査区から続いて西にのびており、その全長は80.0 m以上に及ぶ。

55流路内から出土した遺物は、縄文時代晚期前半から古墳時代のものを含む事から、長期間存続した事がうかがえる。55流路より南の(その6)調査区では、多数の溝が55流路と切り合いながら、放射線状に広がっている。

(その2)調査区の第9面では、北東部の微高地で竪穴住居2棟や土坑、ピットなどが検出され、居住域だったと想定されている。縄文時代晚期の滋賀式、船橋式、長原式の土器が出土している。

(その1)調査区では、図44の第12 a面により

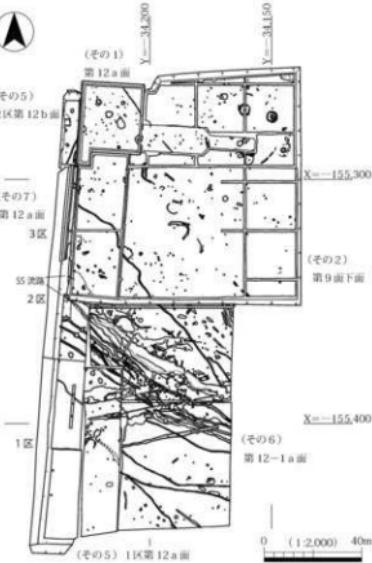


図44 第12 a面合成平面図

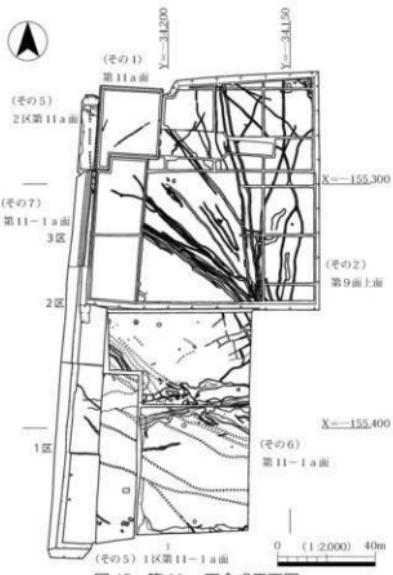


図45 第11a面合成平面図

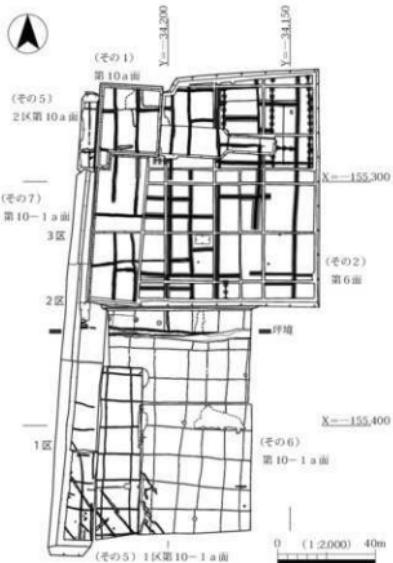


図46 第10a面合成平面図

古い段階の遺構面も調査しており、河川（第14b層）の堆積層からは縄文時代後期前半から中葉の滋賀里式土器や石器などが出土している。河川の堆積有機物や縄文土器に付着した炭化物の放射性炭素年代測定では、縄文時代後期末から晩期中葉の年代が示されている。

これらの事から、縄文時代後期には図44の区域の主に北東部で、人が居住していたと考えられる。なお、当遺跡より上流の大県遺跡でも縄文時代後期末～晩期中葉の集落が確認されている。

河川は縄文時代晩期中葉には埋没したものが多いが、55流路のように弥生時代前期か古墳時代まで機能していた可能性を持つものもある。

北東部の微高地では居住域が形成された。微高地より南西では、多数の溝やピットがみられるが、植物珪酸体分析からもヨシが生育する温潤な低地だったとされ、人間が居住する環境ではなかったと考えられる。

(2) 弥生時代～古墳時代(図45)

第11a面もしくは第11-1a面が相当する((その2)調査区では第7面～第9面上面が相当する)。

(その2)調査区では、南東から北や北西に流れる溝が多数検出される。(その2)調査区南東端で、ほぼ同位置から出る溝は放射線状に広がるが(その1)調査区まで到達し、検出される溝はわずかである。各溝は同規模で、幾重にも切り合っている。

縄文時代晩期同様、自然地形に沿って南東から北西に流れるかたちで溝が形成されたと思われる。

(その5)・(その6)調査区では、東から西に流れる溝や流路を検出している。また、(その6)調査区の北東部、(その2)調査区と接する区域では、部分的であるが小区画畦畔を検出している。

(その7)調査区では、東からの溝の延長が検出されるが、それ以外の遺構は検出していない。

1区では第10面、第11面間で洪水に起因する砂層(第10-2b層)の堆積が厚い。

弥生時代前期から古墳時代の遺物が少量ではあるが出土しており、第11面から第12面までは、当遺跡周辺に人が往来していた事が判明した。

(3) 古代(図46)

第8a面から第10a面が相当するが、(その7)の調査では、第8a面と第9a面は遺構面調査を実施していないため、第10a面のみ掲載した((その2)調査区では第6面が相当する)。ただし、(その2)・(その6)調査区では、第8a面や第9a面でも第10a面同様の南北長地型、あるいは格子状の水田区割を検出している。

第10a面は、ほぼ全域で遺構を検出している。

(その5)・(その6)調査区では、1辺10.0m四方の格子状の水田区画がみられる。ところが、(その1)・(その2)調査区にいくと南北の畦畔の間隔が約20.0mと長くなり、水田区画は正方形の格子状地割から南北長地型へと変化する。

北半では、水田区画は長方形を基本とするが、南北の畦畔が主畦畔となり、その間をつなぐ東西の畦畔は同一線上を通らない段違いになっている。畦畔は真方位にのっており、条里制に基づく地割であることは疑いない。

(その7)調査区では南端から約60mにわたって東西畦畔が確認されるが、南北畦畔の検出が少なく格子型地割になるかは不明である。また、畦畔を切って斜行する溝が(その7)・(その6)調査区南西で認められる。

第10a面からは飛鳥時代から平安時代中期までの遺物が出土しており、10世紀中頃までには条里制が施行されていたと考えられる。条里型地割が成立し、小区画から長地型へと地割が整備されてきたと思われる。調査区全域に水田区画がみられるので、耕作地としての利用が進んだ事がうかがえる。

(4) 中世(図47～49)

第3a面から第7-4a面が中世に相当する。

第7-1a～第7-4a面が中世前半期、第3a～第6a面が中世後半期と考えられる。

第7-4a面では、北半は残存状況がよくないため地割が不明だが、南西部では東西長地型の区割が確認された。特に、(その6)調査区では東西、南北の畦畔が検出されており、一筆の区画は南北10.0m、東西25.0mである。

第7-1a面は坪境にあたるX=-155,360付近に旧恩智川があり、それを境に調査区南北は東西長地型、調査区北半は南北長地型と地割の方向が明確に分かれている(図47)。ただし、南半は交差する畦畔がわずかしか検出できず、一笔の区画は不明である。畦畔と畦畔の間隔は11.0mだが、やや不均等な印象を受ける。また、畦畔以外には

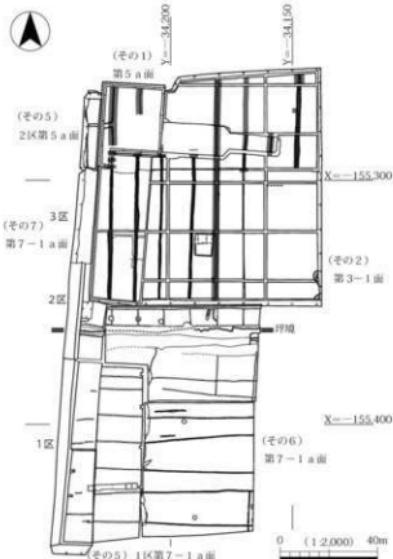


図47 第7-1a面合成平面図

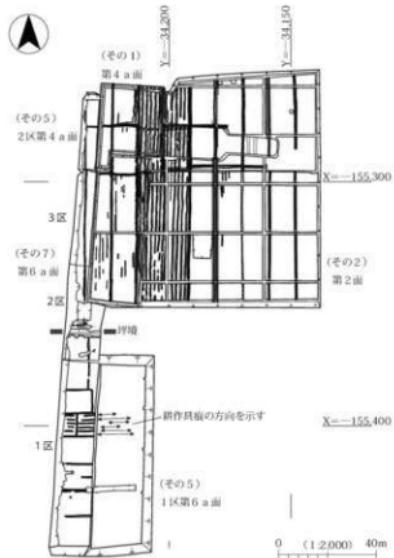


図48 第6a面合成平面図

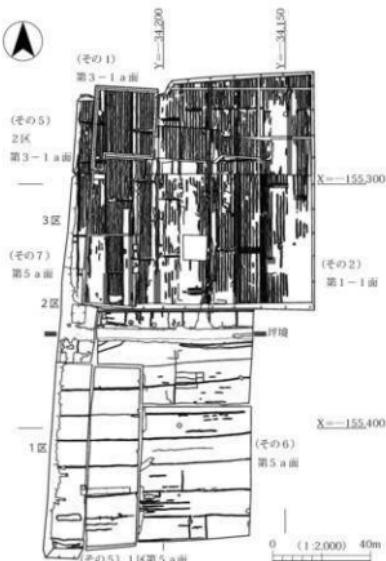


図49 第5a面合成平面図

畝溝等は認められない。

(その7) 調査区では、南側の1区で東西畦畔の痕跡が部分的に認められたのみである。

第6a面は、区域南半の(その5)・(その6)調査区では調査や報告がされていないため、詳細が不明であるが、上層の厚い砂層(第5b層)に覆われていた結果、東西方向の耕作具痕や足跡が検出されている(図48)。

(その7) 調査区では、1区から2区坪境辺りまでは、疎らであるが東西の畦畔とそれに交差する南北畦畔、その畦畔に囲まれた区画の中に東西方向の畝溝が確認できる。東西畦畔の間隔は約10.0mだが、南北畦畔は2本検出したのみで四方を畦畔で囲まれた区画は検出できていないため、一筆の区画は不明である。

坪境よりやや北のX=-155,370以北や3区になると、南北畦畔とそれに平行する南北の溝が検出されるが、東西畦畔は検出されない。

北東部の(その1)・(その2)調査区、(その5)調査区の2区では南北畦畔が主畦畔となり、それに交差する東西畦畔も部分的にみられる。水田一筆の区画は南北20.0m、東西10.0mである。一筆の区画内には、2.0m間隔で5本程度の畝溝が均等に並ぶ。

第7-1a面、第7-4a面と同じく坪境より北は南北長地型、南は東西長地型の地割で、部分的に畝溝がみられる事から、水田から畠への一部転作も考えられる。第6a面は出土遺物から13世紀後半から14世紀代の遺構面と考えられる。

第5a面では全域から長地型の地割が検出された(図49)。

区域南半、(その5)・(その6)・(その7)調査区のX=-155,360(坪境)付近を境として、その北と南で地割の方向が変化しているのが明瞭である。

南半は東西に長い地割で、東西畦畔の間に南北畦畔がY=-34.190～-34.200間までは認められる。それ以外では南北畦畔は消失する。また、

畝溝になると思われる東西方向の溝もわずかに認められるが、北半に比べると、遺構の残存状況がよくない。

坪境より北の北半では、南北長地型の地割に変わる。南北、東西の畦畔とも検出され、一筆の区画は南北 35.0 ~ 38.0 m、東西 10.0 m である。北半はほぼ全域で一筆の区画の中に、南北方向の畝溝が密にみられる点が、南半と大きく異なる。畝溝は一筆の区画内に、およそ 0.1 ~ 0.15 m 間隔で 8 本程度が均等に並ぶ。

第 5 a 面はほぼ全域で耕作遺構が広がり、坪境を境に南北長地型から東西長地型への区画割の変化が明瞭である。土地利用のあり方も北半は畠、南半は水田と異なる。低いところを水田に、高いところを畠にしたとも推測されるが、南北で地表面の高低差はさほどない事から、利用目的の違いは他の要因もあると推測する。

第 5 a 面は中世後半期、15 世紀前半代の遺構面と考えられる。第 5 a 面が耕作の区画割が確立した一つの画期と捉える事ができる。

第 3 a 面から第 4 a 面にかけても、東西長地型の水田や、その中に部分的に畝溝は検出されているが、北半の（その 1）・（その 2）調査区の詳細が不明である。その上層の近世期にあたる第 2 面では、島畠が確認されている。

縄文時代晩期には微高地を利用して一部では居住域が形成されたが、それ以外は河川や溝などが主であった。それ以降も弥生時代から古代のある時期までは、近隣に人が住んでいた痕跡は追えるが、明確な居住域や生産域は検出されず、その縁辺部だった可能性が高い。

第 10 a 面以降になると、いずれの遺構面でも南北、東西の畦畔は、現在の座標値の真方位にほぼ平行な位置に造られている。10 世紀には条里制を意識した土地区画割が成立し、12 世紀から 15 世紀には条里型水田が完成する遺構面の変遷を追う事ができた。当地では古代から近世まで連続して、広範囲に耕作されていた生産域であった事が判明した。今回の調査は、これまでの大郡条里遺跡の調査成果を裏付け、より補強したと言える。

第2節 大県郡条里遺跡出土の蓮華文軒丸瓦

今回の調査では、上層面からではあるが、古代の蓮華文軒丸瓦が1点出土した（図50-1）。

瓦当のごく一部のみの出土であり、残存状況は良くない。また、出土層位も中世後半期の包含層であるため、機能していた遺構面出土資料ではないが、当遺跡近隣の古代寺院との関連も示唆されるため、ここでとりあげてみたい。

なお、既往の（その2）調査でも、平安時代後期と目される包含層から蓮華文軒丸瓦が1点出土している（図50-6）。これもあわせて、今一度検討したい。

50-1の瓦当は1区の第4a層から出土した（第3章第2節参照）。軒丸瓦だが瓦当の4分の1弱程度の残存状態であり、丸瓦は剥離して存在せず、瓦当のみとなっている。

瓦当の外区は失われ、中房も径の中心までは残っておらず、蓮子は2、3点確認されるのみである。従つて、瓦当径も残存径の約2倍、約18.0cmとしか推測できない。蓮子径は0.7cmと大きい。複弁2組の間にT字状の棒芯が入る。複弁の連弁が二葉とその外側にも確認されることから、複弁八葉蓮華文軒丸瓦と推測される。瓦当は剥離しており厚みは1.5cmと薄く、瓦当断面は平らではなく、凸レンズ状に外り気味である。

川原寺式軒丸瓦であり、川原寺の創建年代から7世紀後葉か、それよりやや後で作られた奈良時代初めのものであろう。

古代において、当遺跡の南東、生駒山麓の東高野街道沿い1.0～2.0kmにわたって、「河内六寺」と称される寺院が建ち並んでいた（図3-1・3-2、第2章第2節参照）。「河内六寺」とは、『続日本書紀』天平勝宝8（756）年2月条に、「戊申、行幸難波、是日、至河内国、御智識寺南行宮、己酉、天皇幸智識、山下、大里、三宅、家原、鳥坂等六寺礼仏」という記述がある事により、この六つの寺が「河内六寺」と称されている。この条の記載から、孝謙天皇が756年2月24日、平城宮から難波宮に行幸の際、智識寺南行宮に立ち寄り、翌日に河内六寺に行幸した事が分る。

河内六寺は地名や考古学的成果から研究が重ねられ、現在では智識寺が太平寺廃寺、山下寺が大県南廃寺、大里寺が大県廃寺、三宅寺が平野廃寺、家原寺が安堂廃寺、鳥坂寺が高井田廃寺に該当するとされ、三宅寺以外はほぼ確定している。

河内六寺やそれと比較的近い距離の寺院跡からは瓦が一定量出土しており、報告書などで報告されている。このうち、図50-1と類似するものを図50-2～5にまとめた。智識寺跡、鳥坂寺跡、原山廃寺（原山廃寺は現在の大阪府柏原市、河内国安宿郡尾張郷に存在した寺院、鳥坂寺よりさらに2.5km南に位置する）などからの出土である。

特に、50-2の智識寺跡出土資料は、中房や蓮子の大きさが50-1と似る。

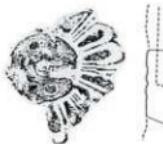
50-2は中房がすべて残り、中房径は5.5cmである。連子は1点を中心置き、その周りに8点が配されている。外区は失われているが、複弁の蓮弁は二葉が3対とその外側にも確認され、これで径のほぼ2分の1を占める事から、複弁八葉の蓮華文軒丸瓦と推察される。瓦当の厚みは2.0～2.5cmである。50-4も智識寺跡出土資料である。中房は残らず、外区が一部残る。外縁幅が2.0cmと広い印象を受ける。

智識寺は大阪府教育委員会によって、東塔跡が発掘調査され、基壇の一部が確認されている。軒丸瓦は素弁蓮華文、重弁蓮華文、複弁蓮華文、重圓文が出土しており、7世紀中頃から後半の創建と考えら

<複弁八葉蓮華文軒丸瓦>



1



2



3

1. 大県郡条里遺跡7 (2・4と対照しやすくするため、図16とは天地逆にして掲載)
- 2・4. 聰義寺跡
3. 原山廃寺
5. 鳥坂寺跡



4



5

<重弁蓮華文軒丸瓦>



6



7



図50 出典：

1. 本報告書『大県郡条里遺跡7』図16-6 2021 (公財)大阪府文化財センター
- 2～4. 近藤康司「2. 捷河泉の川原寺式軒丸瓦」第96図より抜粋『古代瓦研究Ⅲ—川原寺式軒丸瓦の成立と展開—』2009 奈良文化財研究所
5. 「鳥坂寺跡発掘調査報告書」図11-29 2011 柏原市教育委員会
- 6.『大県郡条里遺跡2』図18-195 2015 (公財)大阪府文化財センター
- 7.『鳥坂寺跡発掘調査報告書』図48-154 2011 柏原市教育委員会

図50 大県郡条里遺跡と周辺出土の蓮華文軒丸瓦

れる。

50-3の原山廃寺出土資料は、外縁がわずかに欠損する以外は瓦当がほぼ残る良好な資料である。直径18.8cm、外区幅1.6cm、中房径が7.9cmをはかる。複弁がすべて残り、外区には鋸歯文が施される。中房径が50-1、50-2と比較すると大きく、蓮子が中房内に1+5+9の15点配されているのが50-1、50-2と異なる。

50-5は鳥坂寺跡出土資料である。中房は失われ、外区も一部を残し欠損するが、複弁の長さや複弁と複弁の間に明瞭にT字状の棒芯がみられる点が50-1、50-2とは異なる。

50-1と50-2はどちらも小片で同瓦かは不明だが、地理的にも近いことから、今回大県郡条里遺跡から出土した軒丸瓦は、智識寺との関係が最も密接と考えられる。

また、平成24~26年度に実施された、その2調査区の第6a層でも、蓮華文軒丸瓦が1点出土した(図50-6)。

50-6は瓦当部が4分の1程度の残存状態で、瓦当部分のみで丸瓦は剥離している。瓦当も外区は残るが、中房は残らない。推定直径が約17.0cmで、瓦当の厚さは2.5cmである。外縁と文様の間に1.0cm強の周環が巡る。連弁は単弁であるが二重に重なっている事から、重弁蓮華文軒丸瓦と言える。花弁の数は七葉もしくは八葉で、弁端は尖っており、外区は素文と思われる。

50-6に類似しているのが、鳥坂寺講堂東跡から出土した重弁七葉蓮華文軒丸瓦である(図50-7)。鳥坂寺跡は図3-2で示しているように、河内六寺の最も南にあり、家原寺跡よりさらに1.0kmほど南東に位置する。河内六寺のなかで、唯一、発掘調査によって主要伽藍の配置が確認されており、7世紀中頃から後半の創建と考えられる。

50-7は、重弁七葉蓮華文軒丸瓦である。直径17.6cm、中房径4.8cm、外縁幅は0.8~1.0cm、瓦当の厚さは3.2cmをはかる。外区は素縁である。周環の幅や、蓮弁の大きさ、弁端の尖り具合などが50-6に似る。

智識寺と当調査区との直線距離は約1.7km、鳥坂寺と当調査区との直線距離は約3.1kmである。陸路でも、あるいは川の水運等を利用して、往来や交流は十分可能な距離であろう。今回紹介した軒丸瓦は、中世の包含層からの出土であるため、いつ、どのように移動したかは不明確な点もある。ただし、古代の遺構面で、硯に転用した須恵器蓋も出土しており、識字層が当遺跡周辺にいた事も示唆される。

大県郡条里遺跡は、古代から近世に至る耕作遺構の遺跡と知られている。その大県郡条里遺跡から少量ではあるが、奈良時代に隆盛を誇った古代寺院の瓦に近似した軒丸瓦が出土した事は、耕作地以外の利用もあった可能性も考えられる。

参考文献

- 近藤康司「2. 摂河泉の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅲ—川原寺式軒瓦の成立と展開—』 2009 奈良文化財研究所
『鳥坂寺跡発掘調査報告書』 2011 柏原市教育委員会
『鳥坂寺再興—平成24年度夏季企画展示図録—』 2012 柏原市立歴史資料館
『河内六寺の輝き—平成19年度夏季企画展示図録—』 2007 柏原市立歴史資料館

表3 遺物観察表

遺物番号	掲図番号	写真番号	調査区分 層・面・遺構名	種別 器形	法量(cm)			色調	時期	調整・特徴など
					上径・長	底径・幅	器高・厚			
1	15	15	1区 第4-1 a・ 第4-2 a層	瓦質土器 縦縫	—	—	(4.8)	外: 2.5YR8/2 灰黄 内: 2.5YR1 黄灰	中世後期	外: ヨコナデ、ケズリ 内: ヨコナデ
2	15	15	1区 第4-1 a・ 第4-2 a層	瓦質土器 縦縫	—	—	(5.5)	外: N 4/0 灰 内: N 5/0 灰	中世後期	外: ヨコナデ、ケズリ 内: ヨコナデ、ナデ、ハケヌ
3	15	—	1区 第4-1 a・ 第4-2 a層	須恵器 把手付容器	—	—	(6.2)	種: 10Y4/2 オリーブ灰 外: N7/0 灰白 内: N7/0 灰白	—	外: ナデ、自然釉付着 内: 上方ヨコナデ、下方タテナデ
4	15	—	1区 堤部上溝(第3 a層)	磁器(焼付) 碗	[11.2]	4.8	5.3	外: 2.5GY8/1 白灰 内: 5GY8/1 灰白	近世	外: 梅花文、三重團頭 内: 蛇の目輪刻頭 高台部に重ね焼の筋が付着
5	15	—	2区 撒瓦	陶器(清焼) 火鉢	—	—	(10.4)	外: 7.5YR8/3 に5.5赤 内: 7.5YR4/2 灰褐	近世	外内: 回転ナデ 外内: 交番貼り付け
6	16	15	1区 第4-1 a・ 第4-2 a層	瓦 軒瓦	(8.5)	(6.0)	(1.5)	表: N7/0 灰白	飛鳥時代 末~奈良 時代初	複数葉草文軒丸瓦 川原式
7	16	15	2区 撒瓦	金屬製品 鍔(梵文質)	2.5	2.5	0.1	—	近世	銘文撰 露食により「通」の右下辺に孔が生じている
8	16	15	3区 表採(第3 a層)	金屬製品 鍔残	2.5	2.5	0.1	—	—	銘文表 真永通寶か
9	16	15	1区 第4-1 a・ 第4-2 a層	金屬製品 笄	18.9	1.4	0.2	—	近世	赤褐色 手元に櫛先は正面に向けて曲出す 地盤に魚子地
10	16	—	1区 第4-1 a・ 第4-2 a層	金屬製品 笄用	(8.7)	1.75	0.3	—	—	鉄製品、全体的に鍛付着 先端に鉄約の突起をもつ
11	16	15	1区 第4-1 a・ 第4-2 a層	木製品 角材状製品	(17.8)	2.0	1.9	—	—	何かの部材の一部か、柄穴を2箇所 もつ、木釘状の痕跡あり
12	16	15	1区 第4-1 a・ 第4-2 a層	木製品 曲直材成版	12.4	(2.9)	0.4	—	—	杉などの針葉樹材
13	19	15	1区 第5 a・ 第5 b層	瓦質土器 縦縫	—	—	(5.7)	外: 5Y4/1 灰 内: 5Y4/1 灰・ 2.5Y6/2 灰黄	中世後期	外: 口縫部ヨコナデ。体部縫方向 のヘラケズリの後、ハケナデ 内: ヨコナデ、摩耗を受けている
14	19	15	1区 第5 a・ 第5 b層	瓦質土器 羽茎	—	—	(4.7)	外: 5Y6/1 灰 内: 2.5Y6/1 黄灰	中世後期	外内: ナデ 径2~5mmの黒色縫を含む
15	19	15	3区 第5 a層	磁器(白磁) 皿	—	[7.0]	(0.6)	外: 5Y8/1 灰白 内: 5Y7/2 灰白	中世後期	糸切り底で底部外縫線にも輪残る
16	19	—	2区 第5 b層	瓦 平瓦	(7.3)	(8.0)	2.5	凸面: N4/0 灰 凹面: N7/0 灰白	中世後期 ?	凸面: 砕片、格子状のタキ痕残る 凹面: 弧状の圧痕
17	19	—	1区 第5 a・ 第5 b層	瓦 平瓦	(5.5)	(3.7)	2.2	凸面: N4/0 灰 凹面: N4/0 灰	中世後期 ?	凸面: 磬タカキ 凹面: 弧状の圧痕
18	22	16	1区 第6 a層	瓦器 桶	[11.4]	—	(2.7)	外: N4/0 灰・ 2.5Y8/1 灰白 内: N4/0 灰・ 2.5Y8/1 灰白	鎌倉時代	外: 口縫部ヨコナデ、体部ナデでわ ずかにユビオサエ残る 内: ヨコナデ
19	22	16	1区 第6 a層 (南側溝)	須恵器 こね跡	—	—	(4.3)	外: N6/0 灰 内: N6/0 灰	鎌倉時代 前期	東播系 外内: 回転ナデ、ヨコナデ
20	22	16	1区 第6 a層	須恵器 こね跡	—	[10.8]	(4.5)	外: 5Y6/1 灰 内: 5Y6/1 灰	平安時代 後期	東播系 外: 回転ナデ、ナデ 内: 回転ナデ、使用により摩耗して 径3~4mmの白色縫を含み、胎土 やや粗
21	22	16	1区 第6 a層	陶器 (偏焼) 盆鉢	—	—	(6.0)	外: 2.5YR5/3 に5.5赤褐 内: 2.5YR5/3 に5.5赤褐	鎌倉時代 前期	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ、描目あり
22	22	16	3区 第6 a層	土師器 盆鉢	[23.6]	—	(3.0)	外: 10YR8/2 灰白 内: 10YR8/2 灰白	鎌倉時代 後期	外: 口縫部ヨコナデ。体部ナデ 内: ヨコナデ
23	22	16	2区 第6 a層	磁器(白磁) 皿	—	[8.0]	(1.8)	外: 7.5Y7/1 灰白 内: 7.5Y7/1 灰白	中世前期	—

表3 遺物観察表

遺物番号	掲載番号	写真枚数	調査区分 層・面・遺構名	種別 器形	法量(cm)			色調	時期	調整・特徴など
					上径・長	底径・幅	器高・厚			
24	22	—	3区 第6a層	陶土器 瓶	—	[4.0]	(1.9)	外:7.5YR6/4に似る 内:2.5Y4/1 黄灰	弥生時代	外:ヨコナデ 内:ナデ
25	22	—	1区 第6a層	木製品 杭木製品	6.0	1.9	2.0	—	—	刃物による刻み痕、斜めの擦痕あり
26	29	—	1区 第7-1a・ 第7-2a層	瓦器 椀	[12.8]	—	(2.9)	外:N5/0灰 内:2.5Y7/1 灰白	縄文時代 後期	外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ミ ガキ
27	29	17	1区 第7-1a・ 第7-2a層 (西側溝)	瓦器 椀	[13.0]	—	(3.4)	外:N4/0灰 内:N5/0灰	縄文時代 前期	外:口縁部ヨコナデ、体部トゲ 内:口縁部ヨコナデ、体部1～ 2mmのミガキ。見込みは平行線 ミガキ
28	29	—	1区 第7-1a・ 第7-2a層	瓦器 椀	[11.6]	—	(2.5)	外:5Y7/1 灰白 内:2.5Y7/1 灰白	縄文時代 後期	外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内:口縁部ヨコナデ、体部ミガキ
29	29	17	3区 第7a層	瓦器 椀	—	[4.8]	(2.6)	外:N4/0灰 内:N4/0灰	平安時代 後期	外:ナデ、ユビオサエ 内:ナデ、幅4mmの太いミガキ
30	29	16	2区 第7-1a面 54流跡	瓦器 椀	[12.2]	—	(3.5)	外:5Y8/1 灰白 内:5Y8/1 灰白	縄文時代 後期	外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ミ ガキ
31	29	—	2区 第7-1a～ 第7-3a層	瓦器 椀	[12.4]	—	(2.4)	外:N6/0灰 内:N6/0灰	縄文時代 後期	外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内:口縁部ヨコナデ、体部ミガキ
32	29	17	2区 第7-1a～ 第7-3a層	瓦器 皿	[9.2]	—	1.7	外:N4/0灰 内:N5/0灰	平安時代 後期	外内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ
33	29	16	2区 第7-1a面 54流跡	土師器 皿	[8.2]	—	(1.2)	外:10YR6/2 地黄褐 10YR6/2 地黄褐	縄文時代 後期	外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内:ヨコナデ
34	29	17	1区 第7-1a・ 第7-2a層	土師器 皿	[12.4]	—	2.0	外:7.5YR7/3に似る 10YR6/2 地黄褐 内:10YR7/3に似る 10YR6/2 地黄褐	縄文時代 後期	外内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ
35	29	17	1区 第7-1a・ 第7-2a層	土師器 皿	[9.0]	—	1.1	外:2.5Y6/2 地黄 内:2.5Y5/2 暗灰黄	縄文時代 前期	外内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ
36	29	—	3区 第7-2a層	土師器 皿	[8.6]	—	(1.4)	外:2.5Y6/2 地黄 内:2.5Y5/1 黄灰	平安時代 後期	外内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ
37	29	16	2区 第7-1a・ 第7-2a層 (堤沿溝内)	磁器 (青磁) 皿	[17.8]	[5.4]	(5.5)	外:7.5Y6/3 オリーブ黄 内:7.5Y6/3 オリーブ黄	平安時代 後期	同安窯系1類か 外:柳目文 内:ヘラによる片削りで開隙。その 中に柳でシグザグ文
38	29	17	1区 第7-1a・ 第7-2a層	陶器 (常滑焼) 瓶	—	—	(4.5)	外:10YR5/2 地黄褐 内:10YR4/1 地黄	縄文時代 後期	外:口縁部ナデ、体部ヘラケズリ。 ツバ状のものナデた面跡 内:ナデ 内外面とも火を受け全体に偏重着あり
39	29	17	1区 第7-1a・ 第7-2a層	瓦土器 羽釜	—	—	(3.1)	外:5YR7/3に似る 内:5YR7/2 明褐灰	中世後期	外内:口縁部ヨコナデ、体部ナ デ
40	29	17	3区 第7a層	土師器 ミニチュア 土器 高杯	—	[4.4]	(2.8)	外:2.5Y6/2 地黄 内:2.5Y6/2 地黄	—	外内:ナデ
41	29	16	2区 第7-1a・ 第7-2a層	陶器 鉢	—	[13.6]	(5.3)	外:2.5Y7/1 灰白 内:2.5Y6/1 黄灰	平安時代 後期	常滑窯片地鉢1類か 外:回転ナデ、ケズリ、ユビオサエ 内:回転ナデ、ナデ。使用によりか なり摩耗
42	29	17	2区 第7-1a面 精査	須恵器 こね棒	—	[8.0]	(2.7)	外:5Y6/1 灰 内:5Y6/1 灰	平安時代 後期	織繩系 外:回転ナデ、ケズリ、ユビオサエ 内:回転ナデ
43	30	17	1区 第7-1a・ 第7-2a層	瓦 平瓦	(11.0)	(10.1)	(1.9)	凸面:N4/0灰 凹面:N3/0暗灰	中世	凸面:布目模
44	30	—	3区 第7a層	瓦 平瓦	(6.0)	(4.5)	(2.2)	凸面:5Y7/1 灰白 凹面:N3/0暗灰	中世	凹面と扶端面は火を受けて炭化して いる

表3 遺物観察表

遺物番号	掲載番号	写真枚数	調査区分 層・面・遺構名	種別 器形	法量(cm)			色調	時期	調整・特徴など
					上径・長	底径・幅	器高・厚			
45	30	—	2区 第7-1 a・ 第7-2 a層 (東部溝内)	石材	6.9	4.8	3.3	—	—	サヌカイト 石移から打ち欠いたままの状態と思われる
46	30	—	2区 第7-1 a～ 第7-4 a層 (西側溝)	石材	5.6	5.1	2.8	—	—	サヌカイト 石移から打ち割った際に生じた破片と思われる
47	31	18	3区 第8 a層	瓦器 碗	[17.8]	[5.3]	6.2	外: N4/0 黄 内: N4/0 黄	平安時代 後期	外: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ミ ガキ。見込みは格子状ミガキ
48	30	—	1区 第9 b層	瓦器 碗	—	[7.6]	(2.0)	外: N4/0 黄 内: N4/0 黄	平安時代 後期	外: ナデ、ミガキ 内: 見込みはおそらく格子状ミガキ
49	30	18	1区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	土師器 碗	7.0	5.2	—	外: 5Y7/2 黄白 内: 5Y7/2 黄白	奈良時代 後期～平安 時代初	把手: ヨコナデ、ナデ 石英、クサリ縫? を含む
50	31	—	2区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	土師器 碗	[15.0]	—	(4.8)	外: 2.5Y6/3 に赤い黄 内: 2.5Y6/2 黄	平安時代 中期か	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
51	31	18	1区 第9 b層	土師器 碗	[12.6]	—	(2.8)	外: 2.5Y7/2 黄 内: 2.5Y7/3 黄	平安時代 中期	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
52	31	18	1区 第9 a層	土師器 杯	[14.2]	—	3.8	外: 7.5Y8/3 深黄 内: 7.5Y8/4 深黄	平安時代 前期	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
53	31	—	1区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	土師器 皿	[13.0]	—	(1.9)	外: 2.5Y7/3 浅黄 内: 2.5Y7/2 黄	平安時代 中期	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
54	31	—	2区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	土師器 杯	[15.6]	—	(3.0)	外: 2.5Y7/2 黄 内: 2.5Y7/2 黄	平安時代 中期	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
55	31	—	1区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	土師器 皿	[8.4]	—	1.9	外: 2.5Y6/3 に赤い黄 内: 2.5Y6/2 黄	平安時代 後期?	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
56	31	—	2区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	土師器 杯	[13.2]	—	(2.4)	外: 2.5Y6/2 黄 内: 2.5Y6/2 黄	平安時代 前期	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
57	31	—	2区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	土師器 皿	[11.8]	—	2.0	外: 5YR7/2 明闇灰 内: 5YR8/3 淡粉	平安時代 中期	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 丁寧なナデで器壁厚?
58	31	18	2区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	土師器 皿	[8.1]	6.6	1.5	外: 10YR7/2 に赤い黄 内: 10YR6/2 黄	平安時代 後期?	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、 螺付着している箇所あり
59	31	—	3区 第9 a層	土師器 皿	[10.2]	—	(1.4)	外: 2.5Y7/3 浅黄 内: 2.5Y7/3 黄	平安時代 中期	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
60	31	18	2区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	須恵器 杯身	[10.4]	—	(3.8)	外: 5Y7/1 黄白 内: 5Y7/1 黄白	飛鳥時代	外内: 回転ナデ 金芸母含む
61	31	18	1区 第7-4 a・ 第8 a・第9 b層 (西側溝)	須恵器 盤	—	5.2	(2.5)	外: 2.5G7/1 明オリーブ 灰 内: N7/0 黄白	奈良時代	外: 回転ケズリ、ナデ 内: 回転ナデ
62	31	—	3区 第8 a面精查	土師器 甕	—	—	(2.9)	外: 10YR6/4 に赤い黄 内: 10YR6/3 に赤い黄	古代	外: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ。 わずかにハバ状の痕跡残る 内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
63	31	18	2区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	土加脂 ミニチャウ 土師器 高杯	—	5.1	(4.7)	外: 5Y7/3 浅黄 内: 5Y7/3 黄	奈良～ 平安時代	外: ナデ、成形時のシボリナデ痕跡 残る。焼成時の黒斑あり 内: ナデ
64	31	18	2区 第7-4 a・第 8 a・第9 a層	金属製品 馬具	14.2	1.4	0.4	—	鐵舟時代 か	鈴の一部、引手 鉄製品、全体的に鍛付着
65	36	19	1区 第10-1 a層	須恵器 杯蓋	[13.8]	—	(1.9)	外: 5Y5/1 灰 内: N6/0 黄	奈良時代	外: 回転ヘラケズリ。 内: 回転ナデ 黒が→白色、白色砂粒を含む
66	36	—	1区 第10-1 a層	須恵器 杯蓋	[16.6]	—	(1.9)	外: N6/0 黄 内: N6/0 黄	奈良時代	外内: 回転ナデ

表3 遺物観察表

遺物番号	神奈川 県版	写真 図版	調査区 別・面・道標名	種別 器形	法量(cm)			色調	時期	調整・特徴など
					口径・長	底径・幅	器高・厚			
67	36	19	1区 第10-2 a面 42滴	須恵器 杯盤	[14.0]	—	(3.1)	外: 5PB5/1 青灰 内: 5PB6/1 青灰	古墳時代 後期	外: 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内: 回転ナデ、點付着部分あり 径 2~5mm の白色斑を含む
68	36	19	2区 第10 a・ 第11 a層	須恵器 転用器 (柄蓋を転用)	[12.8]	—	(1.9)	外: 5PB7/1 明青灰 内: 5PB7/1 青灰	平安時代 前期	外: 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内: 回転ナデ、腐食した痕跡が残る
69	36	19	1区 第10-1 a層	須恵器 杯身	[13.2]	—	(4.8)	外: 5PB6/1 青灰 内: 5PB5/1 青灰	古墳時代 後期	外: 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内: 回転ナデ
70	36	19	1区 第10-2 a・ 第10-2 b層	須恵器 杯身	[15.0]	12.8	3.4	外: N5/0灰 内: 5PB5/1 青灰	古墳時代	外: 回転ヘラケズリ、回転ナデ 内: 回転ナデ 径 1mm 以下の白色砂粒を含む
71	36	19	2区 第10 a面精査	土師器 杯	—	—	(3.7)	外: 5YT/2 灰白 内: 5YT/2 灰白	奈良時代	外: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内: 口縁部ヨコナデ、体部ミガキ、 幅 1mm の駆射線状ミガキが施 される
72	36	—	2区 第10 a面精査	土師器 皿	[11.6]	—	(2.1)	外: 5YT/1 灰白 内: 5YT/1 灰白	平安時代 中期	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
73	36	19	1区 第10-1 a層 (30 脊附付近)	土師器 皿	[10.2]	—	(1.7)	外: 10YR7/3 にぶい黄褐 内: 10YR7/3 にぶい黄褐	平安時代 中期	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
74	36	—	3区 第10 a層	土師器 皿	[9.0]	—	(1.7)	外: 2.5YT/2 灰黄 内: 2.5YT/2 灰黄	平安時代 中期	外内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ
75	36	19	1区 第10-2 a・ 第10-2 b層	弥生土器 壺	[11.6]	—	(4.9)	外: 10YR5/3 にぶい黄褐 内: 10YR6/3 にぶい黄褐	弥生時代 後期	外内: ヨコナデ、ナデ 径 2mm 程度の石英・クサリ織を含 む 生駒西麓産
76	36	19	1区 第10-2 a面 精査	弥生土器 高杯	—	—	(5.5)	外: 2.5Y6/3 にぶい黄 内: 2.5Y6/3 にぶい黄	弥生時代 後期	外: 調整不明。一部テテ方向ハケメ 痕あり 内: ナデかと思われるが摩耗著しい 径 4~5mm の石英・右肩若々。径 0.3~ 1mm の長石・右肩石・ク サリ織・雲母含む
77	36	—	1区 第10-2 a・ 第10-2 b層	弥生土器 壺	—	[9.0]	(2.1)	外: 10YR7/3 にぶい黄褐 内: 2.5YT/3 浅黄	弥生時代 前期	外: ヨコナデ、タテ方向のナデ。底 部に摩耗のため調整不明 内: ナデ、一部テテ痕あり 径 2mm 程度の白色斑を多く含む
78	37	20	1区 第10-2 a・ 第10-2 b層	石製品 台皿状製品	17.9	13.3	3.7	—	古代以前	表面・裏面ともに径 2~3mm の気 泡・裏面側面に摩耗痕
79	37	20	2区 第10 a・ 第11 a層	石製品 砥石	7.2	4.3	1.8	—	古代以前	砂岩質、表面側面に擦痕 仕上研磨
80	37	20	3区 第10 a層以下	石製品 砥石	6.8	4.1	2.2	—	古代以前	砂岩質、表面側面に擦痕 仕上研磨
81	43	19	1区 第11-1 a層	弥生土器 鉢	[13.0]	—	(5.7)	外: 10YR7/4 にぶい黄褐 内: 2.5YT/3 淡黄	弥生時代 前期	外: 調整著しく調整不明 内: ヨコナデ、ナデ 径 0.5~3mm の長石・石英・角閃石・ 赤灰色砂粒含む
82	43	20	2区 第12 a面 55 路面下層	縄文土器 深鉢	[16.0]	—	(7.0)	外: 10YR6/3 にぶい黄褐 内: 10YR7/2 にぶい黄褐	縄文時代 晚期前半	縄目裏 b~IV 式 外: ナデ、斜め下方の貝殻痕痕、右 斜め下方がりのケズリの痕跡 内: ナデ 径 1~5mm の石英・金雲母・チヤー トを含む
83	43	20	2区 第12 a面 55 流路	弥生土器 壺	—	[6.8]	(3.5)	外: 10YR5/3 にぶい黄褐 内: 10YR4/1 灰灰	弥生時代 前期?	外内: ナデ 径 1~2 mm の石英・金雲母・ク サリ織を含む、生駒西麓産
84	43	—	3区 第11 a層	瓦 平瓦	(8.5)	(5.5)	(1.7)	凸面: N6/0灰 凹面: N6/0灰	古代	凸面: 瓦状のタカキ痕、側縫はナデ 消す 凹面: 布目痕 幅 1~2mm の石英・金雲母・ク サリ織を含む
85	43	20	1区 第11-1 a層	石器 剥片	4.7	3.7	0.8	—	弥生時代	サヌカイト
86	43	20	1区 第11-1 a層	石器 未製品	6.9	4.7	1.0	—	弥生時代	サヌカイト、刃部加工、やや風化

写 真 図 版



1. 1区第3a面全景（北から）



2. 1区第3a面全景（南から）

写真図版2 遺構



1. 1区第4-a面近景
(東から)



2. 1区第4-2b面
検出状況 (南西から)



3. 1区第4-2b面
鉄溝断面 (南東から)



1. 2区第5a面南半全景（北から）



2. 2区第5a面81畦畔（南から）

写真図版 4 遺構



1. 3区第5a面全景（南から）



2. 3区第6a面全景（南から）



1. 1区第6a面全景（北から）



2. 2区第6a面全景（北東から）

写真図版 6 遺構



1. 1区第6 a面近景
(南西から)



2. 1区第6 a面近景
(北東から)



3. 2区第6 a面全景
(北から)



1. 1区第7－1a面全景
(南から)



2. 2区第7－1a面全景
(北東から)



3. 2区54流路断面
(西から)

写真図版 8 遺構



1. 1区第7-4 a面全景（南から）



2. 2区第7-4 a近景（北東から）



1. 3区第8a面全景（南から）



2. 3区第9a面全景（南から）



3. 3区第11a面全景（南から）



4. 3区第12a面全景（南から）

写真図版 10 遺構



1. 1区第10－1a面全景（南から）



2. 1区第10－2a面全景（南から）

写真図版 11 遺構



写真図版 12 遺構



1. 2区第12a面全景（北東から）



2. 2区第12a面近景（西から）



1. 2区56溝断面
(南東から)



2. 2区55流路
(東から)



3. 2区55流路断面
(東から)

写真図版 14 遺構



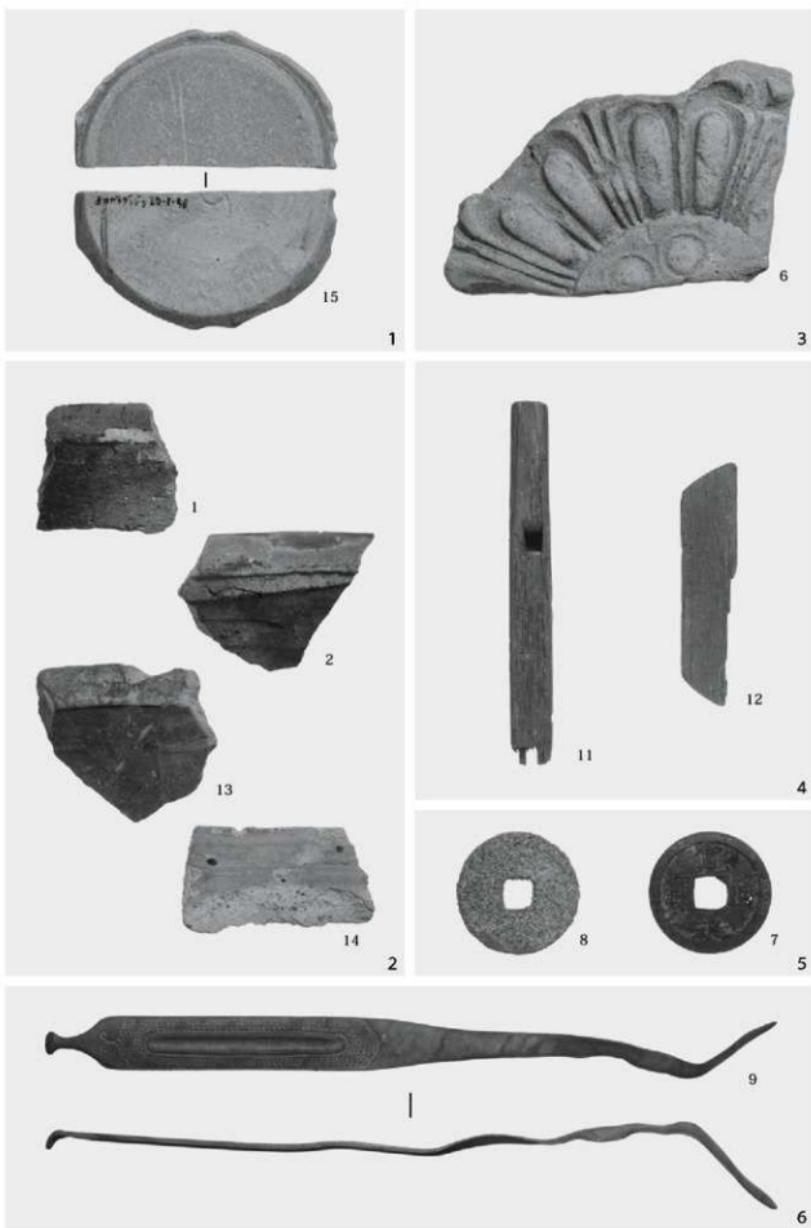
1. 1区南壁断面
(北東から)



2. 1区北壁断面
(南から)



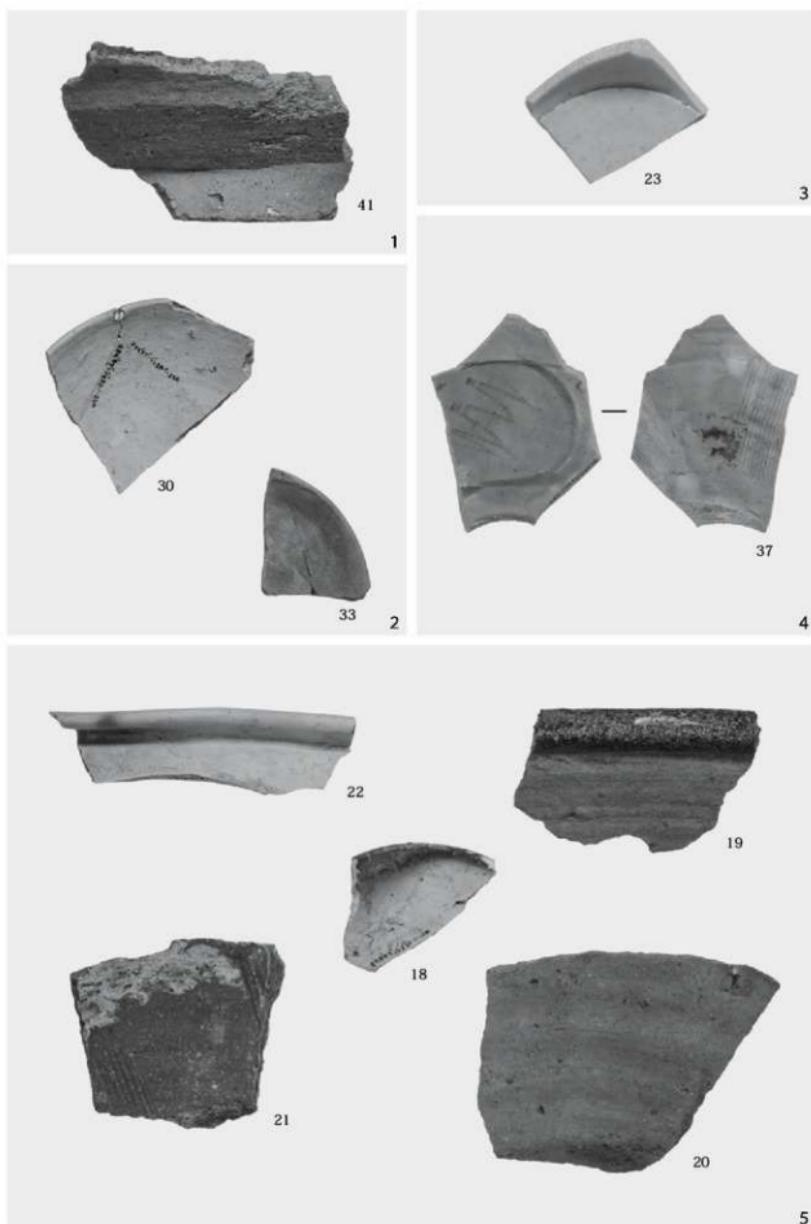
3. 3区南壁断面
(北から)



1. 第 5 a 層出土磁器
2. 第 4 a・5 a・5 b 層出土瓦質土器
3. 第 4 a 層出土軒丸瓦
4. 第 4 a 層出土木製品
5. 錢貨
6. 第 4 a 層出土金属製品

3. 第 4 a 層出土軒丸瓦

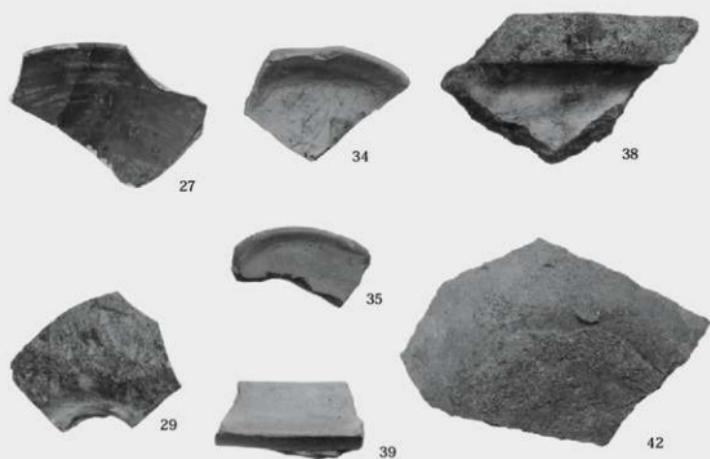
写真図版 16 遺物



1. 第7-1a・7-2a層出土陶器
4. 第7-1a・7-2a層出土磁器

2. 54流路出土瓦器・土器
5. 第6a層出土土器

3. 第6a層出土磁器



1



32

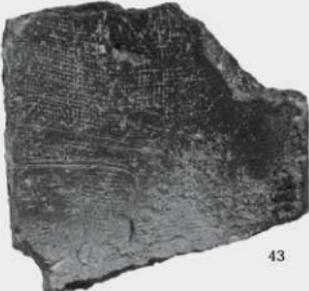


40

3



—



43

4

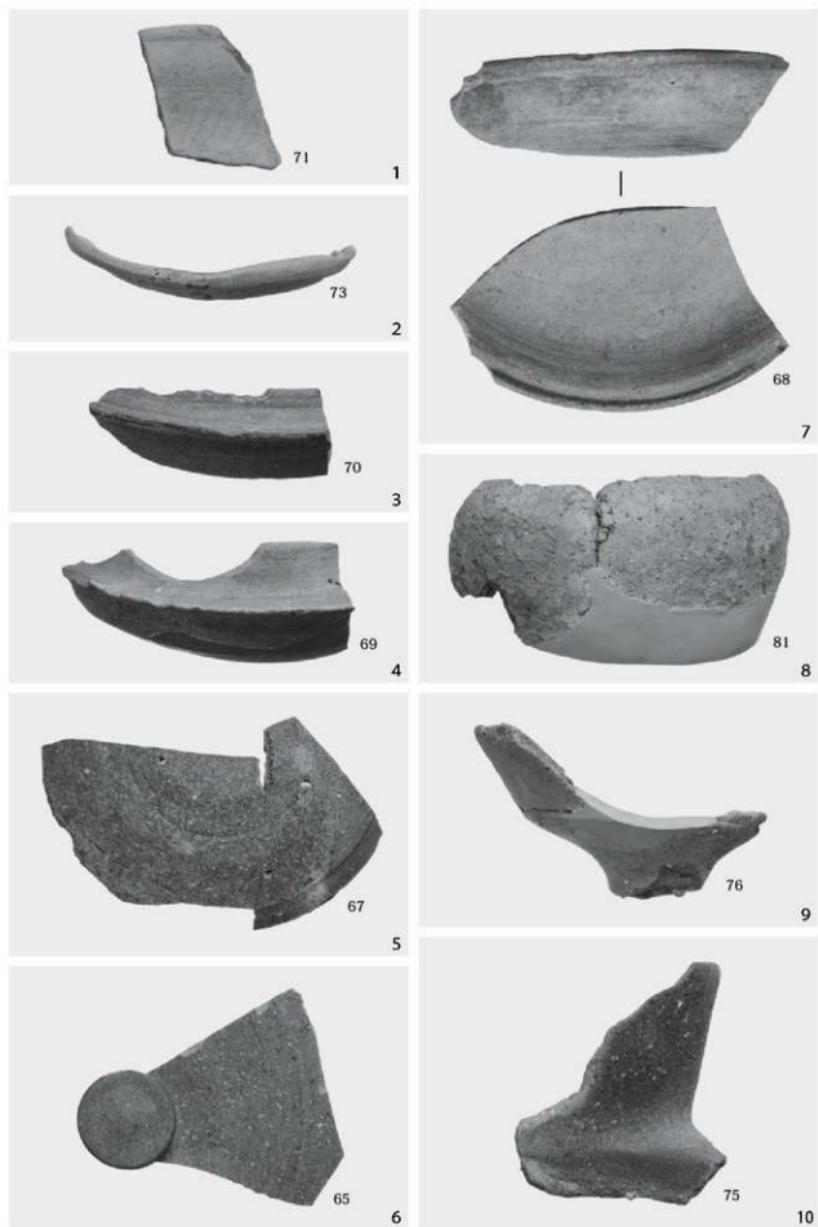
1. 第7-1a～7-3a層出土土器
3. 第7a層出土ミニチュア土器

2. 第7-1～7-3a層出土瓦器
4. 第7-1a・7-2a層出土平瓦

写真図版 18 遺物



1. 第7-4a・7-4b層出土陶器 2. 第7-4a~9a層出土須恵器 3. 第7-4a~9a層出土ミニチュア土器
4・5・7. 第7-4a~9a層出土土師器 6. 第9b層出土土師器 8. 第8a層出土瓦器 9. 第7-4a~9a層出土金属製品



1・2. 第10-1a層出土土器 3・4・6. 第10-1a~10-2b層出土須恵器
7. 第10a・11a層出土須恵器(転用硯) 8~10. 第10-2a~11a層出土弥生土器 5. 42溝出土須恵器

写真図版 20 遺物



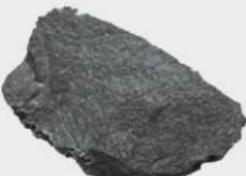
1



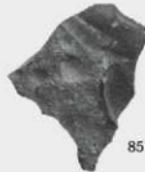
2



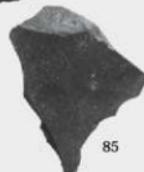
86



86



85



85

3



80



79



80



79

4

1. 55流路出土繩文土器・弥生土器
4. 第10a層以下出土石製品

2. 第10-2a・10-2b層出土石製品

3. 第11-1a層出土石器

報 告 書 抄 錄

公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第311集

大 県 郡 条 里 遺 跡 7

寝屋川水系改良事業（一級河川恩智川法善寺多目的遊水地）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2021年10月29日

編集・発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号